ISSN 2434-5113

CPHU研究報告シリーズ
研究報告No.56

チェルノブイリ・旧プリピャチ住民へのインタビュー記録（第二報）

編著：川野徳幸

September, 2018

広島大学平和センター
〒730-0053　広島市中区東千田町1-1-89
TEL 082 542 6975
FAX 082 245 0585
E-mail:　heiwa@hiroshima-u.ac.jp
URL:　http://home.hiroshima-u.ac.jp/heiwa/

CPHU研究報告シリーズ
研究報告No.56

チェルノブイリ・旧プリピャチ住民へのインタビュー記録（第二報）

編著：川野徳幸

目　次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

対象・方法、そしてプリピャチについて・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

凡例・謝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

附録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

ナターリャ・ベンシコワ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

ヴィクトリア・ベロコーニ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

ベロウーソヴァ・ナターリヤ・ニコラエヴナ・・・・・・・・・・・・・・・ 41

ベロウーソヴァ・ニコライ・ヴィシーリエヴィチ・・・・・・・・・・・・・ 61

モズゴヴァ・オクサーナ・ヴァスィーリヴナ・・・・・・・・・・・・・・・ 69

スートゥキン・マクシム・ゲンナージエヴィチ・・・・・・・・・・・・・・ 79

ヂャトロヴァ・リュドミラ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95

ツィブリスカヤ・タチアナ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 113

ノーサチ・ガリーナ・ニコラエブナ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 129

モーレ・ワシリー・イワノビッチ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 143

はじめに

本報告書は、編者らが実施したウクライナ・チェルノブイリ原発近郊の旧プリピャチ市住民へのインタビュー記録である。対象者は、旧プリピャチ在住時、原子力発電所に直接・間接的に関わってきた人たち、あるいはその子弟である。彼らの「声」は、チェルノブイリ原発事故被害の一端を素描するばかりではなく、チェルノブイリ原発事故とは一体何だったのか、原発事故はわれわれに何を問いかけているのか、という大きなテーマを考える際の重要な素材ともなるであろう。

本報告書は、旧プリピャチ住民を対象としたインタビューとしては、第二報となる。第一報は、2009 年から 2010 年に実施したインタビューをまとめ、公開した [1]。本報告書では、2011 年から 2013 年にかけて行ったインタビュー記録を所収した。

前報告書でも指摘した通り、本報告書でも、被災者自身によって、原発事故時の様子、事故後の避難時の様子、避難先であるキエフでの偏見・差別、被災者としての補償、手当などの実態が語られる。同時に、所収のインタビュー内容は、原発事故は結果として、そこに暮らす地域住民の社会基盤そのものを崩壊させるという現実を、あらためてわれわれに提示している [2]。

2011 年 3 月に起こった福島第一原発事故でも同様のことが起こりつつある。2018 年 9 月現在、「避難指示解除準備区域」と「居住制限区域」は解除され、政府は被災者への帰還を期待する。しかしながら、すべての住民が帰還を果たしたわけではなく、新天地を求め、そこで新たな生活を再開する被災者も少なからずいる。また、「帰還困難区域」に関しては、その解除のめども立たず、あらためて原発事故の深刻さを提示している。これらのことは、つまるところ、多くの帰郷を果たせない住民が存在することを示すとともに、該当地域住民がこれまで長い時間をかけて構築してきた社会基盤を否応なしに放棄せざるを得ない現実をも示している。そもそも原発事故による社会基盤の崩壊は、福島第一原発事故後に乱用された「想定外」だったのか。私たちはそういったことを想像すらできなかったのか。いやそうではなかろう。「想像しなかった」だけなのだ。今から 32 年前に起こったチェルノブイリ原発事故、その後の被災地域の状況、そして被災者の「その後」は、「想定外」ではない、想像しなければならない「原発事故後」を現実であったのだ。

本報告書は、チェルノブイリ原発事故とは何だったのかを考える際の重要な資料であるばかりではない。私たち人類は、原発と共存していくのか、原発利用という選択肢を続けるのか、

---

[1] 川野徳幸、今中哲二、竹内高明編、『チェルノブイリ・旧プリピャチ住民へのインタビュー記録』、IPSHU 研究報告シリーズ　No.46、広島大学平和科学研究センター、2012 年 3 月

[2] 詳しくは、拙稿、チェルノブイリ・旧プリピャチ住民への聞き取り調査備忘録：フクシマそして原発を考えるためにも、『広島平和科学』33、93-118、2011 年、にまとめた。

といった困難な命題を真摯に考える際の重要な視点を提供するであろう。

福島第一原発事故は今だ「収束」しているとは言えまい。避難生活を強いられている多くの被災者の存在をもってして、安易に「収束」を宣言すべきではなかろう。本書は、その福島第一原発事故被災者の今後の福利厚生を考える際にも重要な示唆をも含む。彼らの「これから」を考えることは、国策として原発を設置し、その「恩恵」を受けたであろう、私たちすべての責務である。その責任を果たすためにも本書所収の旧プリピャチ住民の声に耳を傾けてほしい。そう願い、この第二報を発行する。

対象・方法、そしてプリピャチについて

インタビューは、2011 年 9 月 13 日、2012 年 9 月 16 日・17 日、2013 年 3 月 26 日、2013 年 9 月 15 日に実施した。対象者は、1986 年 4 月 26 日発生のチェルノブイリ原発事故当時、旧プリピャチ市に在住し、現在、キエフ市に居住する各世代 10 名である。対象者選定は、旧プリピャチ市避難民の互助団体「ゼムリャキ」に依頼し、各インタビューも、キエフ市内ゼムリャキ・オフィスにて行った。インタビューは、基本的に、附録として付した質問票の順に沿って質問を行った [3]。通訳は、ロシア語、ウクライナ語に精通するキエフ市在住の竹内高明氏と五代裕己氏が行った。対象者の基本情報をまとめたものが次表である。

チェルノブイリ原発事故により、原発周辺住民約 11 万 6 千人が避難を余儀なくされ、ウクライナ政府によると 168 の原発周辺の村々が消滅したという [4]。その一つが、プリピャチ市である。同市は、1970 年にチェルノブイリ原子力発電所職員の居住地用として造られた町である（地図 1)。当時の人口は約 5 万人で、市中心部から南に 4 キロの位置にチェルノブイリ原発があった。写真 1・2 が示すように高層住宅が建ち並び、当時としては近代的な町であった。そればかりではなく、当時の住民の話を聞く限り、様々な文化・福祉施設が充実し、生活水準もかなり高かったようである [5]。インタビューから判断する限り、新たに建設された原発の町ということで、多くの若者が夢と希望を持って、入植したのではないかと思われる。

[3] インタビューは本書編著者である川野が大方行ったが、2011 年 9 月調査には、原田浩徳広島大学原爆放射線医科学研究所講師（当時、現在は東京薬科大学教授)、小宮山道夫広島大学文書館准教授（当時、現在は広島大学国際室准教授)、2012 年 9 月調査には、平岡敬元広島市長（平和センター研究員)、小池聖一広島大学文書館長、2013 年 9 月調査には、平岡敬元広島市長、松浦陽子広島大学大学院国際協力研究科博士課程前期学生（当時、現在は広島市職員）がそれぞれ加わった。

[4] 現在も原発から 30 キロ圏内は立入禁止区域（zone）であり、かなりの高線量が認められる。例えば、われわれ調査班が、2009 年 6 月チェルノブイリ原発を訪れた際、幾つかのホットスポットに遭遇した。地上 1 メートルの空間線量を簡易装置で測ると毎時約 20μSv/h という高線量が測定された。

[5] 同様の指摘が、2011 年 10 月 31 日『朝日新聞』にもある。

写真１　旧プリピャチ市街（2009 年 6 月 15 日筆者撮影）

写真２　手前が旧プリピャチ市街、奥手にチェルノブイリ原発が見える
（2009 年 6 月 15 日筆者撮影）

写真 3　廃墟と化した旧プリピャチ市（2012 年 9 月 19 日筆者撮影）

写真 4　旧プリピャチ市内に放置された重機の一部
（内部は 20 μ Sv/h 以上の線量を示す）（2012 年 9 月 19 日筆者撮影）

写真 5　旧プリピャチ市内の廃墟と化した体育館　（2013 年 9 月 14 日筆者撮影）

写真 6　旧プリピャチ市内の観覧車（1986 年 5 月 1 日開園予定だった遊園地は一度も開園することはなかった）（2013 年 9 月 14 日筆者撮影）

写真 7　チェルノブイリ原発周辺での線量測定（2013 年 9 月 14 日小池聖一撮影）

写真 8　その測定結果。12.87 μSv/h を示す（2013 年 9 月 14 日筆者撮影）

写真 9　インタビュー風景　(2011 年 9 月 13 日　撮影)

地図 1　プリピャチ市とチェルノブイリ原発

地図 2　ウクライナ地図

出所：https://upload.wikimedia.org/wikipedia/ja/archive/6/6d/20090311110338%21 ウクライナの地図.png　<2018 年 9 月 3 日アクセス>に筆者加筆

表１　対象者基本情報　（以下、聞き取り順）

	氏名 調査年月日 生年（調査時年齢） 〈事故当時年齢〉	性別	人種	宗教	事故後の居住略歴等
1	ナターリャ・ベンシコワ 2011 年 9 月 13 日 1970 年（40 歳） ＜15 歳＞	女性	ウクライナ人	ウクライナ正教	チェルカースィ州生、1977~81 年：チェルノブイリ市、81 年~86 年：プリピャチ、86 年 4 月 26 日～5 月 2~4 日頃：モスクワ、5 月 5 日以降：キエフ
2	ヴィクトリア・ベロコーニ 2011 年 9 月 13 日 1960 年（51 歳） ＜25 歳＞	女性	ウクライナ人	ウクライナ正教	ポルタバ市生、1980～86 年：プリピャチ、事故後すぐ～1 か月間：ポルタバ、86 年 6 月～同年 11 月：プリピャチ、86 年 11 月～：キエフ
3	ベロウーソヴァ・ナターリヤ・ニコラエヴナ 2012 年 9 月 16 日 1952 年（60 歳） ＜34 歳＞	女性	ロシア人	ロシア正教	チェリャビニンスク州アルガヤシ生、出生後すぐ：サラトフ州カリーニンスク、1974 年 5 月～1978 年：ノーヴィエシェペリチェ、1978 年～1986 年 4 月 27 日：プリピャチ、4 月 27 日～5 月 3 日：カラリョーカ、5 月 4 日：キエフ、5 月 8 日～夏：サラトフ州カリーニンスク、～8 月末：ジトミール州、8 月末～2 週間：イルピン、9 月中旬～12 月：キエフ、12 月～1987 年末：2 週間毎にキエフ、ゼロニムイス（チェルノブイリ原発職員のための宿舎）間を往復しつつ事故処理作業にあたる、1988 年～：キエフ
4	ベロウーソヴァ・ニコライ・ヴィシーリエヴィチ 2012 年 9 月 16 日 1946 年（65 歳） ＜38 歳＞	男性	ロシア人	ロシア正教	サラトフ州カリーニンスク生、大学卒業後～1 年程：ウラジオストク、1970 年：カリーニンスク、ウリャノフスク州デミトロフグラード、1974 年 5 月～1978 年：ノーヴィエシェペリチェ、1978 年～1986 年 4 月 27 日：プリピャチ、事故後～5 月 4 日：プリピャチ～チェルノブイリ間を往復しつつ、放射線測量作業を行う、5 月 5 日～20 日頃：キエフ、～6 月末：クリミア、～8 月末：ジトミール州、8 月末から約 2 週間：イルピン、9 月中旬～12 月：キエフ、1987 年 1 月～8 月頃：キエフ、チェルノブイリ間を往復しつつ事故処理作業にあたる、～1988 年：ポレスコエ、1988 年～：キエフ
5	モズゴヴァ・オクサーナ・ヴァスィーリヴナ 2012 年 9 月 16 日 1971 年（40 歳） ＜14 歳＞	女性	ウクライナ人	ウクライナ正教	キエフ生、1975 年 6 年～1986 年 4 月 27 日：ノーヴェシュペチ、4 月 28 日～5 月：キエフ、5 月～：クリミア シンフェローポリ地区クリスチャーヌフカ、1987 年～：キエフ
6	スートゥキン・マクシム・ゲンナージエヴィチ 2012 年 9 月 17 日 1975 年（37 歳） ＜10 歳＞	男性	ロシア人	ロシア正教	チェルニゴフ市生、1978~1986 年 4 月 27 日：プリピャチ、事故後～1~2 週間：ステッシノ、5 月半ば～9 月：キーロフ州、以降：キエフ

7	ヂャトロヴァ・リュドミラ 2013 年 3 月 26 日 1947 年（66 歳） 〈39 歳〉	女性	ウクライナ人	ウクライナ正教	キエフ州ズグーロフカ地区生、1962~1966 年：キエフ、1966～1969 年：タシケント、1969~1971 年：ズグーロフカ、1971 年：チェルノブイリ市、1972～1986 年：プリピャチ、1986 年～：キエフ
8	ツィブリスカヤ・タチアナ 2013 年 3 月 26 日 1952 年（60 歳） 〈34 歳〉	女性	ウクライナ人	ウクライナ正教	チェルニーゴフ州ノブゴロド-セーベルスキー地区マネーキノ村生、1970～1974 年：チェルニーゴフ市、1974～1976 年：キエフ、1976～1986 年：プリピャチ、1986 年：チェルニーゴフ市からノブゴロド-セーベルスキー地区マネーキノ村、1986 年 10 月頃～：キエフ
9	ノーサチ・ガリーナ・ニコラエブナ 2013 年 9 月 15 日 1953 年（60 歳） 〈33 歳〉	女性	ウクライナ人	ロシア正教*	ドニエツク州チャソブヤール町生、1956～1970 年：ドニプロペトロウシク州ペロバマイスキー町、1970～1973 年：クリブオイローグ州クログオイローグ、1973～1982 年：ポルタバ州コムサモーリスクナドニプレ、1982～1986 年：プリピャチ、1986 年 4 月～1986 年 10 月：ドニプロペトロウシク州ペロバマイスキー、チェルノブイリ間を往復しつつ、原発に関する事務作業を行う、1986．10～1995 年：キエフ、チェルノブイリ間を往復しつつ原発に関する事務作業を行う、1995 年～：キエフ
10	モーレ・ワシリー・イワノビッチ 2013 年 9 月 15 日 1952 年（61 歳） 〈34 歳〉	男性	ガガウズ人（父親ガガウズ人、母親ロシア人）	ウクライナ正教	チェチェン・グロズヌイ町生、1958 年チェルカッサ州バトゥーチナ、1970～1972 年：徴兵により従軍（場所不明）、1972～1976 年、レーニングラード、1976～1980 年：オデッサ、1980～1986 年：プリピャチ、1986（事故後）～1989 年：キエフ、チェルノブイリ間を往復しつつ事故処理作業にあたる、1989 年～：キエフ

凡例

（１）インタビューは、基本的に、附録として付けた質問票の順に従って質問した。編者らによる日本語の質問を竹内高明氏または五代裕己氏がロシア語あるいはウクライナ語に訳した。

（２）回答者は、ロシア語あるいはウクライナ語でインタビューに答え、それを通訳者が通訳した。その内容をテープ起こししたものが、本インタビュー記録である。

（３）テープ起こししした原稿に対して、編者が数校を重ね、原文の文意を損なわない範囲で加筆・修正を行った。その段階で必要に応じて注記等の解説を加えた。

（４）ウクライナの人名・地名についてはウクライナ語発音に、ロシアの人名・地名についてはロシア語発音に、それぞれ従って表記した。また、英語アルファベットのＶ音は「ヴ」と表記した。但し、「キエフ」、「チェルノブイリ」のようにすでに日本語表記が固定化しているものを除いた。なお、本文中の地名については、可能な限り、脚注を入れるか、本文中にて（　）で説明するか、あるいは地図２上にて示した。

（５）原則として、インタビュー冒頭の調査趣旨と録音についての承諾部分を割愛した。

（６）本インタビュー記録（写真を含め）の公開にあたっては、回答者本人の了解を得ると共に、「ゼムリャキ」の了承を得た。

謝辞

本研究は、科学研究費補助金基盤研究(B) 15H03137 による成果の一部である.

また、編集にあたっては、当時のゼミ生（広島大学大学院国際協力研究科）らの助力を得た。以下に氏名を記し、感謝したい。

松浦陽子さん（元ゼミ生、現広島市役所）、衛藤優子さん（元ゼミ生、現広島大学平和センター教育研究補助職員）、水谷桃子さん（現ゼミ生、広島大学大学院国際協力研究科博士課程前期学生）、湯淺梨奈さん（広島大学大学院総合科学研究科博士課程前期学生）

附録　チェルノブイリ原発事故被災者聞き取り調査質問項目（抜粋）

質問１．基本事項

(1) 氏名

(2) 性別　　男　　女

(3) 生年月日（年齢）　　年　　月　　日生　（　　）

(4) 人種　　ウクライナ人、ロシア人、その他＜　　＞

(5) 宗教

(6) 最終学歴

(7) 出身地・居住歴・職歴（誕生から現在まで）

期　間	所在地（都市名）	職業

＊1986 年 4 月 26 日原発事故発生

(8) プリピャチ市を離れるときの家族構成及び現況

続柄	生年	現　況		
		生存	死亡（死亡年）	死因
本人				

質問２．以下の質問について、1986 年 4 月 26 日以前のプリピャチ時代と現在の両方についてそれぞれお答え下さい。

１．自宅の形態（アパートの広さなどを含む）

２．食事の内容

３．仕事の内容

４．世帯収入（一ヶ月）

プリピャチ時代:その額は十分だったか。当時の平均的月収は幾らぐらいか。十分だったか。

現在：(その額は十分か。現在の平均的月収は幾らぐらいか。生活はどうか。)

５．生活上の不満があるか。６．思い描いていた将来設計

７．特に苦労と考えること　（不安だったこと、不安なこと）

８．健康状態

９．健康状態に不安を感じることがあるか

プリピャチ時代：　１．いつも感じる　２．ときどき感じる　３．感じない

現在：１．いつも感じる　２．ときどき感じる　３．感じない

１．あるいは２．と回答した場合→
それは、チェルノブイリ原発事故による放射線被曝が影響していると思うか。

質問３．以下の質問にお答え下さい。おもに現在についてのことです。
１．これまでの自身の歴史を振り返って、原発事故のせいで自分の人生が狂ってしまったという思いがあるか。
２．事故に拘わる体験を誰かに話して聞かせたことはあるか。それは誰か。また、それを誰かに伝えなければならないと思うか。それは誰か。
３．今一番望んでいることは何か。
４．原子力発電についてどう思うか。原子力というエネルギーは私達人類に必要だと思うか。何故そう思うか。
５．避難時の体験、または避難後の辛い体験など、夢で見たり、日常生活の中で思い出すことがあるか。（１．よくある　２．ときどきある　３．ない）
「ある」方におたずねします。その体験内容といつ思い出すのか、をお教え下さい。
６．プリピャチを避難後、子供が生まれましたか。「はい」の方→
出産や、子や孫の健康に不安を感じたことがある。（１．ある　２．ない）
７．チェルノブイリ原発事故被災者であることで差別や偏見を受けたことがある。
（１．ある　２．ない）
ある場合、それはどんな時だったか。

※これでアンケートの質問はすべて終わりです。ご協力いただき、ありがとうございました。

以下のテーマに沿って、ご自由にお話し下さい。一つだけでも、いずれもでもかまいません。
１．ご自身の体験の中で、今も忘れられないこと
２．原発事故で亡くなった方々や次世代へのメッセージ
３．その他、訴えたいことや知らせたいことなど

ナターリヤ・ブーベンシコヴァ氏（女性）
2011 年 9 月 13 日実施　通訳：竹内氏

インタビュー風景　ナターリヤさん

○川野　それでは、今日お一人目の聞き取りを始めたいと思います。

今日は、お忙しい中、来ていただきましてありがとうございました。

私たちは広島大学から来ました。基本的に皆、原爆に関わる研究をしています。

これまで 2009 年から、旧プリピャチの住民の方々にお話を聞いて、それぞれ旧プリピャチの人たちが、どういった社会的な被害を受けたのかということを、ずっと調査してきました。2009 年から始めまして、これまで 10 名の方にいろいろお話を聞きました。特に私たちは社会的な被害や経済的な影響、あるいは心的な影響、そういったものを対象にして研究しています。

原発による影響というのを、われわれは考察したいと思っていたわけですが、もう一つの目的というのは、日本では 54 基原発があります。そういった原発があるにもかかわらず、わが国では原発の是非についてはほとんど議論してきませんでした。1986 年に起こったチェルノブイリ原発事故を、われわれは一つの教訓にできないのか、少なくとも議論の必要性はあるだろうと私は思っていて、こういった研究がその議論の際の重要な資料にもなればよいとも考えています。

ところが、ご承知のように 3 月 12 日に福島の原発事故が起こりまして、われわれは原発の是非に関して、議論の必要性を様々な場面で訴えてきたのですが、今、日本ではさまざまなかたちで議論が起こり始めています。25 年前のチェルノブイリの事故というのが、福島にいろいろな意味で、福利厚生も含めて参考にできるところもあるだろうと考えています。今はそのような視点から、このような調査研究が役立てばと思っています。チェルノブイリから福島を考える、そしてまた同時に、福島からもう一度チェルノブイリを考えてみたいというふうに思っています。

前置きが長くなりました。今からいろいろなお話をお聞きしますが、もし思い出したくないとか、つらい思い出だということで、もし負担になるようなことがあれば、その旨、私たちにお伝えいただければ、質問するのをやめたり、または何らかの対応をいたしますので、いつでもおっしゃってください。

これは、今まで 10 人分、日本語ですがオーラルをまとめたものです [1]。今回お聞きしたものも、もちろん個人名は分からないかたちで、プライバシーには最大限配慮して、こういった本というかたちでまとめますが、それにご了承いただけますか。

○ナターリヤ　もちろん結構です。

○川野　ありがとうございます。写真を時々撮らせていただきますが、よろしいでしょうか。

○ナターリヤ　いいですが、あまりそのための準備をしていません（笑）。

○川野　大丈夫です（笑）。

それでは、基本事項から質問を始めたいと思います。まず氏名、生年月日、人種、宗教、最終学歴、そして出身地等々の基本的な情報を教えていただければと思います。

○ナターリヤ　ナターリヤ・ブーベンシコヴァです。生まれは 1970 年 10 月 31 日、人種はウクライナ人で、宗教は正教です。学歴は貿易大学を卒業しました。

生まれたのはウクライナのチェルカースィ州（地図 2 の①）で、ノーウェ・ミストという田舎の村です。学校に入学したのはチェルノブイリ市ですが、そのいきさつは、その当時、原発の建設作業をすると早く住居の配給があるということで、両親がチェルノブイリ原発建設の仕事に行っていたので、私たちもチェルノブイリ市に一緒に行きました。

事故の時には学校の８年生で、プリピャチの学校に行っていました。1977 年に両親と一緒にチェルノブイリ市に引っ越し、そこで学校に入学しまして、４年後、プリピャチ市のアパートに引っ越し、５年ほど住んでいたという経緯です。

家族は、両親のほかに、チェルノブイリ市にいた時に妹が生まれて、プリピャチ市に引っ越してから、もう一人、妹が生まれました。つまり事故時は、両親と３人姉妹という状況でした。

○川野　ご両親はご存命ですか。

○ナターリヤ　両親は現在、このドレ―シナ地区 [2]、今われわれがいるこの地区に住んでいます。

○川野　それは 1986 年からずっと同じ場所に住んでいるのですか。

○ナターリヤ　はい。1986 年にアパートの配給がありまして、５人家族だったので、優先的に４部屋、４ＤＫのアパートを配給されました。

○川野　それでは、1986 年４月 26 日以前、つまりプリピャチ時代のお話と現在の状況について、それぞれ教えていただければと思います。

まず現在の居住の形態とか、仕事の内容、世帯収入ぐらいまで教えてください。

○ナターリヤ　プリピャチでは３ＤＫのアパートに住んでおりました。現在は結婚しており、子どもも２人おりまして、４人家族で２ＤＫのアパートに住んでいます。

○川野　いつ、ご結婚されましたか。

○ナターリヤ　21 歳の時に結婚しました。1991 年です。

---

[1] 川野徳幸、今中哲二、竹内高明編、『チェルノブイリ・旧プリピャチ住民へのインタビュー記録』、IPSHU 研究報告シリーズ　No.46、広島大学平和科学研究センター、2012 年 3 月

[2] 旧プリピャチ住民に与えられたアパート群はいくつかの地区に点在する。その内の代表的な地区の一つがトレーシナ地区。

○川野　仕事の内容を教えていただけますか。
○ナターリヤ　企業の人事課の仕事をしていました。現在は失業中です。ずっと一つの企業で働いていたわけではなくて、何度か転職しています。どこも事務の仕事でしたが、自己希望で辞めたこともありましたし、会社の都合で辞めさせられたこともありました。
○川野　プリピャチ時代の話ですから、ご自身は働いていらっしゃらなかったのでしょうけれども、その当時、お父さまは原発関係のお仕事、お母さまはどうされていたんですか。
○ナターリヤ　事故前、父は原子炉の部品などを作る作業員をしていました。母は、新しいアパートができたときに中の壁を塗ったり、ニスを塗ったり、壁紙を張るとか、そういう作業をする仕事をしていました。
○川野　1986 年当時は 8 年生ですね。日本でいうと中学校 2 年生ですから、あまり親の収入の状態とかはよくお分かりではなかったかもしれませんが、経済的に何らかの問題があった、あるいは非常に豊かに生活していたとか、そういった記憶、思いはありますか。
○ナターリヤ　中程度の生活だったと思います。というのは、母親は余ったお金は全部貯金しておくというようなタイプの人で、つまりぜいたくはしていませんでしたが、貯金できるぐらいの余裕はありました。
○川野　当時、車はご自宅にありましたか。
○ナターリヤ　車はありませんでした。
○川野　現在の生活の状況はいかがですか。
○ナターリヤ　現在の自分の家族ということでいいますと、先ほどいいましたように、私は失業中で、夫の給料だけですので楽ではありません。
○川野　プリピャチはどんな町でしたか。
○ナターリヤ　プリピャチのイメージというのは、白くて美しいという印象が残っています。建物もだいたい白が基調で、それに青い水色のタイルが張ってあったり、文化会館も真っ白で、とてもきれいだったという印象が残っています。
○川野　中学校の 8 年生ですから、そういったことは考えられなかったかもしれませんが、もし原発の事故がなければ、今でもプリピャチにお住まいだったというようなことを考えられたことはありますか。
○ナターリヤ　はい、きっと住んでいたいと思います。
○川野　今のキエフはどうですか。
○ナターリヤ　ちょっと一言では言えないのですが、いろいろな出来事が重なっているので、一言にいいとか悪いとかは言えません。
○川野　プリピャチ時代で非常に印象深いようなことがあれば教えていただければと思うのですが。
○ナターリヤ　まず、最初に引っ越したのはチェルノブイリ市だったわけですが、そのチェルノブイリ市の周りも、やはり森とか川が豊かにありまして、森の中ではキノコを採ったり、ベリーを採ったりという楽しい思い出があります。

プリピャチに引っ越してから、いろいろスポーツもやりました。それはプリピャチも周りが森ですので、その森の間の道をジョギングしたり、川も流れていましたので、そこで釣りをしたり、泳いだりというような思い出がいろいろありますが、なぜかチェルノブイリにいた時の思い出のほうが、今はより鮮明にあります。

○川野　分かりました。少し話が変わりますが、現在の健康状態はいかがですか。

○ナターリヤ　良くないです。特に記憶が悪くなって不安を感じています。

○川野　物忘れがあるということですか。

○ナターリヤ　いえ、以前に比べて記憶力が衰えているという感じがあって、前のように物覚えが良くないので不安を感じています。

○川野　われわれもそういったことは頻繁にあります。

その他に、健康に不安を感じることはありますか。

○ナターリヤ　甲状腺の亢進症ですね。それと胃潰瘍があります。

○川野　お薬は飲まれていますか。

○ナターリヤ　甲状腺の亢進症のほうは、毎日、薬を飲んでおります。

○川野　そういったものというのは、いわゆるチェルノブイリ原発事故の影響だと思いますか。

○ナターリヤ　もちろんです。

○川野　今から、少し大きな質問をしますので、もし答えにくい、あるいは答えたくないという時には、そうおっしゃっていただければと思います。

これまで自分の歴史というか、自分の人生を振り返ってみて、1986 年の原発事故がなければ、こういった人生はなかったんだと、あるいは原発事故のために自分の人生が狂わされたというような思いはありますか。

○ナターリヤ　はい、いつもそう思っています。もし事故がなければ、まったく違った人生になっていたでしょう。

○川野　それはプリピャチにずっと住み続けて、たぶんプリピャチで生活しているだろうということがベースにあるということですか。

○ナターリヤ　はい。例えば、プリピャチのようなキエフ近郊の町にずっと住んでいて、子どもがキエフの大学に行ったりしても、自分たちは残って住み続けているという人もいるわけですので、私もたぶんそういうふうになっていたと思います。

○川野　分かりました。プリピャチですから、避難されたのは 1986 年 4 月 26 日ですかね。

○通訳　避難は 27 日です。

○川野　避難の時のお話をお伺いしたいと思います。避難時の体験とか、避難後の様子とか、そういったものを少し教えていただければと思うのですが。

○ナターリヤ　実は、その 4 月 26 日、われわれは母のきょうだいがいるロシアに行く予定でした。その切符も買ってありました。26 日、父が朝早く釣りに行ったのですが、帰ってきて、原発で事故があったようだと、爆発があったようだと言いました。父は、原発の爆発があった後、その様子を見て帰ってきたのですが、普通に釣りもして、その魚や自転車も自分たちのア

パートに持ち込んだわけです。きっと汚染されていたと思います。

一方、私は、土曜日でしたが、普通に学校に行って、授業が終わって帰ってきました。一家は予定どおりモスクワに行く準備をして駅に行きました。そうすると列車がなかなか来なかったので、ひょっとしたら、もう今日は出ないのかなと思いましたが、ついに来たので、それに乗ってモスクワに行きました。

その時、ちょうど線路は原発のそばを通っていますので、父が何かあったという原発を見ようと、みんな窓を開けて、じっと見ておりました。誰もそんなことをしてはいけないとは言わなかったんです。そのまま、われわれはモスクワに行って、しばらくしてからプリピャチへの避難が行われたということを聞きました。

○川野　では、26 日には家族 5 人で行ったということですか。

○ナターリヤ　はい、そうです。

○川野　ということは、プリピャチの方々が、27 日の正午以降に一斉にバスで避難していくわけですが、そういったものは経験されなかったということですか。

○通訳　そうなりますね。

○川野　分かりました。その後、モスクワに行かれた後の話を少しお聞かせいただければと。

○ナターリヤ　それでキエフに戻ってきたのですが、もうプリピャチには行けない状態になっておりましたので、プリピャチに住んでいた人に対しては、特に子どもはピオネールキャンプに夏の間は行かされました。ピオネールという組織がソ連時代にありまして、その子どもの夏のキャンプに母親と一緒に行きました。

一方、父親は原発での仕事に戻っていきました。

○川野　チェルノブイリから仕事の現場に行かれたということですか。それともキエフから行かれたということですか。

○通訳　いったん家族でキエフに来て、そこから仕事現場に向かいました。

○ナターリヤ　母と子どもたちについていうと、あるピオネールキャンプに母と 3 人姉妹で行ったのですが、私とすぐ下の妹は、もう大きいからというので、また別のキャンプに分けられまして、母と一番下の妹が残りました。

その別のキャンプに行ってから、私たちも体調が悪かったのでお母さんと一緒にいたいと言って頼んだところ、その間に、母と一番下の妹はクリミアのほうのイェヴパトリアという所の海岸のサナトリウムに移動していました。ですから、私とすぐ下の妹もエフパトーリアに行って、そこで母と姉妹で夏の間過ごしました。

父は原発で働き出したのですが、15 日現地で働いて、また 15 日は休みという交代勤務だったので、何日か私たちのいるサナトリウムに来て、それからまた実家のチェルカースィのほうに行ってと、当初、その休みの 15 日の間はそういうふうに過ごしておりました。

○川野　分かりました。確認ですが、モスクワに行かれてキエフに帰ってこられたのはいつですか。

○ナターリヤ　正確には覚えていないのですが、5 月 5 日にはキエフに戻ってきていたと思い

ます。1 日のメーデーというのは、当時は大きな祝日だったのですが、その日はモスクワにいてテレビでパレードを見ていた記憶があります。

○川野　それ以降にということですね。

○ナターリヤ　それで母は、これからどうなるか分からないという状態の時に、モスクワでのんびりしてはいられないと言い、早くキエフに帰りたいといって帰りました。

○川野　もうプリピャチには帰れないというふうに理解されたのは、いつごろですか。

○ナターリヤ　もちろん、いろいろ事故後に聞いてはいたのですが、まだ子どもだったせいもあって、すぐには信じられませんでした。そして、本当に帰れないのだなというのを自覚したのは、事故後 5 年ぐらいたって、1991 年とか 1992 年ぐらいになってからだと思います。

○川野　では、その 5 年間というのは、いつかプリピャチに帰れるんだというふうに思っていらっしゃいましたか。

○ナターリヤ　はい、いつかは帰りたいという強い希望がありました。

○川野　親御さんとそういったお話をされていましたか。

○ナターリヤ　もちろんです。

○川野　分かりました。ご主人はプリピャチの方ではないですよね。

○ナターリヤ　夫は私がチェルノブイリに住んでいた時に近所に住んでいた人で、その時からの知り合いです。

○川野　キエフに来られて、また再会されたんですか。

○ナターリヤ　事故後、お互い、どこにいるかも分からない時期がしばらくありまして、夫はその間、大学にも行き、兵役にも行ったのですが、その後、偶然共通の友人の所で会いました。

○川野　ご主人もチェルノブイリにおられたということであれば、原発の事故、あるいはその後のことをお互いに話をするような機会はありますか？機会は多いですか。

○ナターリヤ　彼は、事故が起こった時は、チェルノブイリ市ではなくて、やはりチェルノブイリ地区のレェリョブ [3]という村に家族と引っ越して住んでいたのですが、そこで事故に遭い、事故後に彼も家族と一緒にキエフに避難しました。

○川野　そういったことを、お互いに話をされたりしますか。

○ナターリヤ　はい。今年は特に 25 周年ということでテレビの報道などもよくありましたので、当然、そういうものを目にした時には夫ともよく話しました。しかし、普段はむしろ一緒に通ったチェルノブイリの学校のこと、同じクラスでしたので、そのころのことをよく話しています。私よりも夫のほうが子ども時代の記憶が鮮明です。

○川野　原発事故について、夫婦で話をするようなことはありますか。

○ナターリヤ　はい、もちろん、出会った後に、それぞれの思い出、自分がモスクワに行く時に列車の窓から原発を見た話とか、彼は事故が起こって 27 日に避難するまで両親が何をしていたとか、そういう話はします。

○川野　列車の窓を開けたとか、そういったことを日常の中で思い出すようなことはあります

[3] チェルノブイリ市とプリピチャ市の間に位置する小さな村。

か。あるいは夢の中で見たり、そういうことはありますか。
○ナターリヤ　事故そのもの、その前後のことを夢に見るということはないのですが、プリピャチで住んでいたアパートとか、思い出の場所とかは夢に出てくることがあります。
○川野　分かりました。事故後、キエフのほうにアパートの配給があって引っ越しされたのですね。その後、チェルノブイリの被災者だということで、偏見とか差別とか、そういったことを体験されたことはありますか。
○ナターリヤ　この住んでいる地域では、移住者も多いので、一般の人からの差別や偏見はあまり感じないのですが、職場で、例えば被災者であるということで有給休暇が特別に長いとか、そういった社会保障があります。そういうので嫌がられることもありますし、あるいは被災者で病気がちであるということで、職場で嫌な目で見られるということはあります。
○川野　キエフに越されてきて、その後、結婚されてお子さんが２人いらっしゃるということでしたが、お子さんが生まれる時、出産の時、あるいは今いらっしゃるお子さんの健康とか、そういったものに不安がありますか。
○ナターリヤ　実は２人の子どもの間で 11 歳、歳の開きがあります。上の息子を産んだ時、私はまだ 22 歳でそれほど心配もしていなかったのですが、息子が生まれた時に息をしていない状態で、３日間ほど保育器に入っておりました。
　ですから、下の子は娘ですが、この子を産む時にはもちろん大変心配して、あらゆる検査を受けて、きちんと健康に生まれてほしいと気を遣っていました。幸いに娘の出産の時には問題もなく生まれたのですが、今、その娘はいろいろな感染症の病気にかかりやすい、ウイルス性の病気にかかりやすいという傾向があります。
○川野　最初のお子さんは、今お元気ですか。
○ナターリヤ　ちょっとお話するのがつらいのですが。
○川野　そうですか。では、結構です。お茶でもどうぞ。
　大丈夫ですか。
○ナターリヤ　大丈夫です。
○川野　いろいろつらいことを思い出させてしまってすみません。
○川野　原子力発電については、どう思いますか。
○ナターリヤ　プリピャチの建物の上に、ソ連時代のスローガンとして「原子、核を兵士ではなく労働者にしよう」という言葉がありました。それを思い出すと、結局、この事故というのは、平和利用ということを言いながらも、人に害を及ぼすものであり、核爆弾と同じようなことになってしまったわけで、やはり危険なものだという気がします。
○川野　分かりました。今度は福島の話をお聞きしたいのですが、ご承知のように、３月 11 日に東日本に大きな地震があって、津波があって、その翌日には福島第一原発事故が起きました。新聞報道とかテレビとか、いろいろご覧になられていると思いますが、どのように理解しておられますか。
○ナターリヤ　報道で知りました時に、これはチェルノブイリ以上の事態ではないかと思いま

した。というのは、まず天災、地震とか津波の被害があり、それに重なって、また原発事故が起こったわけですので。私は信仰がありますので、どうして神様が日本にそういう試練を与えたのだろうかというふうに思います。

○川野　プリピャチからは、だいたい 4 万 5、6,000 人の方が避難され、チェルノブイリ全体で、たぶん 11 万人ぐらいの方が避難されたのだろうと思いますが、日本でも同じような状況で、20 キロ圏内の方々が 8 万人ぐらい、その他のホットスポットと言われている所の被災者が 1 万人ぐらいいて、計 9 万人ぐらいが今避難しています。

そういった状況もあって、福島第一原発事故があり、その後、またあらためて日本では特にチェルノブイリ事故というのは何だったのかということで、非常に注目されているわけです。そういったことについて、どう思われますか。

というのは、2 年前に来た時に、なぜ今チェルノブイリをやるんだというようなことを言われました。忘れられたのだというようなことを、よく耳にするわけですが、またあらためてチェルノブイリが注目を浴びていると思います。それについて、どう思われますか。既に過去のことだとおっしゃる方もいらっしゃったのですが、またあらためてチェルノブイリ原発事故というのは何だったのかということや、特に日本などでは注目され始めているし、それは日本だけではなくて、世界的にもそうだと思います。

そういうチェルノブイリがあらためて注目されているということについて、どう思われますか。

○ナターリヤ　実は最近、内閣のほうで、幾つかのチェルノブイリ被災者の特典、社会保障を削ろうという動きがありました。これまで、被災者全員ではないのですが、あるカテゴリーに該当する被災者は公共料金の 50%免除や、数に限りがありますが、サナトリウム等での保養ができることや、公共交通機関が無料になるなどの特典がありました。しかし、これらを削ろうという動きがあります。

○川野　それに、この福島というのが何らかの影響を与えるというふうに考えておられますか。

○ナターリヤ　いえ、そういう意味ではまったく影響はないと思います。

今、政府はチェルノブイリとは関係なく、いろいろ予算が足りないという問題があります。特に事故処理作業従事者などは近年どんどん亡くなっていますし、ほかの被災者の中にも癌が多いので、もしかしたら政府は、われわれをもっと困った状況に追いやれば、死期も早まり、被災者がいなくなればチェルノブイリの問題も終結するというふうに思っているのかもしれません。

○川野　今、お話をされていた、いろいろな保障のシステムがありましたよね。われわれも承知していますけれども、給食費が半額とか、公共料金がただになるとか、アパートが半額になるとか、いろいろな保障がありましたが、これが一番有益だった、あるいはこういったものがあればいいというようなことがあれば教えていただければと思います。

○ナターリヤ　現行の保障の中で一番有益といえば、まずサナトリウムでの保養ということと、公共料金の減額、これが重要だと思います。自分たちは移住者というカテゴリーの被災者です

が、かつてはわれわれにも一定の医薬品が無料で提供されるという制度がありました。しかし、今、それは削られてしまって、われわれにはありません。それもあればより良いと思います。

○川野　そういったこれまでの経験を生かして、福島でどういった保障があれば、一番有益だというふうに考えられますか。

○ナターリヤ　ちなみに今、日本で保障としてはどんなものがあるんですか。

○川野　今、いろいろ政府は考えていて、いろいろなプランがあるのですが、現行でやろうとしているのは、移住に対するさまざまな保障はしようとしていますね。一律幾ら出すとか。

それから先のことは、例えば健康管理に関する保障をするとかしないとかという議論を今しています。具体的に、これとこれをやるというふうには、まだ決まっていません。移住にかかった費用をどのように補填していくか、保障していくかということ、まだまだそういった段階の議論ですね。

○ナターリヤ　こちらでは放射線医療センターというのがあって、プリピャチからの移住者であれば、そこで少なくとも3年に一度は健康診断が受けられるという制度があるのですが、これも現在では以前ほど細かい、きちんとした診断ではなくて、ほとんど形式的になってしまっています。ただやったという証拠づくりのために健診です。

一方で、これは今でも多少はあるのですが、食費補助という名目のものがあります。これは被災者であるから栄養をつけなければいけない、あるいは汚染地であれば汚染されていないものを食べなければいけないということで、お金の補助があります。今では金額はわずかです。日本の被災者の人も、そういう食事のことは気を付けてあげる必要があるのではないかと思います。

○川野　では、あと1、2点聞いて終わりということにしましょう。先生方で、もし何かあれば、少しお聞きして終わりということにしましょう。12時がきますので。

では、息子さんも障害か何かお持ちなんでしょうね。

○通訳　そうですね、あとでタマーラさん[4]とかに聞けば教えてくれると思いますけれども、いいですか。

○川野　その件に関してはべつに聞かなくてもいいです。聞けるようであれば聞いておいてください。

ありがとうございました。われわれは、こういった原発の事故というのをどう考えていくのかということを研究の対象にしているわけですが、被災した方々全体を、よくいろいろな研究者なり政府なりが議論するときに、全体で、例えば甲状腺で何人が癌になったとか、そういう議論をする傾向にあります。

しかし、被害の実態というのは、それぞれの被災者の上に乗っかっていて、それぞれの被害の実態というのがあるわけです。そういったところから被害の全体を見ていくというのが僕は正しいやり方だというふうに思っています。

ですから、今日、貴重なお話を聞かせていただきまして、いろいろな方から多角的な話をす

[4] ゼムリャキの代表者

るということから、もう一度、チェルノブイリは何だったのかということを、あらためて考えてみたいと思っています。大変貴重なお話をありがとうございました。
○ナターリヤ　お役に立ててうれしいです。
○川野　最後に非常にシンプルなことをお聞きしたいのですが、原発に対して反対ですか。
○ナターリヤ　いや、もし安全なものであれば私は賛成です。
○川野　原発が安全かどうかというのは非常に難しいですね。日本人も安全だというふうに思っていたんですが。
○ナターリヤ　私たちも日本だったら、そんな危険なことはないだろうと思っていました。日本は非常に技術の水準も高く、こういう事故などあり得ないというふうに思っていました。
○川野　ありがとうございました。非常に貴重なお話を聞かせていただきました。私が準備した質問は以上ですが、先生方で、もしほかに何かあればどうぞお尋ねください。
○小宮山　では、事故当時、8 年生ということですが、原子力あるいは原発に対する学校での教育というのがありましたか。
○ナターリヤ　いえ、学校では、そういう授業はありませんでした。
○小宮山　事故後もありませんか。
○ナターリヤ　キエフで事故後に行っていた学校では、事故の日の前ぐらいになると写真展示があって、授業で 1、2 度触れるようなことはありましたが、それ以上、詳しい話はありませんでした。
○小宮山　そういう学校での説明、あるいは今、福島が非常に問題になっていますが、政府のステートメントに対して不信感とか疑いの目というのは、その当時、あるいは現在もありますか。
○通訳　政府が、その原発、このチェルノブイリ事故について言っていたことについてですか。
○小宮山　ええ。
○ナターリヤ　当時、事故後は社会主義体制でしたので、もちろん情報というのは必ずしも正しいかたちでは提供されていなかったわけです。
　しかし、数年たちますと、逆に今度はいろいろな情報が出てくるようになりまして、あと何年するとこれだけの人が病気にかかるだろうとか、被災者のこれぐらいの人は亡くなってしまうだろうとかいう情報も出回ってくるようになり、そういう情報をわれわれはうのみにしたくはありませんでした。
○川野　日本でも、これほど政府が信頼されていないというのが露呈されたというのは、非常にわれわれ自身も驚いています。これは日本の地図で、これが線量ですが、こういった情報が毎日出ます。しかし、あまり信用してはいないんですね。例えば、東京の線量は低いと言われていますが、東京の人は水を買い込んだり、いろいろなことをしています。
○ナターリヤ　前に東京で測っていたのは、地上から何十メートルとか、そういうのですね。
○ナターリヤ　ちなみに別の話ですが、事故前に主人が住んでいたレェリョブという村は、事故後、線量がすごく上がったので、全部建物を壊して埋めてしまいました。幾つかそういう村

があります。

○川野　こういった線量一つを事例にとっても、もはや日本人というのは、あまり政府を信用していないようなところがあって、これは線量の測定の様子ですが、このようにわれわれが線量を測ってみると、政府が発表したものよりも 3 倍高かったんです。

　このように福島を考えるだけでも、非常に混沌としているというか、まだ混乱しているような状況ですね。なおかつ疑心暗鬼があるという状況です。

○ナターリヤ　こちらも、もちろんそうでしたよ。

○川野　われわれは原爆の研究者ですが、原爆あるいは福島について、何かお聞きになりたいことでもあれば、おっしゃっていただければ、答えられる範囲でお答えしますが。

○ナターリヤ　皆さんの中で、広島ご出身の方はいらっしゃいますか。

○川野　被爆二世です。

○原田　父は癌で亡くなりました。

○ナターリヤ　お悔やみ申し上げます。

○川野　原田先生は血液内科医ですから、何かお聞きになりたいことがあればどうぞ。

○通訳　血が薄い、濃いという言い方で言うと、日本語でどう言うんでしょうね。こちらで濃いという言い方があるのですが、医学的に言うと、どういう言い方になるのでしょうか。

○原田　それは違うかもしれませんが、やはり血液の病気、血液の癌にとてもなりやすいと思います。たとえ 60 年たっても、広島の原爆では血液の癌が多いということ。

○ナターリヤ　私の母や息子が血液検査をした時に、そういうことを言われたんです。例えばヘモグロビンの値が一般の基準よりも、かなり高いということでした。息子の場合、特にそうだったのですが、それはどういう場合にそうなるんでしょうか。

○原田　ヘモグロビンの値が高いというのは、血の中の赤血球というのが多くなるときで、これが原爆被爆者に多いというのは、今まで過去にデータはないです。むしろ少なくなるほうが圧倒的に多いです。

　ただ、放射線とは関係ありませんが、遺伝的に多血症の家系というのがあります。

○通訳　血が多いですか。

○原田　そうです。お父さんとかお母さん、子ども、孫に赤血球が多くなる病気というのがあります。そういう可能性はあると思います。日本では遺伝子で探索できます。

○ナターリヤ　例えば、そのヘモグロビンの多い母も足に血栓症がありまして、息子は 19 歳なのですが、片足にその症状が激しくて、足が老人のような足なのです。

○原田　おそらく多血症という病気だと思います。放射線ではなくて、遺伝的なバックグラウンドがあります。アスピリンを絶対に飲まないといけません。

○通訳　それは常用するんですか。

○原田　ええ。毎日です。

○ナターリヤ　母の場合は胃潰瘍もあるのでアスピリンが飲めないのですが。飲むとすぐに胃が痛くなるので。

○原田　その場合には抗癌剤のハイドレアというのを使って治療をします。ハイドルキシウレアという抗癌剤ですが、それを使います。また、アメリカでは新薬がもうすぐ使われるようになります。
○ナターリヤ　その薬はこちらでは聞いたことがありません。
○原田　そういう家系を持っている人たちが、放射線を浴びると白血病になりやすいということは想定できます。言ったほうがいいかどうかは別として。
○通訳　そうですね、言わないほうがいいかもしれませんね。
○原田　ロシアには多血症という家系が、有名なシュヴァハ家系というのがあります。どういうスペルを書くかは分からないのですが、有名な家系です。
○通訳　ある特定の家族でそれが好発するのでしょうか。
○原田　村でそれが多発しているということです。近親でご結婚されているんだと思うんですが、そういう家系があります。

○ナターリヤ　別の質問ですが、自分は物覚えが悪くなっていると申し上げましたが、それはやはり甲状腺と関係があるのでしょうか。記憶の問題はどのように考えられますか。
○川野　加齢でしょう。われわれも物忘れは激しいですから。
○原田　甲状腺とは、たぶん関係がないと思います。
○ナターリヤ　いえ、の以前先生が説明した時に、機能亢進症というのは、例えば、いら立ちやすくなったり、いわゆる眠れないとか、症状を列挙した中に記憶の問題というのもあったので、それはどうなのかなと思ったのですが。
○原田　きちんと薬を飲んでいたら、まず大丈夫だと思います。絶対に大丈夫です。甲状腺の機能が薬できちんと治療されていれば、記憶の障害はないです。
○ナターリヤ　例えば、ストレスが多い状態の時に記憶にも悪い影響があるとか、そういうことはあるんでしょうか。
○原田　それはあるかもしれないですね。
○ナターリヤ　どうもありがとうございました。
○川野　ありがとうございました。どうかご健康に留意されてお過ごしください。
○ナターリヤ　皆さんもお元気で。
○川野　１年に１回ぐらい来ますので、何かあれば、いつでも声をかけてください。
○ナターリヤ　またお会いできたらうれしいと思います。
○川野　ありがとうございました。

ヴィクトーリヤ・ベロコーニ氏（女性）
2011 年 9 月 13 日実施　通訳：竹内氏

インタビュー風景　ヴィクトーリヤさん

○川野　今日はお忙しい中、ありがとうございます。

われわれ 3 人は広島大学の教員です。私は、原爆に関わる社会学的な調査研究をしています。原田先生は、血液内科を専門とされています。小宮山先生は、アーカイブスの研究をされています。

われわれは 2009 年から、プリピャチに住んでいらっしゃった方々に聞き取りをしていて、チェルノブイリ原発事故の被害の一端を研究しています。当然、原発には光の部分があって、一方ではそうではない影の部分があると思います。その影の部分は何だろうというのが、私の一番の関心事項です。

原発の光と影については日本でいろいろと発言していたわけですが、3 月 12 日に福島で原発事故が起こりました。かえって、こういうことを言いにくくなってしまったのですが、いずれにしても、チェルノブイリ原発事故とは何かということを考察し続けて、それが福島にどのように生かされるべきなのかということを考えたいと思っています。

今日は、プリピャチ時代のお話も含めて、いろいろお話を聞きたいと思っています。そしてここでのお話の内容は、
日本語でまとめて、本として発行したいと思っています。もちろんプライバシーに関わるようなことは記載しませんが、今日お聞きしたお話も含めて、本というかたちでまとめるということをご了解いただけますか。

○ヴィクトーリヤ　構いません。何も隠すようなことはありませんので。

○川野　写真を時々撮らせてください。

○ヴィクトーリヤ　いいですよ。

○川野　それでは始めさせていただきます。まず基本的なことですが、氏名、生年月日、人種、宗教、最終学歴を教えていただければと思います。

○ヴィクトーリヤ　ヴィクトーリヤ・ベロコーニです。生年月日は 1960 年 8 月 16 日。ウクライナ人で、宗教はウクライナ正教です。学歴は大学卒で、ポルタバ経済大学の卒業です。生まれはポルタバ市（地図 2 の②）です。

○川野　ポルタバ市というのはどこですか。

○通訳　ポルタバ市というのはポルタバ州という、ウクライナの中部にあります、キエフから

いうと東南方向ですね。

○ヴィクトーリヤ　1980 年に、当時コムソモール[5]という組織がありまして、その関係でプリピャチの建設現場で作業をすることになりました。私はコムソモールからの派遣だったのですが、プリピャチ市のレストランに派遣されました。

○川野　レストランで何をされたのですか。

○ヴィクトーリヤ　支配人です。1986 年の事故まで、そこで働いておりました。プリピャチで結婚しまして、1982 年に子どもが生まれました。事故時は自分と夫、当時 4 歳の息子の 3 人家族でした。

ちなみに主人もポルタバ市の出身で、同じようにコムソモールという組織の派遣でプリピャチに行っており、2 人がプリピャチで働き出して 1 年ぐらいしてから結婚しました。

○川野　1986 年以後の職歴などを教えてください。

○ヴィクトーリヤ　事故後、自分も事故処理作業の関係の仕事をしていまして、汚染地域で事故処理をする人たちの食品供給関連の仕事をしていました。事故後の仕事としては、チェルノブイリ市とかチェルノブイリ原発、事故処理作業者の人たちが宿泊していたゼリョヌイムス[6]という村に、作業員のための食堂がありましたので、そこで提供される食品の管理監督の仕事でした。

事故後、最初は今でいう 30 キロ圏内の村にバスで連れて行かれ、その村に丸 1 日滞在し、そこから私たちはポルタバの実家に避難しました。事故後 1 カ月ぐらいたってから、また元の職場に戻ろうとしたところ、事故処理作業の仕事があるということで、その仕事をすることになりました。

1987 年 5 月まで、事故処理関連の仕事をしておりました。そのころになると健康状態が悪くなり、汚染地域での仕事はできないということになりました。

○川野　その後はどうされたんですか。

○ヴィクトーリヤ　その後、1986 年 11 月にキエフ市のアパートに入居し、1987 年 5 月以降はキエフ市の文化局文化課で経理の仕事をしました。

○通訳　市の行政の中の文化を担当する所です。

○川野　それ以来ずっと、キエフ市の文化課にいらっしゃったんですか。

○ヴィクトーリヤ　その後、私は市内の映画館の館長になって、次に、また別の映画館の館長をしておりました。2006 年になりますと、われわれ被災者は女性は 45 歳から年金が出ますので、2006 年の時点で仕事を辞めました。しかし、その映画館の仕事を辞めた後も、私は個人の企業士として。アムウェイに入会しビジネスをやっています。アムウェイは、エコロジーでクリーンな製品を市場に提供している会社です。

○川野　それで、アムウェイ商品を販売していらっしゃるのですね。

○通訳　そうです、アムウェイです。

---

[5] 旧ソ連時代の共産党内に組織された青年団組織

[6] 事故処理作業者のために作られた町。ただし、現在は存在しない。

○ヴィクトーリヤ　そういうわけで、われわれもエコロジーに気を遣っているわけですよ。家庭内及び環境に対して悪影響を与えないようにと日ごろから努めています。
○川野　ビジネスのほうはいかがですか。
○ヴィクトーリヤ　うまくいっております。アメリカやロシアのほうでも、自分の店舗があります。
○川野　分かりました。ご本人とご主人と子どもさん、今のそれぞれの現状を簡単に教えていただけますか。
○ヴィクトーリヤ　息子は結婚して、ベラルーシのミンスクに住んでおります。男の子の孫もいます。夫とは、だいぶ前に離婚しています。
○川野　それでは、1986年4月26日の前と後のお話を幾つかお聞きしたいと思います。プリピャチ時代のお話をお聞かせいただければと思うのですが、どういった所にお住まいでしたか。
○ヴィクトーリヤ　未婚時代は2人とも寮に住んでおりまして、結婚後、子どもが生まれて後も、しばらくは一緒に寮住まいでしたが、1985年、事故の半年ぐらい前に2DKのアパートの支給がありましたので、そのプリピャチのアパートに移り住みました。
○川野　結婚後でいいのですが、当時の収入はどうでしたか。他の状況と比較して、1カ月どのぐらいの収入があって、それは十分な額でしたか。
○ヴィクトーリヤ　ソ連時代の給与というのは、そんなに大した額ではなくて、自分がもらっていたのは当時140ルーブル、夫は160ルーブルくらいだったと思いますが、それほど豊かというわけでもありませんでした。
○川野　当時、車はお持ちでしたか。
○ヴィクトーリヤ　持っていませんでした。
○川野　2人で300ルーブルですが、十分な生活はできましたか。
○ヴィクトーリヤ　いえ、例えば家具を買うのにもローンで買うような状態で、次のお給料をもらっては使い、また次をもらっては使いという状態でした。
○川野　プリピャチはどんな町でしたか。
○ヴィクトーリヤ　プリピャチもいい町でしたが、私は、本当は、キエフに住みたいと思っていました。
○一同　ははは（笑）。
○ヴィクトーリヤ　しかし、プリピャチ時代、私はアクアラングをつけて水中に潜るというダイビングのクラブにも所属しておりまして、そのコースを修了して、証明書もあったのですが、そのクラブから委託を受けて、例えば黒海の海底の考古学調査などもやっておりました。
　そのダイビングのクラブというのは、週に2、3回、プールで訓練をしていたのですが、それ以外に当時のソ連で開発したサンボという格闘技のサークルもやっていましたし、仲間と一緒にピクニックに行ったりもしました。プリピャチの町が最初に作られたころには、高層住宅ではなくて仮設住宅のようなものがあったのですが、それが残っていた所で一緒にサウナを作ったりもしました。

また、ダイビングの仲間で、女性は行かなかったのですが、男性はバレンツ海にも調査に行ったりしていて、捕った魚が展示できるものを作り子どもたちに見せるなど、いろいろな活動を活発にやっていました。

○川野　先ほどのお話でキエフが良かったということでしたが、それはプリピャチに住んでおられた6年間、ずっとキエフに住みたいなとお考えだったのですか。

○ヴィクトーリヤ　プリピャチに住んでいた時、いつもいつもキエフに住みたいと思っていたわけでもないのですが、よくキエフにサッカーの試合とか、コンサートとか、観劇などにも行っておりましたし、やはりプリピャチというのは小さい町ですから、みんなお互いに知っていて、キャリアの面でも、ある所までいってしまうと、もう先が見えてしまうというような自己実現も限られているところがありました。それに比べればキエフのほうが、可能性が大きいように感じ、キエフに住みたかったわけです。

○川野　そういうふうにご主人やご家族ともお話をされていましたか。

○ヴィクトーリヤ　もちろん夫ともそういう話はしていましたが、実際にキエフで住める所、住む所を見つけて、そこで仕事を新しく始めるというような経済的な余裕はありませんでした。

しかし、プリピャチにいる間は、私は、先ほどお話した自分の身の丈に合ったスポーツのほうにいろいろ打ち込んでいましたし、また夫は音楽が好きで、趣味として文化会館のＤＪをやっておりましたので、そちらのほうでそれなりに楽しくやっておりました。

○川野　現在、健康状態はどうですか。

○ヴィクトーリヤ　内臓はどこもいい所はないという状況です。肝臓とか胃腸とか胆のうとかいろいろ問題があるのですが、でも健康であるようにマッサージをしたり、ヨガや体操などをやっています。しかし、時々は入院して治療をしなければなりません。

夏の間は、このドニエプル川の支流の川で水泳もしています。ポルタバ時代から私は水泳の選手で、チームにも入っていました。泳ぐことは好きなので、健康のためにも夏場は泳ぐようにしています。

○川野　分かりました。いろいろ内臓疾患があるというお話でしたが、それは、チェルノブイリ原発事故の影響だというふうに思いますか。

○ヴィクトーリヤ　はい、もちろんそう思っています。先ほど言いましたように、1987 年の段階で既にいろいろな健康上の問題が出てきて、ゾーン内で仕事はできないと言われたわけですから。

最初は肝臓の障害があって、アレルギーが出たり、顔がひりひりしたりという症状があり、その時に血液学研究所で検査を受けると、血液の問題が出たようでした。その後、当時はサナトリウムでの保養ができたので、ウクライナの西の方に、いいミネラルウオーターが出るサナトリウムがあるということで、当時はずっとそこに行っていました。それが良かったのか一度は回復したのですが、その後、行かなくなって、また最近アレルギーが出ています。

○川野　ミンスクにいらっしゃるお子さんの健康状態とか、そういうものに不安を感じることはありますか。

○ヴィクトーリヤ　やはり胃とか消化器系があまりよくありません。事故直後、息子とポルタバにいた時に、吐き気とか下痢の症状が出て、感染症ではないかと疑われて入院したんですが、感染症ではないということで、結局、原因不明でした。それも私は被曝のせいだったのではないかと疑っています。

ちなみに、息子がミンスクに引っ越したのは半年ぐらい前で、それまで息子の家族は私と同居していました。息子は成人してから、やはり胃炎等を起こすことが多く、28 歳なのですが、歯が何本も抜けてしまって、もともとの自分の歯があまり残っていないような状態です。その胃腸の問題が、何か歯と関係しているのかもしれません。

まだ若いので、それほど深刻な症状が出ないのか、男なので、あまり健康について口外しないようです。われわれ女性のほうは、心配して、すぐ検査に行くのですが、なかなか息子は言いたがらないので、こちらからいろいろしつこく聞かないと本当にどこが悪いのか言いません。

○川野　お孫さんの健康とかに不安はありますか。

○ヴィクトーリヤ　孫は今のところ元気そうです。嫁はベラルーシの人で、孫は 2 歳 10 カ月です。ごく小さい時に人工栄養、粉ミルクだった関係か、時々おなかが痛いとか言っていて、摂取したら危ないかもしれないと控えていたこともありましたが、今はそのような問題もなく元気そうです。

○川野　25 年前の話なのですが、避難時の様子を教えていただけますか。原発事故が 4 月 25 日にあって、その後の様子を教えていただければと思います。

○ヴィクトーリヤ　避難は、ほかの人たちと同じように 27 日にバスで避難しました。その前の、26 日から 27 日にかけての夜中に、個別にヨード剤の配布がありました。しかし、それ以外は何も警告などはなかったので、27 日の午前中は、息子と一緒に普通に外を歩いたりしていました。

その後、避難しなければならないという連絡があり、自分たちは、その集合住宅の前で 2 時間ぐらい、ずっと立ったまま待っていました。その間に小雨もありました。その雨はきっと汚染されていたと思います。軍関係者はマスクをつけて装甲車に乗って走ったりしていたのですが、私たちは何も言われなかったので、無防備な普通の格好で外に立っていました。

○川野　27 日に避難しなければならないというのは、ラジオ放送でしたか。

○ヴィクトーリヤ　はい、ラジオです。身分証明書や、3 日間の食料などを持って出なさいと言われただけでした。

○川野　それで、そのバスに乗ってポルタバに避難されたのですか。

○通訳　いえ、最初はそこまで行かなかったのですが。

○川野　27 日からどうされたんですか。

○ヴィクトーリヤ　最初、バスで連れて行かれた先は、プリピャチから 30 キロぐらいのポレスコエです。ポレスコエに連れて行かれた時は、そこで健康診断があるから、どこにも行ってはいけないと言われましたが、翌日になると、それぞれ親族とか親戚がいる所に各自行ってよろしいという話になり、28 日にキエフまでバスで行き、そこからポルタバ行きの列車に乗り

ました。

ポルタバに着き、親が出迎えてくれたのですが、まず病院に行こうということで連れて行かれました。そのポルタバの病院では、われわれが最初の避難民でした。放射線測定をされて、これは高いということで衣類を全部脱がされて、石鹸で洗浄されました。

被曝線量は、家族の中では夫が一番高かったと聞いています。というのは、事故の後、夫は集合住宅の屋上に上がって原発のほうを見たりしていたので、被曝線量も多かったのではないかと思います。そして、その次が私で、一番少ないのは息子でした。それは、事故の後、近所の人から、子どもはなるべく頻繁に洗って、家の中はふき掃除をしたほうがいいという話を聞き、それを実行していたので、息子の被曝線量が一番少なかっただと思います。

しかし、3 人とも病院でシャワーを浴びさせられて、その後も線量があまり減らないということで、2 度も洗浄されたのですが、やはりあまり大差はないということでした。その後、取りあえず自分たちは病室にいなさいと言われて待っていた時に、外の廊下で院長がほかの医者たちと話している声が聞こえました。

医院長が「どうなんだ」と聞いて、「いや、駄目です。シャワーを使わせても減りません」と言うと、「じゃあ、毒でも与えるか」と言っていたので、私たちはここにこれ以上いてもしようがないということで、夫の舅に頼んでタクシーを呼んでもらい、家に帰りました。着るものは取り上げられていたので、その白衣を着たままの状態で家に帰りましたが、その後、病院からのコンタクトはありませんでした。

しかし、家に帰ってから、私たち一家は急にどっと疲れが出て、3 日間ぐらいずっと眠り続けていました。起きて食事をしては、また寝るという状態でした。

そして、事故後 1 週間ぐらいして、夫はプリピャチのほうに戻って事故処理作業を始めましたが、私は事故後 1 カ月ぐらいしてから戻りました。1986 年 5 月になりプリピャチの職場に連絡をとったところ、今は食品供給関連の仕事をしているというので、食品の支給などの仕事に入りました。

主人が事故直後にした仕事というのは、今の 30 キロ圏内に住んでいた人たちを避難させるという仕事でした。

○川野　しかし、プリピャチに住むことはできませんよね。どこから通われていたんですか。

○ヴィクトーリヤ　その 8 月まで、先ほど言ったポレスコエという町の文化会館の中で、折りたたみのベッドを並べて寝泊まりするような格好だったのですが、8 月になると、自分と息子はクリミアのサナトリウムに行きました。そこから、9 月にはキエフに戻ってきて、当座の住居というのでオボローニというビール工場の寮を与えられて、そこに仮住まいしていて、11 月にやっとアパートの入居案内がありました。

まだポレスコエの文化会館に寝泊まりしていた時、主人は事故処理作業者の娯楽というので、チェルノブイリ市とか、あるいはプリピチャの文化センターにスピーカーとか音響装置を持っていき、趣味でやっていたＤＪをやることがありました。そして、そのスピーカーを持って帰り、自分たちのベッドの頭のほうに置いていたのですが、そのスピーカーがひどく汚染されて

いたのか、私はそのベッドに寝ると頭がふらふらするような気がしました。起き上がると普通なんですが、横になると調子が悪いというようなことがあって、これはスピーカーのせいではないかということになり、それからは寝る部屋とは別の所に保管してもらうようにしました。

○川野　避難されて、いろいろな所を点々とされて、やはりプリピャチで仕事をされるわけですが、その間、避難にまつわることや、避難後のつらい体験などたくさんあったかと思います。その中で特に思い出すようなことがあれば教えていただきたいのですが。

○ヴィクトーリヤ　いえ、自分たちがその時期、点々として落ち込んでいたかというと、必ずしもそうではありませんでした。まだ自分も 25 歳で若かったというのもあるかもしれませんが、キエフで仮住まいしていた時も、まだその当時、原発で働き続けていた知り合いがいたわけで、彼らがキエフに来ると、一緒にレストランに行くなど、それなりに楽しくやっていました。

ひょっとしたら、そういう事態の深刻さに対して、自分たちのほうが、それを十分受け止められなかった、そういう気持ちの準備とか整理ができていなかったというのもあるかもしれません。

○川野　事故後、もうプリピャチに帰れないというのはいつごろ分かったんですか。

○ヴィクトーリヤ　ポルタバに行った後だと思います。われわれは直接原発の仕事に従事していたわけではなかったので、すぐに分からなかったのですが、知り合いの原発職員や、チェルノブイリ原発で仕事をしていた人からも、もうおそらくプリピャチには戻れないであろうというふうに聞かされました。

○川野　それを聞いた時、どんなお気持ちでしたか。

○ヴィクトーリヤ　やはり自分たちが若い時を過ごした町ですから、残念ではありましたが、一方でキエフに住みたかったというのもあるので、それがこういうかたちで実現してしまったという嬉しい気持ちもありました。

でも、夫のほうは、すぐに頭を切り替えるのは難しかったようです。こういうことは、女性のほうが順応するのが早いのかもしれません。

○川野　原発事故の被災者であるということで、偏見とか差別とか、そういったことを経験したことはありますか。

○ヴィクトーリヤ　私たちがキエフでタクシーに乗った時、その運転手さんは私たちが被災者だというのを知らなかったのですが、チェルノブイリの話になって、ああいう連中は、その後、あちこちに放射能をまき散らさないように、みんなその場で息の根を止めたほうが良かったんだ、と言われたことがありました。それは 1987 年ごろだと思います。

それから、事故後、自分たちにアパートの支給があった時も、家具とか食器に至るまで何もなかったので、それを入手しなければいけなかったわけですが、当時、ウクライナで家具というのは不足状態にあって、一般の人が手に入れようと思ってもなかなか手に入りませんでした。

そのため、これは被災者が最も必要なんだから、彼らに優先して売るようにという指令があったのですが、私が台所の調度などを買おうと思って店に行き、被災者ですという話をしたら、

その売り場の人に、あなたたちにはこんなものは要らないだろう、被災者なんかみんな死んでしまえばというようなことを言われたこともありました。

私はその時非常に怒り、つかみかからないばかりでした。それで騒ぎになって、店の経営者が出てきて、「申し訳ございません。皆さんに優先してお売りします」と言ったのですが、私は「あなたたちの所の家具なんか要らない」と言って出ていきました。

○川野　アパートの配給時に、もともと入居予定だった人たちと、そのアパートを配給される予定だった人との間に軋轢があったというようなことはありませんでしたか。

○ヴィクトーリヤ　はい。確かに順番待ちで長年待っていたキエフの人たちの怒りを買ったということがありました。私たちは5階のアパートだったので被害はありませんでしたが、同じ集合住宅でも1階や2階の人の窓が割られたということがありました。

○川野　そういった話はよく聞くのですが、そういった事件が新聞記事になったりした記憶はありませんか。

○ヴィクトーリヤ　いえ、当時の新聞を読んでいると、被災者は手厚く保障されていますというようなことしか書かれていません。ですから、直接そういうことを経験した人を知らなければ、何も分からないような状態だったんです。

ちなみに、その与えられた集合住宅でも、最初、冬場の暖房があまり効いていなくて、寒い時は室温が 12 度ぐらいしかなく、われわれはその住宅管理公社のような所に文句を言いに行ったこともありました。

○川野　分かりました。非常に大きなざっくりした質問ですが、原発事故のせいで自分の人生が狂わされたとか、そういった思いはありますか。

○ヴィクトーリヤ　もちろん、そうですね。変わったと思います。事故前に自分たちが考えていた予定に比べると、その後は大きく変わったわけですから。しかし、今はその変化自体が良かったのか悪かったのかは言いたくありません。ただ変化があったというだけで。

○川野　原子力発電について、どう思いますか。

○ヴィクトーリヤ　自分はどちらかと言えば否定的です。なぜかというと、プリピャチ市内で「原子の力を兵士でなく労働者にしよう」というスローガンが掲げられていたのですが、それは言葉を換えれば兵士にもなり得るという危険なものを意味します。今では風力発電とか太陽光発電とか、もっと安全な発電方法に賛同しています。

また一方で、キエフのような大都市から 100 キロほどしか離れていない所に、そういう危険な原発をつくるということは、非常に問題であったと思います。

それから、ウクライナは農業国なのに、広大な農地が汚染されてしまったというのも大きな問題だと思いますし、現在、その汚染地の農産物の生産および出荷については、しっかりしたコントロールもありません。つまり、先ほどの例えでいえば、兵士となった原子力と、われわれ人間とはいまだに戦っているという状態なのです。

○川野　では、基本的には将来、原子力というのは徐々に少なくしていって、いつかゼロになればいいなと、原子力というのはなくてもいいのではないかという見解でよろしいですか。そ

れとも安全に使えればいいと、安全であれば使い続けるという選択肢もあるというようなお考えですか。

○ヴィクトーリヤ　はい。前者の方向でいくのがいいと思います。ウクライナに限らず、日本でもあのような事故があったわけで、そういうことを考えれば、世界的にももっと安全なエネルギーを使うという方向にいったほうがいいと思います。

息子がキエフにいました時には、太陽電池で使うような材料を作る工場で働いていました。もちろん今の段階で、一般の市民には太陽電池というのは高価で手の届かないものですが、それを西ヨーロッパに原料として輸出しているわけです。しかし、残念ながら、今のウクライナでは、田舎に行くと、太陽電池の載っている屋根ではなく、わらぶき屋根の家屋がまだまだ見られる状態です。

今、私は外国に行く機会もあるのですが、その見分の範囲では、ほかの国では、もっと政府が国民のことを配慮していると思えます。しかし、ウクライナではその逆で、まるで政府が国民を徐々に消滅あるいは死滅させる方向にあるのではないかというふうに思えるんです。

私のように自力でビジネスをやっている人でなく、公務員などであれば、ただ奴隷のように使われているだけで、払われている給料というのも紙切れでしかないような給料で使われています。

また昔は、例えば若い人たちは一緒に集まってポジティブなことをやろうというのが普通だったのですが、今はみんなばらばらになってしまって、家にこもっているような若い人も多くなりました。それはやはり国が一人一人のことを配慮していないということと関係があると思います。

ウクライナのそういう状況を見ていますと、あまりこういう所にいたくない、外国にでも行ってしまいたいと思うぐらいです。

○川野　では、少し福島の話で幾つか質問させていただきたいと思います。

3 月 11 日に地震があって、津波があって、その後、福島第一原発事故がありました。それに対して、どのように理解されていますか。

○ヴィクトーリヤ　もちろん日本の方々は大変お気の毒だと思います。ここのゼムリャキによく日本の方も来られるので、われわれはもちろん、あの方々は大丈夫だっただろうかと、すぐに心配しました。それで、代表のタマーラが連絡をとって教えてくれたことによると、直接ここにいらっしゃった方というのは、幸いにというか、日本の別の地域の方々で、直接被災はされなかったということでした。

それにしても、日本のように非常に科学技術も発展している国で、そういうことが起こったというのはなぜなのだろうかと不思議でした。日本国政府も、地震の可能性ということぐらいは分かっていたと思うのですが、それに対応するような方策が採られていなかったのでしょうか。とにかく、あのような惨事が起こってしまったということは非常にお気の毒だと思います。

一方、以前、ヨーガ療法学会という所の人だと思いますが、福島県から来られた方が 1 人いらっしゃったんですね。その方が、こちらのゼムリャキのメンバーとメールで連絡を取り合っ

ていて、こういう場合、どうしたらいいでしょうかと聞いてこられたのですが、それを見ると、やはり事故直後、日本の方々も、チェルノブイリ原発事故直後のわれわれと同じように、事故が起こった場合にどうするべきかという情報がなかったようです。

私は、やはり原発には反対です。というのは、今、人間は原発をきちんとコントロールして、安全に使うということができていないと思うからです。

その事故後、われわれがここに集まって話していた時、日本で被災した人たちの逃げ場がない、または避難先がないというのであれば、ここに来てもらえれば、ホームステイもさせてあげたいというふうに言っていました。もちろん大変なことだと思いましたし、自分たちができることがあれば支援したいというふうに思って、何か物資も送ったほうがいいのではないかなど、最初はそういう話もしていました。

○川野　ありがとうございます。今、日本では、福島の被災者の方々に、今後どういった保障をしていくのかということが議論されています。その時に、これまでの経験で広島・長崎の被爆者に対する支援、そしてチェルノブイリでこれまで行われてきた保障を参照しながら、今から支援制度というのが出来上がるのだろうと思うのですが、そういった視点で、チェルノブイリの被災者の方々に提供された保障制度を考えてみると、福島の人たちにはどういった保障が一番大事だというふうにお考えですか。

○ヴィクトーリヤ　今おっしゃった広島・長崎、それからチェルノブイリ、福島ということでいうと、どれも核の惨事には違いないのですが、それぞれ性格が少しずつ違います。広島・長崎は戦時中の話で、チェルノブイリの場合は実験とかヒューマンファクターもあったわけですが、今回の福島は天災というか、地震が直接の引き金です。しかし、被害を受けた人の立場からすれば、共通の部分が大きいと思います。

それで、保障のことで言いますと、まず福島で避難しなければならなかった人については、その住居も保障されなければいけないと思いますし、たとえば農業をやっていた人であれば、新たに仕事を続けていける農地の提供も必要だと思います。

また、健康診断も無償で受けられるようにし、その後の治療も、やはり国が保障するべきだと思います。今、チェルノブイリ被災者ですと、健康診断を受けられても、あとは自腹で治療をしなさいと突き放される状態なので、それではいけないと思います。その他に、例えば公共料金 50%は国が負担するというようなシステムがあったのですが、それは今月で終わります。

○川野　それは本当ですか。

○通訳　そうだと言われました。

○ヴィクトーリヤ　あるいは、食費手当という名目で、今一人当たり 160 グリブナーとか出ているのですが、この金額は、本当にそれで日々フルーツや野菜が十分に買えるかというと、そんな額ではありません。

健康の問題についていえば、遺伝的な影響も十分には解明されていないことですから、二世、三世の人も、しかるべき診断が受けられるようにすべきだと思います。

しかし一方で、そういう被災者を隔離するような状態にしてはいけません。被災者以外と区

別や特別扱いするというかたちではなく、社会の一員として、しかし受けるべき保障は受けるというふうにしなければならないと思います。

今、私たちチェルノブイリ被災者の状況というのは、受けられるべき保障もどんどん削られていて、今、自分のアパートの部屋から見ていると、ごみのコンテナの中からガラスの瓶を探して、それを換金所に持って行きお金にしている、人たちを目にします。また、保障されるべき年金がもらえなくて裁判を起こしている人もいるような、非常に人をおとしめるような国の状態になっていますから、福島の人たちが将来そのようになってはならないと思います。

○川野　非常に貴重な聞き取りをさせていただいた上に、有意義な提言までいただきましてありがとうございました。私は時々、新聞でこのようにコメントをしますので、今のコメントはチェルノブイリの被災者の方からお聞きしたということで、ぜひ紹介したいと思います。

○ヴィクトーリヤ　では、私の発言を引用した後は日本にも呼んでくださいね（笑）。

○川野　それは新聞社に言っておきます（笑）。

非常に有益なメッセージというか、ご意見をいただきました。例えば被災者を隔離させてはならないなど。やはり被災地では、コミュニティーというものが崩壊して離散するわけですね。コミュニティーが崩壊してしまって、結局、隔離されたような状態になってしまうというようなことが往々にしてあるわけです。

ですから、これまで持っていたコミュニティーというのを、できるだけ元に近いかたちで維持するというのが、彼らの精神的な不安も、たぶん軽減するであろうというふうにはずっと思っているわけですが、非常にはっとさせられるようなご提言をいただいて、ちょっとびっくりしています。

○ヴィクトーリヤ　何よりも被災者の方々の精神状態というか、私が先ほど言ったタクシーの運転手のような、そんな奴らはいなくなってしまえばいいというような扱いをされるのではなく、常に周りからの配慮を受けているという気持ちを持てることが大変重要だと思います。むしろ、お金以上に、そういう精神的配慮のほうが重要ではないかと思います。

○川野　大変身につまされるというか、非常に勉強になりました。ありがとうございました。

私が用意した質問は以上ですが、ほかの先生方から何かあれば、ご質問をいただければと思いますが。

○ヴィクトーリヤ　どうぞ。

○小宮山　では一つだけ。もしあればでいいのですが、チェルノブイリの事故を知らない人、あるいは関心を持たない人に対して、ご自身の経験から何か伝えたいことがありますか。あればお聞かせいただきたいと思います。

○ヴィクトーリヤ　まず１つは、誰でもそういう状況に陥る可能性はあるということですね。100％大丈夫というようなことはないと、誰でもそうなる可能性があるということを考えておくべきだと思います。

それと、そういう人たちに対して、人道的に支援しなければならないと思います。例えば、われわれがポレスコエという所に最初、バスで行った時に、そのポレスコエの人たちが、うち

はまだ人が来ていないけど、うちも誰か引き取りたいと言って、自分から申し出て被災者をステイさせてくれたということがありました。

今はそういう人情も少し薄くなっているかもしれませんが、そういう目の前で困っている人たちに何かしてあげたいという気持ちは、われわれスラヴ民族だけではなく、世界的にどこでもあることだと思うので、そういう気持ちを大切にしてほしいということです。

○小宮山　ありがとうございました。

○ヴィクトーリヤ　以上ですか。

○川野　ありがとうございました。日本でも、やっと最近、原発の是非について議論するようになったという状況です。もともと僕はこういう研究をしていて、チェルノブイリの光と影というか、もちろん原発というのは恩恵もさまざまと与えてきましたが、一方では影の部分もあると思います。影の部分というのは、たぶん、それぞれの被災者がこういう社会的な、あるいは経済的な、心理的な影響、被害を受けるということです。

そういった部分というのは、日本ではなかなか議論してこなかったし、あるいは世界はあまり目を向けてきませんでした。そういったところを議論して、その後に原発を使うかどうかということを、しっかり考えるべきだろうと思います。僕は一人の研究者でしかありませんが、そういったことをずっと考えていました。

○ヴィクトーリヤ　しかし、残念ながら、今は経済という考え方がはびこっていて、お金が世界を支配しているかのような状態です。それがドルなのか何なのか分かりませんが。ウクライナでも、ソ連崩壊前の、いわゆる鉄のカーテンが開く前は、そういう人情とか助け合いという面では、もっと温かみがあり、人々がお互いのことを思いやる気持ちがもっとあったのですが、今はそれぞれ家の中にこもってお金を数えているかのような感じがします。

もちろん、お金そのものが悪というわけではなくて、お金があることで人命が救われたりもします。そういう面もあるのですが、今はそういう考え方が偏ってしまって、お金を持っている人は王様であると、何でも支配できるというような考え方がはびこっているようです。

しかし、お金があれば、すぐに健康になるかというと、そういうわけでもありません。アレクサンダー大王という人は、自分が亡くなって葬るときには手のひらを開いて葬ってくれと、あの世には何も持っていけないんだよということが分かるようにと言ったそうです。

○川野　原発の話から、そういう話になりましたか。

○通訳　なったのですが。ですから、先ほど川野さんが、経済の観点で原発が議論されているけれども、そうではなくて社会的、心理的とか、いろいろな面からもと言われたので、たぶんこういう話になったのではないかと思います。

○川野　日本は、少なくとも 2011 年 3 月 11 日までは、原発の議論をしたことはほとんどありません。経済的であろうが、他の側面であろうが議論をしたことはありません。

それで、そういった影の部分というのを、チェルノブイリを通して考えることによって、原発の是非というのを議論したほうがいいのではないか、そういったことはよく新聞紙上などでも言っていたのですが、ほとんど無視されていたんです。しかし、3 月 11 日以降は頻繁にコ

メントなどを求められますから、そういった意味では現金なものですね。

あともう一つ、福島は自然災害の一端だというようなお話でしたが、全員が全員ではないですが、ある研究者などはヒューマンファクターだというようなことを指摘する研究者もたくさんいます。いろいろな議論があります。

大変有意義なお話を聞かせていただきまして、ありがとうございました。

ベロウーソヴァ・ナターリヤ・ニコラエヴナ（女性）
2012 年 9 月 16 日実施　通訳：竹内氏

インタビュー風景　ベロウーソヴァさん

○川野　それでは、調査を始めたいと思います。

こんにちは。われわれは広島大学からきました。ゼムリャキのご協力をいただいて、プリピャチに住んでいらっしゃった方々を対象にインタビュー調査をしています。2009 年から始めまして、これまで 14 名の方々にインタビューを行っています。

われわれの調査の目的は、皆さんの声を手がかりに原発事故、原発の被害とはいったい何だったのかということを考えたいということです。

調査を始めた 2009 年の時点では、原発の是非を考えたいと思っていました。われわれは、広島大学で原爆あるいは被爆の研究をしています。日本は、広島・長崎での原爆の被害がありながらも原発の是非については考えてこなかったという背景があります。そういった視点で原発のあり方を考えたいというのが当初の目的でした。

日本には 54 基の原発があったにもかかわらず、原発のあり方あるいは是非についてはほとんど議論をしてきませんでした。ところが、皆さんもご承知のように、福島原発事故が起こってしまいました。福島で今後何が起こるのか、あるいは福島に対して何をしなければいけないのかということも、われわれの新たな研究の目的に加わりました。その際、皆さんのこれまでの経験をぜひ生かしたいと考えております。　それで、幾つかお願いがございます。まずは、もう既に録音しておりますが、この録音を録らせていただくことを許可いただきたいと思います。そして、これまでのインタビューは、実名で報告書にまとめて発行しています。こういったかたちで皆さんのインタビュー記録を残させていただいてよろしいでしょうか。

○ベロウーソヴァ　問題ありません。

○川野　皆さんとのインタビューの様子等々を新聞にも掲載してもらったりもしています。これは、私が調査をしている内容を取り上げられた記事ですが、新聞への掲載もご了承いただけますか。

○ベロウーソヴァ　もし必要があって、われわれの話で役に立つようでしたら、もちろん構いません。

○川野　ありがとうございます。

それでは、早速インタビューに入らせていただきたいと思います。プリピャチ時代の話、そ

して現在の話をお聞きしたいと思います。内容によって、あまり思い出したくないということがもしおありでしたら、その旨をお伝えいただければ、それに関する質問は途中でやめたいと思いますので、ぜひ遠慮なくお申し付けください。

まず１名ずつ､それぞれにお聞きしたいと思います｡1 時間半から２時間ほどを奥さまから、その次にご主人というふうに順を追ってお聞きしたいと思います。それぞれ一人ずつお聞きいたします。まずは奥さまのほうから始めたいと思います。

それでは、まず基本的な事項、氏名、生年、人種、宗教、最終学歴等々をお教えいただければと思います。

○ベロウーソヴァ　ベロウーソヴァ・ナターリヤ・ニコラエヴナ。

○通訳　名字がベロウーソヴァさん、名前がナターリヤさんです。

○ベロウーソヴァ　生年月日が 1952 年 1 月 8 日で、ロシア人です。

○通訳　父称というのがニコラエヴナ、お父さんがニコラエヴナという人というそうです。

○ベロウーソヴァ　宗教は正教で、最終学歴は、中等教育を終えて、その後、大学にも入ったのですが、いろいろあって中退しました。

ロシアのチェリャビンスク州のアルガヤシという町で生まれたのですが、母が教師としてそこで仕事をしていて、私は生まれてすぐ、そこから引っ越しました。ですから、ここは生まれたというだけの町です。

その後、住んでいたのは、ロシアのサラトフ州カリーニンスクという町です。これは、ヴォルガ川の流域です。そこにずっと住んでおり、学校も卒業して結婚しました。

プリピャチに引っ越しましたのは、1974 年の 5 月でした。引っ越したのは、主には住居の問題でした。1974 年の時点で子どももいたのですが、自分たちのアパートがなくて、プリピャチに行けばアパートが配給されるということを聞きまして移住しました。

○川野　結婚されたのは何年ですか。

○ベロウーソヴァ　1970 年の 12 月に結婚しました。

○川野　では、結婚されて、ご夫婦でプリピャチに移られたということですね。

○通訳　そうですね。

○川野　その理由は住居の問題だけだったのですか。それともお仕事の問題もありましたか。お仕事はプリピャチに行かれて見つけられたのですか。

○ベロウーソヴァ　主人は水産大学を卒業しました。主人の専門は魚類学だったのですが、当時、その専門ではいい仕事がなくて、代わりにロシアのウリャノフスク州のデミトロフグラードにあった原子力研究所で仕事をして、その関係でプリピャチのことを聞きました。

1972 年に娘も生まれていたので、先ほども言いましたように住居が主な目的でプリピャチに移りました。しかし、そんなにすぐにアパートが配給されたわけではないので、最初はプリピャチのすぐそばの村、ノーヴィエシェペリチェ [7]という村に住んでいました。

○川野　それはプリピャチからどれぐらい離れていますか。

---

[7] プリピャチから 5km くらい離れた村。

○ベロウーソヴァ　プリピャチと隣接している村でした。その村では、私たちのような人たちのためにアパートが結構あったので、そこに最初は住んでいました。村からは、職員のために原発行きのバスが特別に出ておりまして、それでプリピャチに通っておりました。
○川野　はい、分かりました。今は 1974 年までですね。
○通訳　1974 年時点ですね。
○ベロウーソヴァ　その後、1977 年に 2 人目の娘が生まれました。
○川野　では、ベロウーソヴァさんは、1974 年にプリピャチに来られて、お仕事はされていなかったのですか。
○ベロウーソヴァ　ちょっと話が前後しましたが、プリピャチに住むようになったのは 1978 年からですが、その時点で 2ＤＫのアパートがプリピャチで提供されました。そのころの基準ですと、子どもが 2 人いれば本当は 3ＤＫがもらえるはずだったのですが、もう待ちきれずに、一時的に 2ＤＫでもいいということに同意して、プリピャチに移りました。
　まず、主人がプリピャチで原発の建設局に就職した後に、私自身も同じ職場で仕事をするようになりました。
○川野　はい、分かりました。仕事の内容は、また後ほど聞きましょう。それが 1986 年まで続いたということでよろしいのでしょうか。
○ベロウーソヴァ　それで、その時点で 2 人娘がいたわけですが、夫は息子が欲しいというのもありましたし、また子どもが 3 人いれば、さらに４ＤＫのアパートがもらえる権利があるということもあって、1981 年に子どもを産んだのですが、やっぱり娘でした。
○川野　ははは（笑）。
○ベロウーソヴァ　その娘が生まれたということで、実際に 4ＤＫのアパートが配給されました。その 4ＤＫのアパートに、事故が起こるまでずっと住んでおりました。
○川野　結局、2ＤＫにずっとおられたということですね。
○通訳　いえいえ、その 1981 年に 3 人目の娘が生まれた時点で、4ＤＫのアパートに移られたということです。
○川野　4ＤＫに移られた。はい、分かりましした。
○通訳　そして、事故時点まで、そこに住んでいたそうです。
○川野　はい、分かりました。次は、1986 年以降の期間、そして所在地、仕事などをお教えいただければと思います。
○ベロウーソヴァ　チェルノブイリ原発事故の時点では家族一同、夫婦と 3 人の娘が一緒に、そのアパートに住んでいました。
○川野　次は、1986 年以降ですね。
○ベロウーソヴァ　チェルノブイリ原発事故が起こった時の状況ですが、まずその説明として、現場での仕事というのは、主人は放射線の値を測定する仕事で、私は現場で溶接とかがきちんとできているかどうかというのをチェックする仕事をしていました。
　私たちの仕事は、いずれも夜間に当直で行うような仕事でしたので、子どもが小さかった時

は、私が3日間夜勤をして、交代で今度は主人が3日間夜勤をするというようなやり方でしたが、子どもたちが大きくなってきたので、事故当時のころは一緒に3日間夜勤をしていました。

そして、事故が起こった4月26日は土曜日で、金曜日から土曜日にかけての夜中に起こったわけですが、25日金曜日の朝に二人とも夜勤が明けて、26日は休みの日でした。

○川野　ご自宅にいらっしゃったということですね。

○ベロウーソヴァ　25日の金曜日は、夜勤から帰ってきて、家事を済ませてから夜ぐっすり眠ったので、夜中に事故が起こったことは何も知らずに寝ていました。26日の朝になって、主人の父が来ました。

主人の両親はロシアに住んでいたのですが、チェルノブイリ原発事故の1年ぐらい前にプリピャチに引っ越してきていました。そのころ、プリピャチというのはなかなかいい町で、すぐ周りに川もあって、主人の父は釣りが好きな人でしたのでボートも持っていて、よく川に釣りに行っていました。

それで、26日の朝、お父さんがうちに来て、どうも事故があったようだという話をしました。その時点では、誰も具体的なことはよく知らなかったのですが、外を見てみますと舗装道路を洗う車が走っていました。

○川野　除染車ですね。

○ベロウーソヴァ　また、軍人がたくさん歩いているました。その時点で、もちろんいろいろな恐ろしい噂は飛び交っていたのですが、具体的なことは、まだ分かりませんでした。

○川野　どのような噂でしたか。

○ベロウーソヴァ　どういう噂かと言いますと、まず爆発があったということでした。原発職員の人たちは、もっと具体的なことを聞いていたようですが、われわれは当時5、6号機の建設現場のほうでしたので、あまり詳しいことまでは聞こえてきませんでした。

でも、われわれが住んでいた9階建ての集合住宅の隣に16階建ての集合住宅があって、そこに住んでいた人たちは、その16階の屋上に上がって原発のほうを見たら火事があったり、夜中に原発のほうの空が明るくなっていたりするのを見たという話とか、あるいは病院に放射線やけどをした人たちが担ぎ込まれたとか、そのような話が流れていました。

その時は4月末でしたが非常に暑くて、春というよりも夏になったような天気でした。26日になりまして、私たちの一番上の女の子は7年生で、学校で運動会があったので行きました。しかし、べつに危ないとか何とかいう話もなくて、砂場でも小さい子が遊んでいるような状況でした。

しかし、26日の夕刻になると、ラジオで、事故があったので窓をあまり開けないようにとか、床を頻繁に洗うようにとか、そういう放送がありました。また、27日の朝になると、ヨード剤が配られました。

○川野　ラジオ放送は何時ごろありましたか。正午ではないですか。

○通訳　いやいや。正午というのは27日の正午ですね。今言われたのは多分26日です。

○川野　26日にも何か放送があったのですか。

○通訳　そうおっしゃっていますね。
○川野　それは初めて聞きましたが、26 日の放送はどんな放送があったのですか。
○夫　そういう放送は 26 日はなかったんじゃないの。その話を聞いたのは 27 日になってからだよ。
○ベロウーソヴァ　まあ、そうかもしれない。少なくとも 26 日の時点で、何にもパニックとかはなく、異変は見られたけれども、一般のプリピャチ市民は、特に慌てているようなこともありませんでした。
　それで覚えているのは、主人は「事故があったというんだから窓を閉めなきゃ」と言ったのですが、私は「何もそんな過敏にならなくてもいいんじゃないの」と言って、ちょっと言い争いをしたのを覚えています。
　26 日は土曜日でしたので、多くの人は郊外のダーチャとかに行っていたという人も多かったですし、後になって被ばく線量が多かったという人たちは、郊外に出ていたような人が多かったです。
○川野　分かりました。それでは、26 日は別段パニックもなく、普段どおり過ごされたということですか。
○ベロウーソヴァ　はい、そうですね。土曜日は普通に過ごしていました。プリピャチのすぐそばのプリピャチ川に行っている人も多かったですし、町では何か珍しい食料品が店に入ったというので、行列をして待っている人たちもいて、噂は流れていたけれども、一方で市民の生活はそれまでのように普通に流れていました。
○川野　はい、分かりました。それでは 27 日です。正午に、たぶんアナウンスがあったと思うのですが、そのアナウンスの内容とかは覚えていらっしゃいますか。
○ベロウーソヴァ　27 日の朝になるとヨウ素の錠剤が配られて、避難が行われるようだという話も伝わってきました。
○川野　それは誰から伝わってきたのですか。
○通訳　いつだったかという話で、意見の相違があります。
○川野　奥さまの話にしましょう。
○ベロウーソヴァ　避難があるようだというのは、主人の父から聞きました。先ほど、26 日の朝に父がうちに来たという話をしたのですが、その事情は、チェルノブイリ原発事故が起こった時に、主人の両親は原発の建設現場で警備の仕事をしておりまして、事故が起こった夜は、主人の母のほうが夜勤の予定だったのですが、母はロシアのほうできょうだいが亡くなって、そのお葬式に行っていたという経緯があって、その代わりに主人の父が夜勤をしていました。
○川野　なるほど。
○ベロウーソヴァ　事故が起こった晩、主人の父は原発から 200 メートルぐらいの所にいたそうです。そして、事故が起こったということを主人の父が聞いて、26 日の朝に来て、どうも大変なことがあったようだと、避難もあるのではないかとか話がありました。
○川野　正午のアナウンスの話は何か言っていらっしゃいましたか。

○通訳　まだですね。
○川野　では、午前にヨウ素剤は配られたということですか。
○通訳　はい、そうですね。
○川野　それは間違いないですね。
○通訳　はい。
○川野　アナウンスの内容を覚えていらっしゃいますか。
○ベロウーソヴァ　避難がありますということで、バスが集合住宅にずっと横付けになっていて、貴重品と 3 日間程度の食品を持ってこのバスで避難するようにという内容でした。
○川野　食品だけですか。
○通訳　そうですね、貴重品と食品です。
○川野　分かりました。ちょっと話が元に戻りますけれども、ヨウ素剤は子どもさんたちに服用させましたか。
○夫　飲んだよ。
○ベロウーソヴァ　よく覚えていないわ。
○夫　ヨード剤を持ってきたのは学校関係の人だったので、主には子どものためという話だったけど、でも一家で飲んだよ。
○川野　ああ、皆さん、飲まれたということですね。分かりました。
　27 日、避難する時に、たくさんのバスが来たと思いますが、何時ごろバスに乗り込まれたか覚えていらっしゃいますか。
○ベロウーソヴァ　14 時です。その時は、うちに主人の父も来ていて、一家でバスに乗りました。
○川野　食料品、貴重品は何を持って行かれましたか。
○ベロウーソヴァ　身分証明書とかそういう書類関係と、子どもには上着も持たせました。とにかくすごく暑かったものですから薄着でしたし、その後も暑いだろうという予測だったので、私自身は何も、特に着る物は持って出ませんでした。また、装飾品で金のものとかもあったのですが、それも特に持ち出すこともなく、棚にしまい込んで、とにかく 3 日間という話でしたので、そのまま出ました。
○川野　その時の貴重品の中で、今考えて、あれは持ってくれば良かったというものがありますか。
○ベロウーソヴァ　もう今は時間もたちましたから、特にあれは持ってくれば良かったと思うことはありませんが、避難後の早い時期に二人で、あれはどうしたかな、あれはもう置いてきたんじゃないのと言って思い出すことはよくありました。
　しかし事故後に、2 度戻ったことがありますので、その時にまた持ち出したものもあります。
○川野　はい、分かりました。それでは、27 日以降のお話を聞かせてください。バスに乗り込まれて、まずどのような経路で避難されましたか。
○ベロウーソヴァ　一家がバスに乗った段階で、主人の同僚が来て、放射線測定をする人が足

りないから残れと言われて、主人は降りて、残った主人の父と私と娘 3 人でバスで出ました。
○川野　まず、どこに向かわれましたか。
○ベロウーソヴァ　ポレスコエ地区から、原発から 5、60 キロ離れているカラリョーブカという村まで行きました。
　ちなみに、このカラリョーカというのは王様という言葉からきていますが、その村も、その後、線量が高まったというので村ごと避難させられました。
○川野　分かりました。それで、27 日はそこに泊まられたのですか。
○ベロウーソヴァ　最初はこの村でホームステイをしました。きちんとベッドなども提供されて、よく対応してくれました。
○川野　それは 27 日からですか。
○通訳　27 日からです。
○ベロウーソヴァ　27 日からそこにいたのですが、その後、夫がどうなったかということも全然伝わってこず、5 月 1 日は当時はメーデーという大きな祝日でしたので、この地区の中心のポレスコエという所へ行けば何か情報があるかもしれないと思って、そこへ行きました。
　すると、夫は実はそのポレスコエの近くの当時の保養キャンプのような所にいて、そこから事故処理作業に行っているという話を聞きました。その日、ポレスコエには、やはり自分たちと同じように周辺の村にステイさせられた人たちがたくさん来ていて、そこで会った知り合いに、夫はポレスコエの近くのカシャーロブカというキャンプにいると聞き、そこに行きました。これからどうするのか、とにかく相談して決めなければと思いました。
　そこに行くと、夫は仕事中だったのですが、夕方に帰ってきました。そして、夫はチェルノブイリ原発で、やはり放射線測定の仕事をしていたので、「もう一刻も早く避難しなきゃいかん」と言いましたが、しかし、自分たちは海外に親戚もいませんし、どこか遠くに避難するといっても、先立つものが必要なわけですが、この 5 月 1 日のメーデーを前に、あらかじめ食べ物を買い込んだりとかしていてお金がありませんでした。そこで、主人が職場の会計の女性からお金を借りて、とにかく逃げるんだということで、その日の晩は私たちがステイしていたカラリョーブカに一緒に泊まりまして、その翌日に村を出ました。。
○川野　そして、どちらに向かわれましたか。
○ベロウーソヴァ　それで、5 月 4 日にバスで一家 5 人はキエフへ行きましたが、キエフでは、もうその時点でパニック状態になっていまして、駅は切符を買う人たちでいっぱいで大変な状況でした。しかし、おじいさんは退役軍人でしたので、そういう人には特典があって、別の窓口があったんです。そこで何とか切符は手に入れることができて、モスクワ経由で実家のサラトフ州の町に戻りました。
○川野　それは 5 月 4 日ですね。
○通訳　キエフから出発して向かわれたということです。
○川野　5 月 4 日に出られて、いつ故郷のほうに着かれたのですか。
○ベロウーソヴァ　5 月 9 日の戦勝記念日の前には、もういたというのを覚えているので、た

ぶん5月8日には実家に戻っていたと思います。
○川野　はい、わかりました。
○ベロウーソヴァ　そして、主人と再会した時に外部被爆線量を測定されて、自分が着ていた服も非常に汚染されているので脱がなければいけないということで、ずっと着ていた服を脱いで、あり合わせのものを主人が着せてくれました。
　しかし、それは薄着で、もうモスクワのほうではすごく気温が下がっており、ロシアのサラトフ州の実家に着いたら、まだ雪が残っているような寒さでしたので、私の母は私を見て薄着なのでびっくりしたということでした。子どもたちは上着を持っていたので、まだ良かったのですが。
○川野　それで、その後、いつまでサラトフ州のほうにおられたのですか。
○ベロウーソヴァ　サラトフ州には夏の終わりぐらいまでいました。その間、夫からは何の知らせもなく、非常に不安でしたが、子どももいるし何とかしなければというので、そこの地区の執行委員会というところが仕事の世話をしていたので、取りあえず養鶏場で仕事をしておりました。
○川野　それはサラトフ州でということですか。
○通訳　そうです。
○川野　はい、わかりました。それが夏まで続いたということですか。
○通訳　はい。
○川野　その後の話を教えてください。
○ベロウーソヴァ　主人からは何の便りもありませんでした。最初のうちは、テレビで事故のことを見ているだけだったのですが、そのうち手紙が来て、7月に夫が面会に実家まで来ました。
　また別の話ですが、しばらくすると、チェルノブイリ、プリピャチのほうから避難してきたということがその地区に伝わって、サラトフの血液病センターで検査を受けろと指令があり、連れて行かれました。そこで、着ているものはほとんどがプリピャチから着てきたものばかりだったのですが、こんなものを着ていては駄目だから捨てるようにとか、子どもたちの靴も廃棄するようにというような指示を受けました。
○川野　わかりました。それで、キエフに結局来られるわけですが、そこまでの経緯を教えていただければと思います。
○ベロウーソヴァ　その当時の制度としてサナトリウムとか、子どもの保養地というのがあって、夫がそのバウチャというようなものを入手しました。
○川野　保養券ですね。
○通訳　はい。
○ベロウーソヴァ　それで保養するようにということで、ジトーミル州、キエフ州の西のほうですが、そこにあるサナトリウムで、その後1カ月ほど無料で子どもたちと一緒に保養しました。

○川野　それは夏以降すぐということですか。
○ベロウーソヴァ　はい、8月末にそのジトーミルとおっしゃっています。
（夫婦で会話中）
○川野　二人だと意見が合いませんね。
○ベロウーソヴァ　8月末というのはちょっと混乱がありまして、ジトーミルにいたのが8月末までです。8月のだいたい1カ月かぐらい、そのサラトリウムにいて、8月末にキエフの近くのイルピン[8]という町に仮のアパートを借りて、そこで子どもたちは9月1日から学校に行きました。
○川野　なるほど。
○ベロウーソヴァ　その後、夫は汚染地域で仕事をしていたので、そういう人たちに優先して住居が配給されるということになって、キエフでアパートを配給されました。
○川野　イルピンでもアパートが配給されたのですね。
○通訳　いえ、イルピンでは借りていたわけです。
○川野　仮のアパートですね。
○通訳　そこに2週間ぐらい住んでいました。
○川野　それで、キエフにアパートがあるということで移ってこられたのは何月ごろですか。
○ベロウーソヴァ　提供されたアパートは、このすぐそばの家ですが、そこに9月中旬に入りました。自分たちが、その集合住宅に入った第1号でした。ほかに誰もいませんでした。
○川野　わかりました。入る時に、地域の人たちと何かいざこざみたいなものはなかったですか。
○ベロウーソヴァ　住み始めた時の状況をちょっと言いますと、その誰もいない集合住宅に入って、家具も何もなかったので、最初、夫はどこかから、取りあえず座る椅子の代わりとかいって箱を見つけてきて、座っているような状況でした。

そこに、やはり自分たちと仲の良かった友人の女性で、子どもが二人いる人がいるのですが、その彼女もアパートがなくて困っていたので、うちに来たらと言って、最初はその友人の女性と二人の子どもも同居しており、床にそのまま寝るような状況でした。

そのキエフの一般の人とのトラブルというのは、やはりありました。子どもたちが行った学校でもありましたし、また自分たちが入った集合住宅というのは、その当時の制度でコーペラチーブと言っていまして、コープ、共同住宅です。つまり早く自分のアパートが欲しいという人たちがお金を出し合ってつくる、そういう家でした。そこに自分たちが入ったわけですから、そのお金を出していた人たちの入居が1年ぐらい先延ばしになって、非常にやっかまれました。

そればかりではなくて、何もかもがなかったから、例えば枕とか布団とかから買いそろえて、タクシーでそういうものを運ぶというときに、タクシーの運転手さんと話していて、チェルノブイリから避難してきたんだと言うと、車を止められて、「もう下りてくれ」と言われたこともありました。

---

[8] キエフ市から20km程度離れたところに位置する町。

○川野　それは、なぜ止められたのですか。運転手はどういうことを言いましたか。
○ベロウーソヴァ　そのころは放射線とかの知識について、一般の人できちんと知っている人はあまりいなかったので、被ばくした人からは放射線が出ているとか、そういう誤解もあり、その影響かもしれません。
○川野　それで、具体的に嫌がらせとかをされたことがありますか。
○ベロウーソヴァ　私たちが直接そういう嫌がらせを言われたようなことはないのですが、やはり一般的な風潮として怖がられるということがありました。避難してきた人たちがキエフでアパートをもらった後、測定器を持った人が避難者のアパートを回って、プリピャチから持ち出したものの線量を測って、これは線量が高いから廃棄処分をしなさいとかいう指示をされました。そういうこともあったので、危ないということで怖がられていたようです。
○川野　なるほど。
○ベロウーソヴァ　一般的な話として、1986 年当時というのは非常に物不足の時代で、食品にしても、衣類、家具にしても、なかなか手に入らなかった時代なんです。そういう時に、われわれには国のほうから、これこれの店に行けば、この金額で買えますよという配慮があったわけですね。それが一般のキエフの人から見れば、自分たちだってそれなりに被ばくしているはずなのに、プリピャチの人たちだけ、そういう特典があっておかしいんじゃないかということで否定的に言われたということはありました。
○川野　そうですか。先ほど娘さんのことをおっしゃいましたが、娘さんから、学校での嫌がらせとか、そういったことを聞いたことがありますか。
○ベロウーソヴァ　一番上の娘は、キエフに来てから 8 年生になって学校に行っていました。彼女が行った学校というのは、このすぐそばですが、この近隣は被災者がまとまって入った集合住宅ばかりです。そのすぐ近くの学校も、そういう避難をしてきた子どもたちがまとまって入っていたので、娘のクラスはほとんどが避難をしてきた子どもたちでした。
　しかし、この学校でも、例えば 4 月 26 日になると特別に遠足とかを企画して、よそに行かせて、やはり周りの学校の子と接触がないようにとかもめ事が起こりにくいようにという配慮がしばらくありました。
○川野　わかりました。それで、1986 年にキエフに移ってこられて、その後、お仕事とかはされていましたか。
○ベロウーソヴァ　仕事は、移住してすぐはなかなかキエフで見つかりにくかったのですが、先ほど言いましたようなキエフの一般の人からの否定的な対応というのもあって、避難者の多くは、またチェルノブイリ原発で仕事をする人が多かったです。
　というのは、当時、原発での仕事は給料も良かったのですが、それよりも、やはり知り合い同士、気心の知れた同士で仕事をしたいというのもありました。そのように、避難した人たちはなるべく一緒に固まって助け合うというような傾向がありました。
○川野　具体的に、どの期間どういった仕事をされたのかというのが分かれば教えていただければと思います。

○ベロウーソヴァ　1986 年の 12 月に、また原発で働くようになりまして、それは化学のラボの仕事でした。1987 年いっぱい、その仕事をしておりました。
○川野　どういう勤務態勢でしたか。
○ベロウーソヴァ　しかし、やはり子どもを残して遠方に働きに行くというのはなかなか難しかったので、仕事を辞めました。
○川野　1986 年の 12 月から 1987 年いっぱいということは、1 年間働かれたということですね。
○通訳　はい。
○川野　その間、キエフからチェルノブイリまで、どういった勤務態勢で働かれていたのですか。
○ベロウーソヴァ　2 週間ほどですね、当時は、そういう原発職員のための宿舎がプリピャチ近くのゼロネ・ヌイスという村にあったのですが、そこに住んで、仕事に通って、2 週間の仕事が終わったらキエフに戻ってきて、2 週間は休みという態勢でした。
○川野　分かりました。1987 年以降の仕事の内容、そして期間を教えていただいてよろしいでしょうか。
○ベロウーソヴァ　その後はキエフの工場で仕事を見つけて、老齢年金受給年齢までそこで働いておりました。しかし、その老齢年金受給年齢というのは、自分の場合、その事故処理作業をやったということもあって特典があり、42 歳から年金がもらえるということでした。
○川野　42 歳から年金が開始されたということですね。
○ベロウーソヴァ　それまでは、キエフの工場で仕事をしておりました。
○川野　ということは、何年まで働かれたのですか。
○ベロウーソヴァ　1988 年の 3 月にその工場に就職しまして、42 歳から年金はもらえるようになったのですが、まだ精力的に仕事はできましたので、実際にその工場で働いていたのは 1999 年までです。

そのころになると、工場の就業状況がどんどん悪化してきて、それまでやっていた仕事ではなく、自分としては意に添わない仕事を提案されたので、それは嫌だということで辞めました。
○川野　ちょっと確認ですが、42 歳から年金が支給されたというのは、事故処理作業に携わられたということで前倒しされるという特典があったのですか。それとも、前倒しにプラスして、その事故処理作業にあたられたというプラスアルファの年金があったのですか。
○通訳　まず、前倒しは前倒しです。
○川野　前倒しですね。
○通訳　前倒しというか、年金が貰える年齢の引き下げがあったそうです。
○ベロウーソヴァ　一般年金よりも多少プラスはありますが、しかし、その額が天文学的になっているとか、そういうことは全然なく、ちょっと多いかなというぐらいです。

法律どおりに支給されるはずの年金というのは、もっと額が大きいので、法的に支払われるはずの年金がもらえていないということで裁判に訴えた人もいます。自分たちも訴訟を起こし

ましたし、裁判で勝って年金がもらえるようになった人もいますが、私たちの場合は、政府にこれ以上予算がないということで押し切られてしまって、実際の法律に定められている年金はもらえていません。

○川野　分かりました。1999 年以降は年金で生活されているということでよろしいですね。

○ベロウーソヴァ　はい、仕事はしていません。

○川野　失礼ですが、年金の額を教えていただければと思うのですが、よろしいでしょうか。

○ベロウーソヴァ　現在の年金額は 2,000 グリブナーほどです。

○川野　それは、1999 年以降変動がありましたか。

○ベロウーソヴァ　徐々に増額はしています。今のウクライナの一般庶民がもらっている年金額といえば、1,100 から 1,300 グリブナーというところなので、それに比べれば多いのですが。

○川野　この残りの 800 とか 900 グリブナーというのは、事故処理作業にあたられたというプラスアルファの上積みがあるということですか。

○ベロウーソヴァ　そうです。公共料金に関しても半額になるという特典がありまして、これも私たちにとってはかなり大きな特典になっています。それから、食費援助というのもありまして、これは金額的には大きい額ではありませんが、きちんといい食事をして健康になりなさいという名目でお金が出ています。

○川野　食費援助は今どれぐらいありますか。

○ベロウーソヴァ　ひと月に 168 グリブナーです。

○川野　この額は変わっていないですね。

○ベロウーソヴァ　正確には覚えていませんが、前に比べて、やはり少しずつは増えているかと思います。ちなみに、私も夫も障害者認定は受けておりませんので、こういう額です。

○川野　ああ、障害者認定がないわけですね。分かりました。

○ベロウーソヴァ　障害者資格があると、この食費援助という金額は増えます。300 いくらとかになります。

○川野　それ、確か 2 倍じゃなかったですかね。

○ベロウーソヴァ　はい、そうです。私たちがもらっている額は、その障害者の半分ということですね。娘たちの場合も被災者資格ということがあって、今一番上の娘は二人孫がいますけれども、彼女についても同じような公共料金半額とかという特典はあります。

○川野　分かりました。補償でよくお聞きするのが公共料金半額と食費の援助、そして保養券などがあるのですが、保養券などはもらっていらっしゃいますか。

○ベロウーソヴァ　特典としてはその保養券とかもあるのですが、自分はもらったことはありません。

○川野　ああ、そうですか。

○ベロウーソヴァ　保養券をもらうには、いろいろ書類を揃えて申請をしたり、あっちへ行ったり、こっちへ行ったりしないといけなくて、それがわずらわしいのでもらっていません。

　また医薬品についても、一定の医薬品は無料提供という制度があるのですが、それも利用し

たことはありません。
○川野　なるほど、分かりました。
○ベロウーソヴァ　しかし、その保養券の代わりに、保養支援ということで年間に 70 グリブナーとか、あるいは保養に行くときの往復の運賃が出るという制度はあります。
○川野　分かりました。ちょっと話が元に戻りますが、ベロウーソヴァさんは 2,000 グリブナーをもらっていらっしゃる。後でまたご主人にも確認しますが、ご主人の年金はお幾らですか。
○ベロウーソヴァ　夫は 2000 グリブナーよりももう少し多いです。この年金計算の基礎になるのは、前にもらっていた給料とかも関係してきますので、夫のほうが多くなります。
○川野　ということは、今は、お二人の 4,000 から 5,000 グリブナーぐらいの年金で生活されているということでよろしいでしょうか。
○ベロウーソヴァ　そうですね。主人は心臓の手術がありましたので、もう今は仕事をしていないので、収入は年金だけですね。
○川野　その額は十分ですか。
○ベロウーソヴァ　少ないですが、あるものでなんとかやっているということで、もちろんもっと多ければ、それに越したことはないですが。
○川野　分かりました。ちょっと話が元に戻りますが、1986 年の 4 月 27 日、事故が起こった次の日ですね。避難される時の家族状況を確認したいのですが、まずはご本人、そして義理のお父さま、娘さん 3 人ということでよろしいですか。
○ベロウーソヴァ　そうです。
○川野　ご家族の今の状況を簡単に教えていただければと思います。
○ベロウーソヴァ　主人の父は至近距離で被ばくをしたので、その後、放射線障害が出て、モスクワの病院に入院しました。後で主人がその話は詳しくするということです。
○川野　はい、分かりました。
○ベロウーソヴァ　自分たちは偶然、その事故が起こった時は夜勤ではなかったので助かっていますが、もしその時、自分たちも夜勤をしていたら、もっと被ばくをして大変なことになっていたでしょう。
○川野　娘さん 3 人の状況だけ教えてください。
○ベロウーソヴァ　一番下の娘は、まだ未婚で同居しています。一番上の娘は、キエフで結婚をして 2 人の子どもがいます。真ん中の娘は、今ドイツに住んでいます。
○川野　分かりました。皆さんお元気ですか。
○ベロウーソヴァ　時々どこが悪いとかは言っていますが、健康状態が明らかに悪いということはないです。それは自分が考えるには、早い時期にロシアのほうに避難したのが良かったのではないかと思います。そのままキエフにいたら、もっと健康状態が悪かったかもしれません。
○川野　分かりました。1986 年にキエフのほうに避難していらっしゃって、避難当時と同じアパートに現在も住んでいらっしゃるということですか。
○通訳　そうですね、9 月に配給されたアパートにそのまま住んでいます。

○川野　今お住まいのアパートの広さを教えていただければと思います。
○ベロウーソヴァ　何でしたら、この隣の家ですから見に来ていただいても構いません。
○川野　ははは（笑）。
○ベロウーソヴァ　ちょっと正確に覚えていませんが、4ＤＫぐらいだと思います。
○川野　分かりました。
○ベロウーソヴァ　これもプリピャチで住んでいたのと同じような4ＤＫです。
○川野　同じような広さという、4ＤＫということですね。分かりました。
　非常に大きな質問ですが、プリピャチとはどんな町でしたか。
○ベロウーソヴァ　いい町でした。とても清潔で、緑も多く、インフラも整っていて、子どもたちの幼稚園、学校もすぐそばでしたし、プールもすぐ近くにありました。仕事もあったし、また、すぐそばに川も森もあり、森ではベリーもキノコもいっぱい採れるというレジャーにも大変いい環境でした。
○川野　もし原発事故がなかったら、プリピャチにずっと住んでいらっしゃったと思いますか。
○ベロウーソヴァ　おそらく、そのまま住んでいただろうと思います。もちろんその後、ソ連崩壊とかいろいろなことがあったわけですから、大きく生活は変わっていたと思うので100％とは言えませんが、しかし、その当時のプリピャチの生活水準というのは、ソ連平均から考えても良かったし、給料も良かったです。
　主人は建設局で働いていましたが、将来的には原発職員になりたかったわけです。簡単に原発職員になれたわけではありませんが、建設はいつか終わってしまうので、原発職員であれば、もっと安定しているということもあって、そういう計画がありました。
○川野　なるほど。1986年当時のプリピャチでの月収とかは覚えていらっしゃいますか。
○ベロウーソヴァ　それぞれ300ルーブルほどもらっていたと思います。
○川野　その額は、当時の感覚からすれば高い額でしたか。
○ベロウーソヴァ　子どもが3人いて普通に生活できていたわけですから、十分だったと思います。着るものや家具を買うにも、そんなに不自由もしませんでした。今のこの状況で自分が若い母親だったら、子どもが3人というのはちょっと躊躇すると思いますが、その当時は、生活に不自由はありませんでした。
○川野　当時、車は持っていらっしゃいましたか。
○ベロウーソヴァ　車は買おうと思えば買えたと思いますが、夫は車ではなくボートとかが好きで、自分でヨットをつくっていました。
○川野　なるほど。ちょっと話が飛びますが、プリピャチ当時と今の食事内容で、何か決定的に違うものとかはありますか。
○ベロウーソヴァ　プリピャチでは、当時としては食品はよく揃っていました。それは、例えばチェルノブイリ原発事故後ロシアに避難していたとき、サラトフに行ったら、本当に店に何にもなくて、マーガリンとお酢があるぐらいだったということがありました。その状況から考えると、プリピャチでは不自由していなかったわけです。だから、プリピャチのお店で買った

ものは、親戚に小包で送ったりしていたぐらいです。
○川野　分かりました。これは、この調査とは直接関係はなく、非常に個人的な関心なのですが、二つお聞かせください。一つは、今の印象としてキエフという町はいかがですか、お好きですか。
○ベロウーソヴァ　はい。町としては、キエフはいい町だと思います。ただ、ごみとかが多くて汚いとは思います。しかし、これはキエフに限ったことではなくて、今、ウクライナの大きな町はだいたいどこもそうです。
　というのは、最近ドイツに住んでいる娘が来まして、今、彼女は離婚してドイツにボーイフレンドがいるのですが、その2人が来て、4人で一緒にクリミアに行きました。クリミアというのは、本当に山も海もきれいだし、夏は天気が良くていい所なのですが、町にはいっぱいごみが落ちていて汚かったです。娘のボーイフレンドというのはドイツの人ですが、ごみがいっぱい落ちている状況を見てショックを受けていました。
○川野　ははは（笑）。これも私の関心事なのですが、1991年にソ連が崩壊してウクライナが独立しました。その時に、ロシア人でいらっしゃるということで、ロシアに帰ろうといったような選択肢はなかったのですか。
○ベロウーソヴァ　いや、もうその時点で、私たちは仕事も住居もあり、娘も結婚しているというような状態ですので、ロシアの親戚はみんな歳を取ってしまっていて、ロシアに帰ろうという気にはなりませんでした。
○川野　分かりました、ありがとうございました。現在の健康状況はいかがですか。
○ベロウーソヴァ　ほかの知り合いの被災者の方々は、よくご病気とかされているのに比べれば、自分たちの健康状態は大変悪いとは言えないと思います。私も夫もたばこや酒はやりませんし、健康や食生活にも気を付けているので、それもあるかもしれません。
○川野　分かりました。では特段、健康状態に不安を感じるようなことはないですか。
○ベロウーソヴァ　今、自分は高血圧ですし、夫は心臓の手術をしていますのでまったく不安がないとは言えませんが、そんなに深刻に不安があるというわけではないです。しかし、お互いにもう60と65ですので、やはりそれなりに不安はあります。
○川野　分かりました。ちょっとした病気とかをしたときに、自分の病気が放射線被ばくによるものだといったようなことを考えるようなことはありますか。
○ベロウーソヴァ　被ばくというのはあるかもしれませんが、事故前もその原発のそばで仕事をしていたわけですから。
　しかし、それよりも、やはり事故とその避難に伴うストレスが非常に大きかったと思います。自分たちは戦争を経験したようなものだと言っているのですが。
○川野　分かりました。今からお聞きする質問は少し大きな質問ですので、お答えするのが難しければ、そのようにおっしゃっていただければいいのですが、これまでの人生を振り返ってみて、チェルノブイリの原発事故で自分の人生が大きく狂わされたといったような思いはありますか。

○ベロウーソヴァ　もちろんです。やっぱり、この事故のために本当に人生は変わったと思います。何と言うか、世界観とか人間関係とかも大きく変わったと思います。小さい町でしたので、子どもたちの学校もすぐだし、病院もすぐ近くの病院というように全部コンパクトにその中で生活ができていたわけで、若いころだったら、もっとどこかへ出て行きたいと思うかもしれませんが、歳を取ってくると、こういう大きな町よりもプリピャチの雰囲気のほうが良かったと思います。

○川野　先ほど、避難とかそういったもので非常に大きなストレスを抱えられたといったようなことをおっしゃいましたが、そういった体験を誰かに話したいと思ったことはありますか。あるいは、それを話さないといけない、誰かに伝えないといけないといったような思いはありますか。

○ベロウーソヴァ　自分の場合、実家がロシアで、もう母は亡くなったので悲しいことはないですが、以前は実家に帰ると必ず、チェルノブイリ原発事故はどういうふうだったのかとかいうことを聞かれて、話して聞かせたわけです。

○川野　分かりました。先ほど、ストレスだというようなことをおっしゃいましたが、そのストレスの原因である避難所の体験とか、その後のさまざまな体験とか、そういったものを日常の中で思い出したり、あるいは夢に見たりすることはありますか。

○ベロウーソヴァ　夢に見るということは自分の場合はありませんが、今でもこの近所はプリピャチの友人たちたちが多いわけですから、彼らに会う時に一緒に思い出すことはよくあります。

一昨年、チェルノブイリ原発事故当時5歳だった一番下の娘が自分たちのアパートのことも何も覚えていないから、一度プリピャチ行きたいとせがんで、主人が友人たちと一緒に車で連れて行きました。プリピャチの町の中の文化会館、映画館、病院など全部見て回って、自分たちの住んでいたアパートに入ったのですが、家具とかは何もなくなっていました。そのころ、真ん中の娘がピアノをやっていたので、アップライトのピアノは残っていました。それは重いから、きっと持ち出せなかったんだと思います。

一方、一番上の娘はもう行きたくないと言っています。彼女の友達で、やっぱりプリピャチから来た女の子が「行ったらすごいストレスだし、心が痛むだけだから行かないほうがいいよ」と言ったそうです。「行ったらすごいストレスだし、心が痛むだけだから」と。まあそれは人によるとは思いますが。一番下の娘が行った時も、私はやっぱりもう歳だし、余計な苦しみはないほうがいいと言って行かなかったです。

○川野　私も2度プリピャチに行ったことがあり、学校やアパートなどを訪ねましたが、大変ショックでした。

○ベロウーソヴァ　昨年、主人が行った時に、草木が生い茂っていて、自分たちが住んでいた集合住宅はどこが入り口だったか、見つけるのに骨が折れました。

○川野　そうですね。学校に行った時に、教科書や人形なんかも床に散乱して朽ち果てていて、何と表現していいのかよく分かりませんが、非常に寂しい気になりました。　またちょっと話

が変わりますが、原子力発電についてどう思われますか。原子力は、われわれ人間にとって必要だと考えていますか。

○ベロウーソヴァ　ほかの資源のことも考えると、やはり必要なのではないかと思いますが、原子力を使う場合には、非常に慎重に気を付けなければいけないと思います。当時のソ連の状況というのは、原発等の運転に際して厳密さが十分ではなく、いい加減な態度というのがありました。やはりそういうことは許されないと思います。

○川野　チェルノブイリ原発事故は、なぜ起こったと考えていらっしゃいますか。

○ベロウーソヴァ　1986 年当時の最初の公式見解というのは、原発職員の人為的ミスだということでしたので、避難民に対する態度が否定的だったというのは、そのせいもあると思います。あなたたちのせいで爆発したんだろうというような態度で、プリピャチの人はみんな悪者のような言い方をされたわけですが、しかし、その後になって、やはり構造的な欠陥があったのだと、その原子炉自身の問題だったということが認められていると思います。

○川野　分かりました。ご承知のように、福島原発事故が 2011 年の 3 月 11 日に発生しました。東日本大震災という非常に大きな地震があって、その影響の一つで原発事故が起こったわけですが、福島第一原発について、どの程度理解されていますか。

○ベロウーソヴァ　テレビでも見ていますし、新聞で読んだり、どういうことが起こっているかというのはだいたい知っております。

○川野　分かりました。調査をしていると、2009 年、2010 年などに「チェルノブイリは忘れられた」というようなことをよく耳にしたのですが、福島原発事故以降、1986 年のチェルノブイリ原発事故というのが、またあらためて注目されています。多くの日本人あるいはヨーロッパ各国のメディア等々も、チェルノブイリ原発にまた入って、チェルノブイリ原発というのは何だったのかということを再検証しています。

チェルノブイリが、またあらためて注目されるということについては、どのようにお考えですか。

○ベロウーソヴァ　忘れられてきたということは、ある意味で仕方がなかった部分もありますが、その再検証が行われているということについて言いますと、かつては非常に、特に旧ソ連では政治的な意味での評価がいろいろあって、今はもっと中立的にと言いますか、客観的に評価がされるということは自然なことであると思います。

例えば事故後に、先ほども言ったように職員のミスであるということが強調されて、当時の所長が実刑を受けたとこともあったわけです。

○川野　分かりました。今、福島第一原発事故が起こって 1 年半が経ちました。今現在、その被災者の人たちにどういった補償が必要なのか、どういった手当が必要なのかといったことが日本でいろいろ議論されています。チェルノブイリの被災者として、福島の被災者に、補償や手当という視点から、どんな補償が必要だというようなお考えがもしあれば、教えていただきたいと思います。

○ベロウーソヴァ　物質的な援助もさることながら、やはり精神的なケアというのも非常に重

要だと思います。例えば、今言いましたように、われわれの場合は被災者自身が悪者であるかのように言われたわけですが、そういうことがないようにしなければなりません。本当にそうなのか、そうでないのかというようなことは、きちんと、それこそ裁判とかして客観的に決めなければいけないことで、世論とか風評で偏見が広まるようなことがあってはならないと思います。

○川野　分かりました。最後に、これは自由にお答えいただいて結構なのですが、ご自身が被災されて避難された経験、あるいはそれに関連する今でも忘れられないこと、原発に関わるさまざまなメッセージ、あるいはその他、訴えたいこと、何でもいいのですが、何かご自由に、今日の質問に関することでも、そうでなくてもいいのですが、何かわれわれに伝えておきたいようなことがあれば教えていただきたいと思います。

○ベロウーソヴァ　福島原発事故ということでいえば、まず頑張ってくださいと、日本ではきっとうまくいくと思いますよということを申し上げたい。それはなぜかと言いますと、もちろんロシア人も我慢強いというか、頑張りという点では劣らないと思いますが、われわれがメディアを通して見ている限り、事故後の対策、あるいは人々の対応というのは、日本の方がもっとよく組織されていると思います。

例えば、略奪行為のようなことはあまり起こっていないようですが、やはりそれは日本の方々のメンタリティーというのが助けになっているのだと思います。ですから、日本の方々であれば、きっと今回の事故の影響も克服されるだろうと申し上げたいです。

○川野　ありがとうございます。大変貴重なお話を長い時間ありがとうございました。私が用意した質問は以上ですが、今日同席している平岡先生と小池先生のほうから、もし何かあれば、ご質問を頂ければと思います。

○平岡　では一つお聞きします。チェルノブイリ原発事故以前のプリピャチ村で、親しく付き合っておられた方がたくさんいると思いますが、その人たちと今も連絡が取れていますか、あるいは連絡をし合っていますか。

○ベロウーソヴァ　今自分たちが住んでいる集合住宅というのは、基本的に事故後プリピャチの人たちが丸ごと入っているので、その後出入りはありますが、一緒にずっと友人として付き合ってきて、お互いの子どもたちが成長していくのを見て、いまだに友情が深まっています。もう、ただの友人というだけではありません。そうすると、それは新しいコミュニティーと考えてよろしいですか。

○ベロウーソヴァ　学校や幼稚園も同じ子どもたちが通っていたわけですので。

○平岡　なるほど。そうすると、それは組織化されて、何か要求を出していくとかいうことがあるのですか。

○ベロウーソヴァ　別の話ですが、学校や幼稚園の自分たちの子どもが小さかった時の先生たちも、もうお歳になっていますが、いまだに道で見かけるとあいさつをしております。

自分たちが組織するというわけではありませんが、そういう被災者の年金をきちんと出せとか、そういうデモに参加したり、あるいは署名を集めたりとかいうことはあります。

○平岡　そういう組織というか、運動体が別にあるのですか。
○ベロウーソヴァ　別にあります。この地域にも、そういう活動をやっている被災者の団体があります。
○平岡　ああ、そうですか。プリピャチというのは、だいたい全部原発に関係した人ばかりでしたね。
○川野　ほとんどそうです。
○平岡　ほとんどね。そうすると、やはりちょっと普通の地域社会とは違いますね。
○平岡　分かりました、すみません。ありがとうございました。
○川野　ありがとうございました。長い時間、大変貴重な時間を頂ましてありがとうございました。
○ベロウーソヴァ　どういたしまして。

ベロウーソヴァ・ニコライ・ヴィシーリエヴィチ（男性）
2012 年 9 月 16 日実施　通訳：竹内氏

○川野　それでは、お二人目の方を始めたいと思います。先ほど、趣旨等々はご説明したので、そのあたりは割愛させていただきまして、基本事項、そして奥さまからお聞きして確認したところは、できるだけはしょってお話を進めたいと思います。

それでは、氏名、生年、人種等、基本事項をお教えください。

○ベロウーソヴァ　ベロウーソヴァ・ニコライ・ヴィシーリエヴィチ。1946 年 11 月 6 日生まれです。ロシア人で、宗教は正教です。

○川野　先ほどの確認なんですが、正教は、ロシア正教と言ってもいいんですね。

○通訳　この場合、そうですね。しかし、今ここでどういう教会に行かれているかとかいうことになると、また話が複雑になります。

○川野　正教と言った方がいいのですね。

○通訳　はい。

○ベロウーソヴァ　学歴は、先ほどの話にありました水産大学を卒業しています。生まれた所は、サラトフ州のカリーニンスクです。このカリーニンスクというのは、昔ケーニヒスベルと言われていたあの町ですが、飛地ですね。そこで水産大学を卒業しました。

大学卒業後、一時、ウラジオストクで仕事をしていましたが、その後、またカリーニンスクに戻りました。

○川野　確認ですが、奥さまとまったく同じ出身ということですか。

○通訳　そうですね。奥さまは生まれた所だけ違いますけれど、その後すぐ、このカリーニンスクに奥さまは引っ越しされたということですので、そこで知り合って結婚されたということです。

○川野　はい。

インタビュー風景　ベロウーソヴァさん

○ベロウーソヴァ　その後、先ほど妻の話にありましたように、デミトロフグラード（ロシアのウリアナスク州）というところで原子炉科学研究所に行き、、そこで放射線化学という専門の教育を受けて、そこからプリピャチに行き放射線測定の仕事をしました。

○川野　ウラジオストクでは何をされていたんですか。

○ベロウーソヴァ　その水産大学専門の水産関係の仕事をしました。

○川野　ウラジオストクには、どのぐらい

いらっしゃったのですか。
○ベロウーソヴァ　ウラジオストクにいたのは 1 年ちょっとですが、、自分の住むアパートがなかなか手に入らないという問題があって、カリーニンスクに戻ってから結婚しました。船の上からですが、日本を見たことがありますよ。○一同　ははは（笑）。
○川野　先ほど奥さまにずいぶんお聞きしたので、われわれも理解しているところではありますすが、1986 年の原発事故以降、4 月 27 日にみんなで避難しようということになったけれども、放射線測量をする人が少ないということで、そのまま残られたという話でしたね。
　その後、どういったお仕事をされたのかということを教えていただけますか。まずは放射線測量といって、どこでどういった作業に従事されたのかということを教えてください。
○ベロウーソヴァ　一番最初の仕事は、ヘリコプターが溶鉱炉の上から砂を投下したのですが、その砂を川岸で積み込むという作業をしました。最初は、その川岸で砂を取るように言われてスコップで作業をしていたのですが、後で人が来て「何をやっているんだ、ちゃんとショベルカーがあるんだから、そういうものを動かしてやらなければいけないじゃないか」と言われて、それから後は機械を使ってやるようになりました。
○川野　4 月 27 日から、すぐに作業に入られたのですか。
○ベロウーソヴァ　そうです。
○川野　そして、機械化され始めたら、もう人手は要らなくなったわけですね。その後は、どういった仕事をされたんですか。
○ベロウーソヴァ　その後、自分たちのように建設関係の仕事をしていた人たちは、一時的に、先ほどの話にあった保養キャンプのようなところに移動させられて、そこから作業に通うということになりました。自分がそこでやった仕事というのは、その作業から帰ってくる人や車両の線量を測定して、必要な場合は除染をするという測定の作業をしていました。
　そこには、当時 40 人ぐらいおりましたが、5 月 5 日になると、もうこの人たちは被ばくしているから病院で検査しなければいけないということで、キエフの病院に移動して、5 日には入院して検査をしておりました。
○川野　確認ですが、ポレスコエの保養地で検査されたということでよろしいですか。
○ベロウーソヴァ　その保養キャンプというのは、当時、キエフのある建設関係の施設のために作られたばかりのものでしたが、先ほどのお話にあったポレスコエ地区のキャンプは、成人用の施設も子どもの施設もあって、ボイラーや食堂も整っていました。
○川野　そのポレスコエで、ずっと検査をされていたということですね。
○通訳　そうです。
○川野　分かりました。その後のお仕事の内容を教えていただければと思います。
○ベロウーソヴァ　検査後は、保養をしなさいということになって、クリミアに原子力関係者のための保養施設があり、そこで 24 日間保養しました。
○川野　それは何月のことですか。
○ベロウーソヴァ　二十何日かはキエフの病院にいて、その後クリミアに保養に行ったので、

検査治療入院が終わったのは6月でした。自分の場合、急性障害はなかったのですが、鼻からのどの粘膜が軽い放射線やけど状態になっていて声が出ませんでした。また、自分だけではなくて、同じ所で作業をしていた者たちは皆そうなんですが、顔が赤黒くなっていて、軽い炎症状態でした。

それで検査したところ、頭髪とか甲状腺、肝臓が特に被ばく線量が多いという結果が出ました。

○川野　その時の数値は覚えていらっしゃいますか。

○ベロウーソヴァ　正確には覚えていませんが、総被ばく線量で 20 レム [9]以上という数字だったと思います。

○川野　その後、保養に行かれたりしていますが、また原発の事故処理に携わられたのでしょうか

○ベロウーソヴァ　自分は事故処理作業をするには、健康状態が良くないということで、同じ建設局で避難した人たちに住宅を見つけて配給するという仕事をやるようになりました。

○川野　その仕事はどこで行いましたか。

○通訳　　住宅配給の仕事は、避難先に行った人たちを見つけるということから始まったそうです。

○川野　いつごろまでされたんですか。

○ベロウーソヴァ　1986年末、1987年の正月ぐらいまでです。

○川野　分かりました。

○ベロウーソヴァ　住居が配給されるといっても、どうするか決められない人がいて、例えば両親のいる実家に行った人たちは、このまま残るべきか、それともまたキエフに戻るべきかとか、なかなか決めがたい人が多かったです。

○川野　なるほど。それを1986年いっぱいされたということですね。

○通訳　はい。

○川野　その後の職歴を教えていただければと思います。

○ベロウーソヴァ　その後、1987 年の夏までは、チェルノブイリ原発の3号炉の回収作業をやりました。

○川野　その前に、健康状態からして 20 レム以上浴びて健康状態が良くないということで、建設局で住宅の斡旋等をされていたとおっしゃっていましたよね。そういった状況にもかかわらず、またチェルノブイリの仕事に携わったということでしょうか。

○ベロウーソヴァ　1987 年の夏ぐらいまでは回収作業をしていたんですが、やはり健康状態がよくないということで、直接原発に関わる仕事はそこまでです。そして、建設局が臨時に行った先ほどの保養キャンプでサウナを造るだとか、そういう仕事をしていました。

○川野　分かりました。その仕事をを何年までされたんですか。

○ベロウーソヴァ　1988年まで、そこで1年ほど仕事をしておりましたが、そのころになる

[9] rem。100 rem は 1Sv (シーベルト)

と仕事もあまりないというので、国内の他の原発に出張を命じられるようになりました。しかし、自分は子どもが 3 人もいるし、あまり遠方には行きたくないということで、仕事を辞めました。

○川野　それで、何をされたんですか。

○ベロウーソヴァ　キエフで仕事を探すことになったのですが、化学の知識があったことと、それまで一緒の班で仕事をしていた仲間にキエフの人がいたので、彼のつてでキエフの化学工場で職を見つけて働き始めました。

○川野　そこで何年までお勤めになったんですか。

○ベロウーソヴァ　そこで 2 年半ほど仕事をしていました。

○川野　その後はどうされましたか。

○ベロウーソヴァ　ペレストロイカでいろいろ混乱が起こって、工場の給料も下がってきたので、そこを辞めて、今度はヨットをつくる仕事を始めました。

○川野　化学工場での仕事は 2 年半ということですから、ヨット作りの仕事は 1991 年からということでよろしいんですか。

○ベロウーソヴァ　仕事を変わったのは、まだ 1990 年だったと思います。

○川野　そこでは何年お勤めになったんですか。

○ベロウーソヴァ　ヨット建設の仕事は 2 年ぐらいやっていたと思います。しかし、その職場でもハイパーインフレが始まったので、給料の値上げを毎月要求しなければいけないような状態で、問題が多かったです。

○川野　ヨットづくりの仕事をを 1992 年までされたということですね。その後も、また就労されたんですか。

○ベロウーソヴァ　1993 年になりますと、それまでの職歴で年金をもらうことができるということになったので、1993 年以降年金をもらっています。ヨット建設の仕事の後は、どこかの会社などで定期的に働くという仕事はせずに、ドアを付け替える仕事とか、ドイツに 2 度出稼ぎに行くなど、そういうアルバイト的な仕事をしました。その後、個人の企業主として登録しまして、アパートの修理などをする仕事をしていました。

○川野　今もそれを続けているんですか。

○ベロウーソヴァ　2004 年から、住宅まわりのサービスセンターに就職して、住居の修繕の仕事をしていたのですが、3 年前に心臓が悪くなり手術をしたので、それ以来、定職には就いていません。

○川野　分かりました。ありがとうございました。ということは、2007 年に手術をしたんですね。

○通訳　いえ、3 年前ですから 2009 年。

○川野　2009 年に心臓の手術をされたということですが、キエフの病院で手術をされたんですか。

○ベロウーソヴァ　キエフの心臓病のセンターで手術をしました。

○川野　今はよろしいんですか。
○ベロウーソヴァ　手術後リハビリをやって良くなりましたが、今でも毎年、検査を受けています。
○川野　分かりました。先ほどプリピャチを離れる時の家族構成及び現況のお話を奥さまにお聞きしたのですが、その中で、その後のお父さまのご様子を教えていただければと思います。
○ベロウーソヴァ　チェルノブイリ原発事故の時の警備の仕事というのは警察関係の組織だったのですが、建設現場の警備というのは、6人一組のチームで行っていました。事故のとき、夜勤をしていた6人のうち、事故後1年たつと、生き残っているのは父1人になりました。
　ちなみに、その6人のうち1人は、夜勤が明けて家に帰る途中で倒れて、その死体が見つかったのは5月3日のことだそうですが、解剖の結果、心筋梗塞だということになって、遺族は補償ももらえませんでした。
　父の被ばく線量というのは400レムということになっています。
○川野　高いですね。
○ベロウーソヴァ　父は2級の放射線障害第2段階ということになっていて、書類では400レムという数字が書かれています。
○川野　分かりました。その後、お父さまはどうされましたか。
○ベロウーソヴァ　モスクワの病院に2カ月ほど入院しておりまして、その時一度、頭髪が全部抜けましたが、また生えてきました。その時、自分のきょうだいがウクライナのヘルソン州に住んでいたので、父と母はそのきょうだいを頼って行き、そこでアパートも支給されて住んでいました。
○川野　ヘルソン州に行かれて、その後はいつまでご存命だったのですか。
○ベロウーソヴァ　チェルノブイリ原発事故の2年後ぐらいに心臓が悪くなって、道を歩いている時に倒れてしまい、キエフの病院に入院してペースメーカーを付けました。そして1998年に亡くなりました。
○川野　その1998年までの健康状態はいかがでしたか。病院に入院されたり、通院されたりということがありましたか。
○ベロウーソヴァ　父は戦争に行って、その苦労をしたせいもあるのか、事故前にもリウマチとか心筋梗塞に近い状態がありましたが、事故後になると、心臓の問題のほかに、目がどんどん悪くなってきて、網膜に問題があるということで、その時にはもう見えなくなるだろうと言われました。
　しかし、その目の問題は、民間療法で目の悪い人はハチミツをたくさんとると良くなると言われて、父は昔ハチを飼ったこともあったので、すぐにハチの巣箱を置いてハチミツをとるようになり、不思議に目は良くなりました。
○川野　分かりました。
○ベロウーソヴァ　しかし、足も放射線のやけどをしたので、足の皮膚は亡くなるまでずっといろいろ支障がありました。

○川野　放射線の熱傷があったということですね。
○通訳　はい。
○川野　はい、分かりました。ところで、ベロウーソヴァさんにおいては、心臓以外で現在の健康状態はいかがでしょうか。
○ベロウーソヴァ　心臓以外は特にはないと思うのですが、心臓の手術で入院中から、もっと健康に気を付けないとと思ってジョギングも始めました。今では、1 日 10 キロぐらいまで走れるようになりました。
　それまでに事故処理作業者として健康診断を受けていた時、肝臓の被ばく線量が高いということが言われていたのですが、たくさん体を動かし、代謝を良くしたら、体内の放射性物質が出るのではないかと思ってジョギングを始めたところ、何年かすると肝臓の被ばく線量も下がってきて、キエフの人の平均よりも低い値になりました。
○川野　先ほどの心臓病や心臓疾患とチェルノブイリ原発事故の放射線との関連性はあるとお考えですか。
○ベロウーソヴァ　いや、被ばくとは関係ないのではないかと思います。というのは、自分の心臓が悪くなる前に、自分の母親がずっと病気をしていて亡くなったんです。母親の葬儀をしたすぐ後に自分は具合が悪くなって、妻が救急車を呼んだんですが、入院していた時に、同じ病室の人で、やはりお母さんのお葬式をした後に具合が悪くなったという人がいたので、そちらの精神的影響のほうが大きいのではないかと思っています。
○川野　分かりました。20 レム被ばくされたということですが、それに起因する将来の不安はありますか。
○ベロウーソヴァ　20 レムぐらいであれば、被爆した期間も比較的短期だったので、そんなに影響はないのではないかと思っています。それよりも、事故後の作業をした時のストレスが大きかったと思います。
　というのは、事故後 2 週間ぐらい作業をしていた時は、朝の 2 時、3 時ごろに横になって、6 時には起きて、朝食をとって仕事というような状態でした。事故後 1 週間ぐらい、寝酒にウオツカとかも出されたのですが、飲んでも寝られないということもありました。そういうふうに作業をしていて 2 週間ぐらいたつと、こめかみの髪の毛も白くなってきました。
○川野　分かりました。一番ストレスを感じた自分の体験などを誰かにお話しされることはありますか。あるいは、誰かに話さなければいけないといった思いがありますか。
○ベロウーソヴァ　もちろん話すことはありますよ。例えば、新しい知り合いができたときとか、どこかにお呼ばれで行ったときとかにも話しますし、もちろん自分のきょうだいにも、これまでいろいろ話しています。
○川野　話したときに、さらにまた新たにストレスを感じることがありますか。
○ベロウーソヴァ　ストレスではないですが、やはり自分でも気持ちが高ぶっている、興奮しているというのは感じます。
○川野　分かりました。原子力発電について、どう思われますか。原子力発電は、原子力とい

うエネルギーは、私たちに必要だと考えますか。
○ベロウーソヴァ　経済的に原子力がより効果的であり、ほかに取って代わるものがないという状態では、やはり原発に頼らざるを得ないのではないかと思います。
○川野　これは先ほどお聞きしたので少し重複するのですが、福島原発事故のことは、どの程度ご存じですか。どの地域でどれぐらい被ばくしたかとか、そういった情報までメディア等で見るようなことがありますか。
○ベロウーソヴァ　われわれは主にモスクワのテレビ局の報道を見ているのですが、それで被災者の人数とかも報道があったと思います。またロシアでも、例えばウラジオストクなどの専門家が、その事故の影響などということを調査していますので、そういう報道も見ております。自分の印象でいいますと、やはり福島の場合もチェルノブイリの場合と同じく、事前にあり得る危険性というものを十分に評価していなかったというのが事故の原因になっているのではないかと思います。
○川野　分かりました。福島が 2011 年 3 月 11 日に起こって、またあらためてチェルノブイリ原発事故が注目されています。そういった状況についてはどう思われますか。
○ベロウーソヴァ　ちょっと何とも言えません。自分の考えでは、今はあまりにも原発の危険性が強調されすぎていると思います。これまでにアメリカ、ソ連、日本では重大な原発事故が起こっていますが、同じく原発があるヨーロッパでは、重大な事故は起こっていません
○川野　危険性というのを、ある意味、過大に評価しすぎているのではないかということですね。
○ベロウーソヴァ　そうです。
○川野　これも先ほどちょっとお聞きしましたが、実際現場にいらっしゃって、チェルノブイリ原発事故というのは、何が直接的な原因だったと考えていらっしゃいますか。
○ベロウーソヴァ　原発のそもそもの構造自体に問題があって、しかもそれが隠されていたということがあります。事故が起こった時の運転が間違っていたということもありますが、それは直接運転していた職員の責任というよりも、そういう実験をやらせていた上層部に問題があると思います。

実は、実験を行うときの原発の運転スタッフもあらかじめ決まっていたのですが、出力を下げていく実験を行う段階になって、キエフのほうから指令があり、もう少し電気が必要だから実験の開始時間をずらせという指示がありました。そのために、実験を行うはずだったスタッフは勤務時間が終わり、交代してしまって、あらかじめ実験をやることになっていなかった人たちが運転していたということがありました。

そして、その実験を行っていたら、突然予期しない事態になったのですが、その事態でも、きちんとしかるべき手順を踏んでいれば事故は起こらなかったであろうと言われています。
○川野　2011 年 3 月 11 日の福島以降、原発の是非などについて、ウクライナで議論されることがありますか。
○ベロウーソヴァ　いや、それほど盛んな議論というのはありませんでした。

○川野　先ほど奥さまにお聞きしましたし、これまでのインタビューからも私たちは理解しているのですが、被災されたということでさまざまな補償がありますよね。そういったことも参考に、福島の被災者の人たちにどのような補償が必要だとお考えですか。ベロウーソヴァさんの個人的なお考えで結構です。

○ベロウーソヴァ　先ほど妻が言ったように、物質的な援助だけではなくて、精神的なサポートというのが非常に重要であると思います。

○川野　精神的なサポートという中で具体的に何か思いつかれることがありますか。

○ベロウーソヴァ　やはり避難させられている人たちについては、移住先をコンパクトに、集団、グループでまとまって移住できるほうがいいと思います。そのほうが、その後の健康問題が起こった場合の治療とか、あるいは雇用とかということも被災者同士で組織しやすいと思いますし、彼ら自身、精神的にも楽なのではないかと思います。

○川野　大変貴重な意見をありがとうございます。大変貴重なお話を頂きまして、ありがとうございました。私が用意した質問は以上です。その他、平岡先生、小池先生から何かあればご質問ください。

○平岡　では、一点だけお聞きします。原発は必要だということを言われましたが、高レベルな放射性廃棄物がどんどん出てくることについては、どう考えられますか。

○ベロウーソヴァ　自分は原発の建設の仕事をしていた時に、既に廃棄物の貯蔵所の仕事というのが予定されていて、それに移りたいと事故前には思っていました。そういう貯蔵所で十分配慮して、安全性も考えて廃棄物を処分すれば、そんなに問題はないのではないかと思います。また、さらに核廃棄物、使用済み核燃料の中には希少金属などもたくさん含まれているので、処理の仕方がもっと進歩すれば、再利用も非常に価値のあるものになるのではないかと思います。

○小池　チェルノブイリ原発事故がなかったらと、今考えることは多いですか。

○ベロウーソヴァ　今はもう以前ほどそんなことは考えませんが、やはり何と言っても、自分たちはキエフのような大都会に住みたくはなかったので、事故後数年は考えることが多かったです。

○小池　その意味では、やはり自分の人生というのは変わったとお考えですか。

○ベロウーソヴァ　26 日の朝、父がうちに来て、爆発があったよという話をしたのですが、彼は夜勤をしていた時に、その爆発を目撃して、噴出したちりが降ってきたというのを経験しているわけです。

　その話を聞いた時に、自分は子どもたちに向かって、ヒトラーの言葉で「どの世代も自分の戦争を経験すべきだ」というような言葉があるのですが、「お前たちにとっての戦争がこれから始まるんだよ」と言いました。自分は原子炉関係の教育も受けているわけですから、父親の話を聞いた時点で、だいたいどういうことが起こったのかというのは理解していました。

○小池　ありがとうございました。

○川野　大変長い時間、ありがとうございました。

モズゴヴァ・オクサーナ・ヴァスィーリヴナ（女性）
2012 年 9 月 16 日実施　通訳：竹内氏

○川野　それでは早速、9 月 16 日、3 人目のインタビューを始めたいと思います。

始める前に一つだけ確認させてください。2009 年から聞き取りをしており、これまで 14 名の方にインタビューをしています。その中で 2009 年、2010 年に聞き取りをした内容を、実名で報告書にまとめています。同じように、お聞きした内容を実名入りでまとめる、同時に、場合によっては論文の中で一部使わせていただくということがあると思いますが、それはご了解いただけますか。

○モズゴヴァ　構いませんよ。

○川野　ありがとうございます。音声も録音し、写真も時々撮らせていただきますので、よろしくご了解ください。

○モズゴヴァ　役に立つようでしたら、どうぞお構いなく。

○川野　ありがとうございます。それでは、基本的な事項、生年月日、人種、宗教、最終学歴、出身地等々教えていただければと思います。

○モズゴヴァ　モズゴヴァ・オクサーナ・ヴァスィーリヴナです。

○通訳　この方はウクライナの方で、ウクライナ表記ですと、名字はモズゴヴァ、お名前はオクサーナさん、父称はヴァスィーリヴナさん。

○モズゴヴァ　女性で、生まれは 1971 年 9 月 17 日です。人種はウクライナ人。宗教は正教です。最終学歴は大学卒です。

○川野　大学の時のご専門は何だったんですか。

○モズゴヴァ　最初は法学部を卒業して、その後さらに教育学部の勉強もしています。今は小学校の教師をしています。

○川野　それでは出身地、居住歴、職歴等を教えてください。

○モズゴヴァ　生まれはキエフですが、その後、小さい時にプリピャチの近くの村、ノーヴェシュペチという村に引っ越しました。

インタビュー風景　モズゴヴァさん

○通訳　先ほどのご夫婦のお話に出てきた、プリピャチに隣接している村だと思います。

○モズゴヴァ　そこに母の実家がありましたので引っ越して、そこで学校にも通って育ちました。その学校の 8 年生の時に、チェルノブイリ原発事故がありましてキエフに移住しました。

○川野　分かりました。それであれば、それ以後の話も続けてお聞きしてよろしい

ですか。

○モズゴヴァ　厳密に言いますと、チェルノブイリ原発事故後、自分と母親は、クリミアの母のきょうだいの所に避難しておりまして、父親は事故の後も原発で働いていたのですが、父がキエフにアパートの配給を受けたので、自分と母もキエフに戻ってきて住み始めました。

○川野　配給を受けたのはいつですか。

○モズゴヴァ　事故後1年ぐらいしてから、父はアパートの配給を受けました。このすぐ隣のボロヂャンカ[10]20番地のアパートです。事故後、クリミアに母と一緒に避難して、そこで学校にも行っていたんですが、その事故の1年後ぐらいにキエフで住居が提供されるということで、こちらに戻ってきました。

○川野　分かりました。1986年ということは15歳ですね。

○通訳　9月生まれだから14歳ですね。

○川野　1987年にアパートが配給されて、その後、キエフの学校に移られるということですね。

○モズゴヴァ　はい。このすぐ近所の259番学校というのですが、そこを卒業しました。

○川野　それ以降の学歴、職歴を教えていただければと思います。

○モズゴヴァ　最初は学校を卒業後、技術専門学校に行って卒業しました。この技術専門学校では、仕事をしながら学校の勉強もしました。そして、卒業後、もう仕事はしていたのですが、1997年に国立キエフ大学の法学部に入学して、通信教育でしたので6年かかりましたが、2003年に卒業しました。仕事は出版社の仕事をしていました。

○川野　それは、いつの仕事ですか。

○モズゴヴァ　出版社の人事部だったのですが、そこの仕事は2002年から1年半ぐらいで、その後、大学を卒業してからは、子どもができたので産休を取って辞めました。その前は、キエフの都心のほうにある健康センターの人事部で法律関係の仕事をしていました。

○川野　その前というのはいつですか。

○通訳　2002年に出版社に入る前の話です。

○川野　ということは、一貫して、ずっとキエフにおられるということですか。

○モズゴヴァ　そうです。

○川野　それで、小学校の先生になられたのは、いつですか。

○モズゴヴァ　2003年9月に子どもが生まれたのですが、子どもの健康状態があまり良くなかったので、すぐ幼稚園に入れることができませんでした。公の育児休暇というのは最大3年なのですが、自分の場合、子どもが病弱だったので、それ以上休暇を取っておりました。

2007年に子どもを幼稚園に入れることができて、同時に自分もその幼稚園で働き始めました。そこで働きながら、やはり教育のことも勉強しなければというので、通信教育で教育学部の勉強も始めて、それを終えて、2010年9月から今の職場である学校で仕事をしています。

その学校というのは特殊学校というか、体の発達等に問題のある子どもたちが通うような学

[10] キエフ州内の町。キエフ市から60kmほど離れたところに位置する。

校です。そこに自分の子どもも通っているのですが、そこで仕事をしています。
○川野　仕事というのは、教諭としての仕事をされているということですね。
○通訳　そうですね。小学校の教師です。
○川野　分かりました。1986 年 4 月 26 日、今から 26 年も昔の話になるのですが、その当時のことを少しお聞きしたいと思います。まず、4 月 26 日のチェルノブイリ原発事故当時の家族構成、およびその方々の現況を教えていただければと思います。
○モズゴヴァ　チェルノブイリ原発事故当時の家族構成と言いますと、両親と兄がおりました。兄は、事故当時は兵役に行っておりまして、事故の起こった春に兵役が終わって帰ってくる予定だったのですが、事故が起こりまして、そのまま、この住んでいた村には帰らなかったわけです。
○川野　お父さま、お母さまの情報を教えていただければと思います。
○モズゴヴァ　今、母は私と同居しています。両親は離婚しましたので、父は別に離れて住んでおります。兄も今はキエフ市内です。前はキエフ近郊の村だったのですが、今は合併したのでキエフのハリコフ地区に家族と住んでおります。
○川野　お父さま、お母さまはお元気でいらっしゃいますか。
○モズゴヴァ　いえ、あまり良くないです。両親とも関節の痛みが、かなり激しいです。
○川野　お父さま、お母さまの年齢をお聞きしてよろしいですか。
○モズゴヴァ　母は 1941 年 12 月生まれですので今 71 歳、父は 1942 年生まれで今年の 5 月で 70 歳になりました。
○川野　当時のプリピャチ時代のお父さまとお母さまの職業を教えてください。
○モズゴヴァ　両親とも原発で仕事をしていまして、母は建設局での仕事で、事故の日、夜勤をしていましたので、爆発の状況とかも目撃しました。父も同じ建設局の仕事だったのですが、事故当時の晩は夜勤ではなかったので現場にはいませんでした。
○川野　25 日の未明、26 日の早朝に事故が起こるわけですが、お母さまが家に帰ってこられて、何か事故の様子とかお聞きしたような記憶がありますか。
○モズゴヴァ　あまり覚えていません。26 日の朝に母が夜勤明けで帰ってきて、事故があったという話はしたのですが、それがどんな事故で、どういう規模のものだったのかというのは、母もよく分かっていなかったですし、もちろん私も見当が付きませんでした。
　26 日は土曜日でしたが、そのころは土曜日も授業がありましたので学校に行って、たまたま生物の授業がありました。クラスの子どもたちの中には、夜中に両親が呼び出された子もいて、いろいろそういう話をしていました。それで生物の先生に「放射線ってどういうものですか」という質問をすると、先生の答えは「今は分からないかもしれないけど、何世代とか先になって、どういうものか分かるよ」というものでした。
　そして、26 日に学校でヨウ素剤の配布があって、みんな飲みました。
○川野　学校でヨウ素剤を飲まれたということですか。
○モズゴヴァ　行列になって、順番に、すぐヨウ素剤を飲んで、水を飲んでというふうに飲み

ました。
○川野　では、26 日の間に何かチェルノブイリ原発事故の情報というのは入りましたか。
○モズゴヴァ　もう私は 14 歳だったので覚えていますが、26 日はテレビなどではまったく何も情報がありませんでした。しかし、ヘリコプターが原発のほうに飛んでいくのは見えました。それで何かあったのだろうということで、みんな不安もありましたが、一方で、その日は土曜日で、両親と私は学校が終わってから一緒にジャガイモを植えることになっていました。村で一戸建ての家に住み、自家菜園もありましたので、そこでジャガイモを植えたのですが、私は頭痛がしたので「もう畑仕事は嫌だ」と言うと、父は「それは怠けたいんだろう」と言って怒ったことを覚えています。
○川野　では、27 日のことを教えていただければと思います。
○モズゴヴァ　27 日になりますと、プリピャチではバスが来て避難があるということを聞き、自分たちは車がありましたので、われわれももう避難したほうがいいということで、キエフの母方のおばの家に当初は世話になりました。土曜日にジャガイモを植えて、日曜日には避難しました。
　私たちの住んでいたノーヴェシュペチ村では、27 日に公に避難はありませんでした。もっと遅れてあったわけですが、うちの場合、両親が原発で仕事をしていた関係で、プリピャチで避難があるということは聞いていました。また、プリピャチであった放送で、貴重品と身分証明書等を持って 3 日間の避難だと言われたということだったので、われわれも避難したほうがいいだろうということで避難しました。
　その時、母親が持っていく荷物をつくっていて、コーヒーをかばんに入れたので、私は「3 日たったら帰ってくるんだから、コーヒーなんか持っていかなくてもいいよ」と言って、また棚に戻したのを覚えています。
○川野　それから、キエフに向かわれたということですね。
○通訳　はい。
○川野　クリミアに向かわれたのは、いつになるんですか。
○モズゴヴァ　今、正確に覚えていないのですが、5 月に入ってからだったと思います。その時も、やはり自分たちは車で移動しました。
○川野　クリミアには、どのぐらいおられたんですか。
○モズゴヴァ　1 年以上、ひょっとしたら 1 年半ぐらいはいたかもしれません。そこで学校にも行きました。クリミアの首都であるシンフェローポリ（地図 2 の③）にクリスチャーヌフカという場所がありまして、そこに母方のおじがいました。当時、コルホーズの付属の家というのがあって、その一つを使わせてもらって住んでいました。
○川野　それで、お父さんにキエフのアパートの配給があって、1987 年にまたキエフに戻られたということで間違いないですね。
○モズゴヴァ　そうです。
○川野　そして、今も、そのアパートに住んでいらっしゃるということですね。

○モズゴヴァ　そうです。
○川野　今は、ご自宅のほうには、お母さまとどなたとお住まいですか。
○モズゴヴァ　私と母と息子と 3 人で暮らしています。
○川野　分かりました。ノーヴェシュペチ村で一軒屋にお住まいということでしたが、そこでの家の大きさとか、建物の様子とか覚えていらっしゃいますか。
○モズゴヴァ　家族が自分たちで建てた家でしたが、2 階建ての大きな家でガレージもありましたし、夏には庭で調理もできるような簡易キッチンみたいなものもありました。それに畑が付いて、結構広々としておりました。しかし、事故の後で行ったこともあるのですが、建物は全部壊され埋められてしまって、住んでいた通りも今はありません。
○川野　ノーヴェシュペチ村は、プリピャチからどのぐらい離れていたんですか。
○モズゴヴァ　プリピャチから一番近い最寄りの村で、チェルノブイリ地区のチェルノブイリという町がその地区の中心なのですが、そのチェルノブイリという町が今のように大きくなる以前は、ノーヴェシュペチ村が中心でした。大きな村です。
○川野　当時、学校はどちらに行かれたんですか。
○モズゴヴァ　ノーヴェシュペチ村に学校がありました。大きな学校で、10 年生まである一貫の学校がありました。
○川野　仮にその 10 年生が終わったら、どういう予定だったんですか。
○モズゴヴァ　8 年生の段階では、まだ、そこまで考えていませんでした。
○川野　分かりました。その村の様子などは鮮明に覚えていらっしゃいますか。
○モズゴヴァ　その学校の同級生たちと、いまだに連絡がありますし、同窓会にも 2 度出席しました。その時の同級生と一緒に、今キエフにいる先生を訪ねていったこともありますし、今でも付き合いはあります。14 歳までいたわけですから。それで、生まれはキエフですが、4 歳から 5 歳ぐらいの時にノーヴェシュペチ村に引っ越し、子ども時代をずっとそこで過ごしました。
○川野　どんな村でしたか。
○モズゴヴァ　森も川もあって非常に美しい所で、本当に好きにならずにはいられないようないい村でした。
○川野　もし、原発がなければ、ノーヴェシュペチ村にずっと住んでいたというようなことを考えることはありますか。
○モズゴヴァ　はい、もちろんそう思います。大きな村でしたし、そのすぐそばにプリピャチという町があるわけですから、勤め先も当然、可能性があったわけで、若い人も多かったです。
○川野　ちょっとプリピャチの話を聞かせてください。プリピャチにはどんな印象がありますか。
○モズゴヴァ　歩いて行ける距離でしたから、プリピャチにはよく行っていました。店で買い物などをしましたし、きれいな町で、若い人が多いといういい印象でした。ブランコとか回転木馬のある公園もあって、子どもにとっては楽しい所でした。

○川野　プリピャチには、頻繁に行かれていましたか。
○モズゴヴァ　プリピャチの友達もいましたし、そこに行ったりもしていました。
○川野　14 歳の時ですから、もしかしたら、そういったものはお持ちではなかったかもしれませんが、14 歳当時の将来の夢みたいな、人生設計みたいなものがありましたか。
○モズゴヴァ　どうだったか、ちょっと覚えていません。
○川野　分かりました。また、これも 14 歳当時ですから、あまり印象深くないのかもしれませんが、ノーヴェシュペチ村での生活は、どんな感じでしたか。ご両親とも原発で働いていて、例えば、うちに車があったとか、食べるのがどうだったかとか、そういった生活の様子、生活の水準みたいなことが、もしお分かりになれば少し教えていただきたいと思います。
○モズゴヴァ　車も自家用車がありましたし、原発の仕事で両親がもらっていた給料もいい給料でしたし、生活水準としては良かったと思います。
○川野　分かりました。現在は、学校の先生をされている収入と、お母さまの年金で生活の基盤があると考えてよろしいですか。
○モズゴヴァ　そうですね。私の給料と母の年金で生活しています。
○川野　失礼ですが、お母さまの年金をお聞きしていいですか。
○モズゴヴァ　母は 3 級障害者で、チェルノブイリとの因果関係が認定されていまして、年金は、今、正確には言えないんですが、2,000 グリブナー強もらっていると思います。
○川野　ちょっと立ち入った質問ですが、ウクライナで学校の先生の給料というのはどんなものですか。
○モズゴヴァ　私の手取りの給与額というのは、1,900 グリブナーぐらいです。私は、この学校での仕事というのはまだ日がたっていないので、私の年齢でもっと前から働いている人なら、給料ももう少し多いです。
○川野　分かりました。これは平均的なことをお聞きしますが、いろんな職種の中で、学校の先生の給料はどういった位置になるんですか。
○モズゴヴァ　比べるといっても、例えば公務員ととか、あるいはなんでしょうか。
○川野　そうですね、公務員と比べるとどの程度でしょうか。。
○モズゴヴァ　公務員で言えば中程度かと思います。。
○川野　日本もだいたいそんなものだろうと思います。現在の健康状態はいかがですか。
○モズゴヴァ　あまり良くないです。
○川野　どこか特に悪いところがありますか。
○モズゴヴァ　あるのですが、病名とかも言ったほうがいいですか。
○川野　いえ、特におっしゃりたくなければ結構です。
○モズゴヴァ　病気はあります。
○川野　将来の健康に対して不安とかはありますか。
○モズゴヴァ　あります。
○川野　それは、やはり 14 歳まで原発周辺の村で生活したということと関係があるというふ

うにお考えですか。
○モズゴヴァ　何らかの関係があるかもしれません。
○川野　今から少し大きな質問をしますけれども、ちょっとお答えにくいというときは、その旨をおっしゃっていただければと思います。これまでの人生を振り返ってみて、1986 年 4 月 26 日のチェルノブイリ原発事故で、自分の人生が変わってしまったなというような思いがありますか。
○モズゴヴァ　はい、あります。
○川野　何が一番変わったというふうに考えますか。
○モズゴヴァ　もちろん、このキエフに移住するということがなければ、全て違ってきていたのではないかと思います。
○川野　分かりました。チェルノブイリ原発事故以後に、事故に絡んだ何かつらい体験とか、そういったものがあるとすれば、どういったものが一番自分の気持ちの中でつらい体験としてありますか。
○モズゴヴァ　やはり友人知人で早く亡くなった人たちがいまして、その死というのが一番つらかった経験だと思います。
○川野　キエフに帰ってこられて、259 番小学校に通ったということでしたよね。
○通訳　小学校というか、その年齢は中学校です。
○川野　中学校に入って、何か原発に絡んで差別的なことを経験したことがありますか。
○モズゴヴァ　自分たちの家族に関しては特になかったのですが、一般的な話としては、やはり移住者が、前から自分たちが入るはずだった住居に入ってしまったということに不満を持つ人たちがいて、そういう人たちとの間でトラブルがあったということは聞いています。
○川野　聞いてはいるけれども、実際経験されたことはないということですね。
○通訳　直接はないということです。
○モズゴヴァ　そういう無理解な人たちというのは、パーセントで言えば、それほど多くはなかったと思いますが。
○川野　もちろん、ご本人も補償とか手当てを受けていらっしゃると思いますが、今、どういった手当てを受けていらっしゃいますか。
○モズゴヴァ　補償としてありますのは、母も年金のほかに補償金というので、自分は 300 グリブナーぐらいもらっていますし、母はもう少しもらっていると思うのですが、これは食事援助という名目です。実際それほど食事の助けにはならない額ですが、それでも月々もらっています。
○川野　食事の援助と、公共料金の半額免除の補償は受けていらっしゃいますか。
○モズゴヴァ　はい。公共料金の半額免除というのはあります。それから年末に、健康増進の補助金というので幾らかもらっています。
○通訳　補助金というのか、つまり食事援助などと同じですね。支給される金額というのがあるそうです。

○川野　初めて聞きましたが、それはお幾らぐらいか分かりますか。○モズゴヴァ　ちょっとはっきり覚えていないんで間違っているかもしれないですが、だいたいで年 1 回 400 から 500 グリブナーぐらいです。

○川野　去年、こういった聞き取りをした時に、公共料金の半額という補償が打ち切られるんじゃないかといった話をお聞きしたんですが、まだ継続しているということなんですね。

○モズゴヴァ　今のところは、まだ残っています。この先、いつまであるかは分かりませんが、今のところはまだあります。

○川野　保養券の申請をされたことはありますか。

○モズゴヴァ　前に、その保養券の支給を受けたことはあります。母とか息子とかが、保養券で保養に行ったこともあります。もちろん、その保養券の支給というのは、みんなに行き渡るほどではないんですが、ゼロではありません。

　自分の息子の場合、障害者資格がありますので優先されているということもあるかと思いますが、普通の被災児童という資格だと、なかなかもらえないかもしれないです。

○川野　保養券を使って保養されるときは、どちらに行かれるんですか。

○モズゴヴァ　保養券というと、南のほうの海のあるクリミア半島、あるいはオデッサ州とか、そうでなければ西ウクライナのほうに放線療法、ミネラルウオーターが出るような保養地があるので、そのどちらかが多いです。

○川野　分かりました。2011 年 3 月 11 日に東日本大震災、それに起因する福島第一原発事故というのが起こったのですが、事故の内容現在の状況について、どのように承知されていますか。

○モズゴヴァ　私たちも大変心配して、ずっとこのニュースを追っておりましたけれど、あまりわかりせん。

○川野　どのぐらいの人が、どのぐらいの線量を浴びたとか、そういった報道とかいうのは耳にしたことがありますか。

○モズゴヴァ　線量についての報道というのは記憶にないですが、例えば避難させられた人が何人いたとか、原子炉内の物質がどのぐらい、何パーセントぐらい放出されたとか、そういう報道は覚えています。

○川野　分かりました。この調査は 2009 年に始めています。当時来たとき、チェルノブイリは忘れられたんだというようなことを、よく耳にしていました。そして、この福島以降、またあらためてチェルノブイリというのが注目を集めているというか、また注視されるような結果になっていますけれども、そういったことをどのようにお考えですか。

○モズゴヴァ　ロシア語のことわざで、「雷を聞かないうちは人は十字を切らない」という言葉があります。つまり何かがあって初めて、そのことに気付くというか、言われたようにチェルノブイリがあって、時が過ぎていって、だんだん忘れられていったのですが、そこでまた福島のようなことが起こりました。もちろん規模としてはチェルノブイリほどではないかもしれないのですが、そういう事故が起こったことで、またあらためて、この問題の重大さとか危険

性ということが意識されたということは、当然ではないでしょうか。
○川野　私は原爆被爆の研究をしています。調査をはじめた 2009 年当時、日本は 50 基以上の原発を抱えていましたが、原発の是非というのは、ほとんど議論されてきませんでした。原発には光と影の側面がありますが、影の部分というのは、ほとんど議論しないまま原発を使い続けてきたということです。そこで、1986 年のチェルノブイリ原発事故というのは、いったいわれわれに何を提示しているのか、何を教訓として示しているのかということを、改めて明らかにしたいということで、この調査を始めました。　最近やっと、日本でもいろいろ議論をするようになりました。。
○モズゴヴァ　それは福島原発事故以後ですか。
○川野　以後です。
　このように、日本ではいろいろ議論をしているわけですが、2011 年福島原発事故以降に、ウクライナで原発の是非について議論されるようなことがありましたか。
○モズゴヴァ　確かに福島原発事故以後に、ウクライナでも原発の危険性ということについての番組もありました。ウクライナの原発、今稼働している原発がどういう状態にあるか、技術的に本当に安全であるのかというようなことを報道する番組もありました。
　私たちも福島原発事故後、汚染の範囲がこれ以上広がらないようにと祈りながら、ずっとニュースを見ていたのですが、やはり日本は技術の進んでいる国であるので、事故処理に関してはウクライナよりもうまくいくのではないかと、それ以上被害が広がらないようにできるのではないかという期待をかけながらニュースを見ております。
○川野　これはモズゴヴァさんの個人的な見解で結構なのですが、原子力発電について、どのように思われますか。
○モズゴヴァ　やはり今ウクライナでは、また世界的に見ても、原発なしというわけにはいかないのではないかと思います。原発をやめてしまえば、今の生活水準が保てなくなり、また灯油ランプの生活に戻ってしまうかもしれません。ですから、合理的に受け入れられる範囲内であれば、原発は必要だと思います。○川野　モズゴヴァさんは学校の先生ということで、特にお聞きしたいのですが、14 歳でキエフに来られて、学校にも行かれているということで、その学校教育の中で、原発についていろいろ議論をする場というのがありましたか。14 歳から以降の話で結構です。
○モズゴヴァ　原子力とかについての教育といいますと、物理の授業で核とか原子とかについての説明があっただけでした。もちろん、チェルノブイリ原発事故の日前後になりますと、学校で追悼行事があったりはしましたが、それ以上、授業で何かがあったわけではありません。
○川野　では、ウクライナの電源事情、どの程度、どの頻度で使われているのかといったようなことを学校教育の場で習うことは特になかったということですか。
○モズゴヴァ　学校の授業だったかよく覚えていませんが、そういう一般的な情報としては授業であったと思います。
○川野　合理的な選択として原発は致し方ないということですが、ちょっと飛躍しているかも

しれませんが、兵器としての原爆についてはどう思いますか。
○モズゴヴァ　私は基本的にどんな兵器も反対ですから、核兵器に対してももちろん反対です。
○川野　ありがとうございました。最後に、今、日本で福島原発事故後１年半たって、いろいろな補償の問題や手当ての問題というのが議論されています。チェルノブイリの被災者としての経験から、福島第一原発事故の被災者に、今後どのような補償、あるいは手当てが一番必要かといったお考えがあれば、お聞かせ願えればと思います。
○モズゴヴァ　物質的な援助というのも、まず第一に必要だと思いますが、それに劣らず、精神的な面の支援も必要だと思います。
○川野　精神的な支援とは、どういったことが考えられますか。
○モズゴヴァ　まず何よりも、この問題について忘れないということが必要だと思います。原発事故があったということが忘れられてしまえば、みんな無理解、無関心になってしまうものですから、そうならないように、常に思い起こして意識していることが大事だと思います。
○川野　分かりました。長い間、ありがとうございました。大変貴重なお話を聞かせていただきました。

スートゥキン・マクシム・ゲンナージエヴィチ（男性）
2012 年 9 月 17 日実施　通訳：竹内氏

インタビュー風景　スートゥキンさん

○川野　それでは、2012 年 9 月 17 日、お一人目の聞き取りを始めたいと思います。

今日はお忙しい中、ありがとうございます。

○スートゥキン　今、自分は仕事もしていないので、毎日来てもいいですよ。

○川野　ははは（笑）。われわれは広島大学から来ました。私たちは原爆被爆の問題を研究しています。私は社会学が専門で、原爆被爆者の精神的な影響とか社会的な影響を研究しています。放射線による精神的な影響とか、それから派生する社会的な被害、そういったものを研究しているのですが、2009 年からチェルノブイリ、その中でもプリピャチに住んでいらした方々の被害の一端を、こういった聞き取りで明らかにしたいということで調査を開始しました。

その延長上で原発の是非も少し考えてみたいと思っていました。ただ、それは 2009 年までの話で、日本ではもともと原発が 50 基以上あったのですが、原発の是非についてはほとんど議論されていませんでした。そういった日本の状況もあり、チェルノブイリの被災者の人たちの話を聞くことによって、原発の是非を考える一つの資料にしたいと考えていました。

ところが、2011 年に起こった福島原発事故の影響により、現在では、原発の是非について、日本でも様々な議論が進んでいます。今後の福島という観点から、チェルノブイリを、再考するとともに、福島を知ることによって、チェルノブイリ原発事故とはいったい何だったのかということを、またあらためて考えてみたいと思っています。

○スートゥキン　つまり、福島原発事故の結果、どういう影響があったかということと、将来どうなるかという予測ということでしょうか。また、人々が、事故の影響をどのように受け止めたのかといったことでしょうか。

○川野　そういうこともあります。今からお話をお聞きしますけれども、そのインタビューの内容を私たちは本にして発行しています [11]。今からお聞きする内容を、こういったかたちでまとめることになると思うのですが、実名で公開してもよろしいでしょうか。

○スートゥキン　いいですよ。

○川野　ありがとうございます。同時に会話を録音し、写真も撮らせていただきますが、それ

[11] 川野徳幸、今中哲二、竹内高明編、『チェルノブイリ・旧プリピャチ住民へのインタビュー記録』、IPSHU 研究報告シリーズ　No.46、広島大学平和科学研究センター、2012 年 3 月

もよろしいでしょうか。
○スートゥキン　いいですよ。
○川野　ありがとうございます。では早速、始めさせていただきます。基本的な事項である氏名、生年、人種、宗教、最終学歴等々教えていただければと思います。
○スートゥキン　スートゥキン・マクシム・ゲンナージエヴィチです。
○通訳　名字がスートゥキンさん、お名前がマクシムさん、父称がゲンナージエヴィチさんです。
○スートゥキン　生まれは 1975 年 5 月 20 日、37 歳です。人種はロシア人です。宗教は正教です。学歴は中等技術教育です。
○川野　出身、居住歴、職歴をお願いします。
○スートゥキン　生まれはチェルニーゴフ市（地図 2 の④）ですが、3 年後の 3 歳の時、1978 年に一家でプリピャチに引っ越しました。というのは、父は最初、空港の仕事をしていたのですが、その後、チェルノブイリ原発の仕事に変わったので、より近いプリピャチに引っ越したということです。
　プリピャチで事故まで学校に通っていました。事故が起こった時は 10 歳でした。
○通訳　厳密にいうと、11 歳になる前です。
○川野　事故の時の様子は覚えていらっしゃいますか。
○スートゥキン　よく覚えていますよ。
○川野　どんなふうに覚えていらっしゃいますか。
○スートゥキン　26 日の朝、友達と一緒に学校に行ったところ、入り口で、今考えると保健所かどこかの人たちが立っていて、来る子どもたちにヨードの錠剤と、何かほかにもあったかもしれませんが、錠剤を渡されて飲むようにと言われました。
　その時、何のためかというような説明はまったくなかったのですが、26 日土曜日のうちに、町の人たちは、みんなだいたい原発で働いていたわけですから、どうも事故があったらしいと噂が広まっていました。しかし、具体的なことはずっと秘密にされていたので、詳しいことについては何も分からない状態でした。
○川野　そのヨード剤はすぐに飲まれましたか。
○スートゥキン　渡されて、その場で飲んで学校に入るようにと指示がありました。きちんと、その場で飲むように指示されて確認されました。
○川野　では、4 月 26 日は、そのまま通常どおり、学校があったのですね。26 日は何曜日でしたか。
○通訳　土曜日ですね。
○川野　学校があったんですか。
○通訳　その時代は、まだ学校がありました。
○川野　そして、通常の授業があったということですね。
○スートゥキン　学校ではいつもの授業があったのですが、窓を開けないようにと言われ、休

み時間も外に出ないようにと言われました。暑い日で 30 度ぐらいあったかと思うのですが、汗を流しながら教室にいたのを覚えています。でも、何があったのかということについては、学校ではきちんと話はありませんでした。

○川野　その後、ご自宅には何時ごろ帰られたか覚えていらっしゃいますか。

○スートゥキン　うちに帰ったのは 2 時ぐらいですが、学校から帰る時点では何も指示がなかったので、そのまま普通に、ほかの生徒たちと一緒に道を歩いて家に帰りました。

○川野　家に帰って、お父さまとかお母さまから何か原発の事故についてお聞きになりましたか。

○スートゥキン　その日、両親はダーチャ [12]に行っていたので、家に帰った時、誰もいませんでしたから、事故のことについては何も聞かないままでした。

○川野　では、26 日にご自宅にいらっしゃったのは誰なんですか。

○スートゥキン　自分のほかに 4 歳年上の姉がいました。

○川野　4 歳上のお姉さんとは何かお話をされましたか。

○スートゥキン　いや、何も情報はありませんでしたから。学校でも錠剤を配られたり、学校にいる間、窓を開けないというふうに言われただけで、家に帰ってからどうするという指示も何もなかったので、特に話すこともありませんでした。

○川野　お父さんとお母さんは、いつ帰ってこられたんですか。

○スートゥキン　両親は 26 日の夕方にダーチャから戻ってきました。その日、ジャガイモを植えて帰ってきたのですが、その時点で既に町が封鎖されていたそうです。ダーチャまではバイクで行っていました。

○川野　話が前後しますが、当時のお父さまとお母さまのご職業、仕事の内容を教えてもらっていいですか。

○スートゥキン　父は原発職員で、ボイラー・ヒーター関係の点検修理をする仕事でした。

○母　私も原発職員で、働いていた職場というのは除染部という所でした。

○川野　ついでに、お父さまとお母さまの生年、そして現況を教えてもらっていいですか。

○スートゥキン　父は 1948 年 1 月生まれ、母は 1948 年 12 月生まれです。

○川野　お父さま、お母さまはお元気ですか。

○スートゥキン　父は今日はダーチャにいて、母も昨日ダーチャから帰ってきたところです。

○川野　お母さま、一点だけ確認したいのですが、原発の職員、除染部にいらっしゃったということですが、26 日に帰ってこられたとき、原発事故の情報を何かお聞きになられましたか。

○母　実は 26 日の朝に原発から夜勤の職員が家に帰ってきた時点で、何かあったという話は伝わっていて、夫がうちの中庭で帰ってきた人を捕まえて何があったんだと聞いたら、その聞かれた人がジェスチャーで爆発したとやっていたのが見えました。その時はまさかという気分で、バイクに乗ってダーチャに出かけました。その時、既に主要道路も封鎖されていたのですが、抜け道を探してダーチャに行って帰ってきたんです。

---

[12] 郊外にある菜園付きセカンドハウス。ロシア・旧 ソ連圏では一般的。

○川野　分かりました。ありがとうございました。また本題に戻ります。

1986 年 4 月 27 日、ラジオ放送があって避難されたのだろうと思いますが、その時の様子を覚えていらっしゃいますか。

○スートゥキン　ラジオ放送ですが、3 日間程一時的に町を離れるという言い方で、避難という言葉もはっきり使わなかったと思うのですが、バスに乗って一時的に町を離れるということでした。あまりたくさんのものを持つのではなくて、身分証明書など最低限必要なものを持って出なさいという放送でした。

でも、その放送でも事故の具体的なことは何も言っていなかったので、そのころのソ連の体制からすれば、その放送を聞いただけでは、ひょっとしたら核戦争に備えての避難とかの予行練習とも受け止められかねないような感じでした。

○川野　その時、スートゥキンさんは何を持って行かれましたか。

○スートゥキン　個人的なものというと、自分では特に持ち出さなかったのですが、唯一テニスボールを持って出たんです。バスに乗る前も、それで遊んでいたりしたんですが、ポケットに入れて避難して、たぶん今うちを探せばあると思います。それで事故の後、検知器で放射線量を測ったこともあり、結構な数値が出ましたが、やはり捨てるには惜しいという気持ちで、そのまま取ってあります。

○川野　避難の時には、どんな気持ちでしたか。すぐ帰ってくるという気持ちで避難されましたか。

○スートゥキン　いや、その時はラジオで言われたとおり、3 日後には戻るんだと疑いをもっていなかったです。しかし実際に戻ったのは、20 年たってからでした。

○川野　何時ごろバスに乗られたか、覚えていらっしゃいますか。

○スートゥキン　お昼ご飯前だったと思います。

○母　いや、2 時か 3 時ごろでしょう。

○通訳　彼自身は時間はよく覚えていないそうです。

○スートゥキン　まあ 10 歳でしたから、時間もあまり気にしていませんでした。バスが来るということでしたから、うちで待っていて、来たから乗ろうといって出たという感じでした。

○川野　バスに乗られて、まずどこに向かわれましたか。

○スートゥキン　キエフ州にあるスティシノという村に、最初、バスで連れて行かれました。

○川野　それはどこの村ですか。

○母　チェルノブイリ市から 25 キロぐらいと、その時、村の人が言っていたのですが、それほど離れていない所です。27 日、主人は原発に残っていて、残りの家族 3 人がその村まで行ってホームステイしました。

○川野　そこに、どのぐらいの期間おられましたか。

○スートゥキン　1 カ月ぐらい。

○母　いや、そんなことはないよ。5 月 8 日か 9 日には出たよ。

○スートゥキンいや、2 週間だろう。

○母　数えてごらん、そんなことないよ。
○川野　1、2週間と。その後、どちらに向かわれましたか。
○スートゥキン　その後、両親の出身地であるロシアのほうに行きました。キーロフ州ですね。そのキーロフという町ですが、昔はヴャトカという名前でした。これはソ連時代に、そういう名前になったんです。ある人の名前を取って付けた名前です。キーロフという町はウクライナにもあるし、ロシアのほかにも同名の小さな町があります。この元ヴャトカと言われていたキーロフ州は、ロシアの工業都市です。
○川野　そのキーロフには、どのぐらいおられましたか。
○スートゥキン　9月までキーロフにいました。
○川野　その後の経緯を教えていただいていいですか。
○スートゥキン　9月になると、今住んでいるアパートが配給されたので、キーロフからここに移りました。
○川野　では、1986年9月には、このアパートに越してこられたということですね。
○スートゥキン　はい。
○川野　そして、学校もこの地区の学校に行かれたということですね。
○スートゥキン　はい、この近くにある学校にそのまま入学しました。今、住んでいる集合住宅は、すべてチェルノブイリ原発事故の影響による移住者のために配給されました。
○川野　このアパートに何人ぐらい移住されてきたか分かりますか。
○スートゥキン　大勢でした。その時の事情で言いますと、トレーシナ地区と、ハリコフ地区に当時、新しい集合住宅ができていて、そこにまとめて入ったんですね。当時はチェルノブイリ原発で働いていた人たちに、それらの地区の集合住宅が優先的に提供されたということで、そのほかにも、例えばサポリージャ原発とかのほうに移った人たちもいて、その人たちはそちらの町で提供されました。つまりトレーシナ地区とハリコフ地区は、基本的にチェルノブイリ原発で残って仕事を続けるという人たちに提供されました。
○川野　分かりました。1986年の9月にアパートの配給があって、こちらに移って来られたということですが、その後、お父さんとお母さんはどういった職業に就かれましたか。
○スートゥキン　両親ともチェルノブイリ原発に残って、そのまま仕事をしておりました。
○川野　お父さま、お母さまはいつまでチェルノブイリ原発で仕事をされましたか。
○スートゥキン　父は1989年まで3年ほど、母は1年ほどでした。
○川野　分かりました。プリピャチのことを鮮明に覚えていらっしゃいますか。
○スートゥキン　よく覚えています。その当時、ウクライナの町は、本当に最高の町でした。子ども時代をずっと過ごしたということもありますが、町自体、若い人が多く、周りは森も川もあり、キノコも採れるし、魚釣りもできるという、とても自然に恵まれたところでした。
○川野　学校は楽しかったですか。
○スートゥキン　もちろん、よく覚えています。最近になってから、またプリピャチに行ったのですが、自分の学校があった辺りとか、水泳に通っていたプールなどのそばを通ると、鮮明

に思い出がよみがえってきて、言葉では表現できないような感じです。自分の育ったところですから。

○川野　プリピャチには何回行かれましたか。

○スートゥキン　3回行きました。事故後20周年の時に初めて戻り、その後、2回行っています。

○川野　私も2度、プリピャチに行きました。さぞ昔はきれいで文化的な町だったのだろうというのが想像できます。また、あさって行きます。

○スートゥキン　いいなぁ。

○川野　ははは（笑）。プリピャチにお住まいの時は、やはり集合住宅にお住まいだったんですか。

○スートゥキン　3ＤＫでした。だいたい今住んでいるのと似たり寄ったりですけれども。

○川野　今も3ＤＫですか。

○スートゥキン　そうです。プリピャチで住んでいたアパートのほうが、ちょっと天井が低かったり、手狭な感じではありましたが、だいたいこんなものです。

○川野　何階建てのアパートでしたか。

○スートゥキン　9階建ての建物の2階に住んでいました。市内で16階建ての建物というのもあったのですが、それはまだ少なかったです。その町はだんだん順番に建設されていって、町の中の第1地区というところは、まだ5階建ての建物もありましたが、第2地区になると9階建てが増えて、第4地区になると16階建ての建物も建設されていました。

プリピャチという町は、鉄道と川があり、原発があるという形なので、1号炉ができた時に第1地区ができて、2号炉と一緒に第2地区ができてという感じで、徐々に発展していきました。

○川野　私も16階建てのアパートに上って、チェルノブイリを遠くに見たことがあります。これはその時の写真です。16階建ての建物からチェルノブイリを見たことがありますか。

○スートゥキン　自分も行った時に撮った写真がありますよ。ノートパソコンに入っています。

○川野　そうですか。また後で見せてください。

○スートゥキン　私が住んでいた辺りですね。学校とかプールとかアパートとかの写真を撮っています。

○川野　私はプリピャチで小学校跡に行ったことがあるんですが、プリピャチ市内に小学校は幾つあったかお分かりになりますか。

○スートゥキン　四つですね。小中高一貫の学校が四つです。新しい地区が建設されるごとに一つずつできていったので、自分たちの地区は第3地区で、その学校に行っていました。

子どもは結構多かったので、われわれの学校でも2部制になっていて、1年生とか2年生とか小さい子どもたちは朝から、例えば2時ぐらいまで勉強して、その後、大きい子たちが勉強するというような格好でした。大きい子だったら暗くなって帰っても怖くないということでした。若い人の多い町でしたから子どもも多く、1クラスに30人ぐらいいました。

○川野　1986 年の 9 月にキエフの学校に越してこられていかがでしたか。
○スートゥキン　学校に入った時は、近所の子どもたちも、みんなプリピャチから来た子どもたちだったので、元の学校そのままというわけではないのですが、やはり知っている顔がみんな学校に来ていたので、そんなにしんどいということはありませんでした。しかし、ロシアのキーロフにいた時は、3 週間ほどそこの学校に行ったのですが、まったく新しい環境で知らない子ばかりだし、ちょっとしんどかったです。キエフに来てからはそんなこともありませんでした。
○川野　近くの小学校のクラスは何名いて、そのうちプリピャチ出身者はどれぐらいいましたか。
○スートゥキン　クラスでだいたい 9 割ぐらいはプリピャチの子、あとの 1 割ぐらいがキエフの子という感じだったと思います。
○川野　プリピャチ出身のグループとキエフ出身のグループの間でいざこざみたいなものはなかったですか。
○スートゥキン　もめごとはありましたよ。このできたばかりの新しい地区に隣接して村があり、そこの子どもたちとはけんかもありました。やはり、いきなりよその町から来て横取りをしたような印象をもたれていたのでしょう。それは誰が悪いというわけでもないんでしょうけど。小さい子は小さい子同士でけんかをするし、大きい子は大きい子同士でけんかをしているというような、そういうこともありました。
○川野　これまでいろいろな方にお話を聞いているのですが、その中で給食のおかずが 1 品多いというような話を聞いたことがあります。そういったことを経験されたことはありますか。
○スートゥキン　ありましたよ。給食の時にジュースが多かったと思います。特にグレープフルーツジュースとか覚えています。そのほかにもオレンジとか菓子が出たこともありましたが、だいたいはジュースでした。もちろん、もらえなかったキエフの子たちは、やはり嫌な思いをしただろうと思います。くれるのなら、みんなにくれという気持ちだったのではないかと思います。やはり子どもですからね。
○川野　給食費も無料だったとお聞きしているのですが、それも正しいですか。
○通訳　そんな話はありましたかね。
○川野　給食費が 4 年生まで無料だったという話を聞いたことがあるのですが。
○スートゥキン　その時は無料でしたよ。教育は無償ということで。
○川野　分かりました。1986 年、こちらの小学校に転校されて、その後の経歴を教えていただければと思います。
○スートゥキン　その後、技術専門学校で勉強しました。
○川野　何年に卒業されたんですか。
○スートゥキン　技術専門学校を終えたのは 2002 年ですが、学校を卒業してからも働いていて、また通信で学校にも通いました。8 年生までは一般の学校に通っていたのですが、その上の 9 年生と 10 年生は仕事をしながら夜間で勉強をして、その先で専門学校に入りました。

○川野　専門学校では何を専攻されたんですか。
○スートゥキン　旋盤工の教育を受けました。
○川野　2002 年に卒業されて、それ以降は、専門を生かして仕事をされたんですか。
○通訳　すみません、1992 年ですね。失礼しました。
○スートゥキン　1992 年に卒業しまして、キエフのラジオ工場に就職しました。
○川野　これが 1992 年から何年まで。
○スートゥキン　その時というのは、ちょうどソ連が崩壊し、経済状態も非常に不安定で将来が見えにくい時期でした。　そういう時期でしたので、1 年仕事をした後、ほかに手に職を付けておこうと、縫製の勉強をして、それが終わった後に就職したんですが、その就職は、やはり旋盤工の仕事で、その 2 度目の仕事は 8 年ぐらいやっておりました。
○川野　その後の話をお聞きしてよろしいですか。
○スートゥキン　8 年働いているうちに、その職場でほかの技能もいろいろ身につけまして、ポリエチレン製品の加工とか、そういう技術も習得しました。その間に子どもも生まれましたので、やはり給料ももう少しいいところにというので、今度はポリエチレンの管、パイプを製造している工場に変わりました。
○川野　結婚された歳と、お子様が生まれた年を教えていただいてよろしいですか。
○スートゥキン　結婚は、1992 年で、子どもも 1992 年生まれです。
○川野　そこで 8 年お勤めになって、その後を教えていただいてよろしいですか。
○通訳　その後、旋盤工の仕事をまた 8 年やって、そこからポリエチレンのパイプの加工工場に変わったということだったと思います。
○スートゥキン　その 8 年の中で、最初 4 年ぐらいは旋盤工の仕事をしていたのですが、同じ工場内でポリエチレン加工をしている別の部門があって、最初、旋盤工をしている時は、ポリエチレンの製造の機械の修繕とかもやっていたので、仕事はだいたい分かっていました。
　その時に、また国の経済危機が起こり、人員削減があった時に、自分は首を切られる代わりに、ポリエチレン加工のほうに転属になりました。それは純粋に部門を変わったというわけでもなくて、旋盤のほうで誰かが休んだりすると、その穴埋めに行ったりとかいうこともやっていました。
○川野　その旋盤工とポリエチレン、そこは 8 年間ということでしたが、それを辞められた年はいつですか。
○スートゥキン　2003 年に、そこの仕事を辞めました。その後、ガス管や水道管を作っている企業に就職しました。
○川野　そこに何年お勤めになったんですか。
○スートゥキン　そこで 3 年働きました。3 年たつと、またも新しい経済危機が起こりました。その時、大統領選があり、例のオレンジ革命に伴って政権交代があって、工場が閉鎖されるなど、政治絡みでいろんな経済的な影響もありました。
○川野　そこを 3 年で辞められて、その後を教えていただければと思います。

○スートゥキン　その後、火力発電所の仕事をやりました。
○川野　続けて現在までお聞きしていいですか。
○スートゥキン　先ほど言ったガス管とか水道管を作っている会社で 3 年働いて、その後、同様の企業に臨時雇いで 1 年ぐらいいたのですが、そこを辞めてから火力発電所に移りまして、けがをして今の状態になるまで火力発電所で働いておりました。
○川野　それで現在は何もされていないのですか。
○通訳　そうですね、今は無職ですね。
○川野　分かりました。本来、この種のインタビューは、お一人の方に聞くのですが、もしご存じでなければお母さまにお答えいただいても結構かと思うのですが、プリピャチ時代の生活を教えていただけますか。まず、プリピャチ時代の家庭の月収を教えていただければと思います。たぶんご承知ないと思いますので、これに関してはお母さまにお聞きしても結構です。
○母　その当時とすれば悪い生活ではなかったと思います。夫は 300 ルーブル、当時のお金では月給がありました。
○川野　お母さまも自分の給料を覚えていらっしゃいますか。
○母　私は 160 ルーブルでした。自分たちとしては悪くない給料でした。
○スートゥキン　当時のソ連の平均月収としては 120 ルーブルぐらいでしたから、それを考えれば悪くない収入だったと思います。それ以上もらっている職種でいうと、炭鉱夫ぐらいでした。自分がけがの後、サナトリウムに保養に行った時に、保養していた炭鉱夫の人たちとそこで会って話をしていると、彼らが言うには、その当時、500 から 600 ルーブルぐらいもらっていたと。
○川野　炭鉱夫が。
○通訳　炭鉱夫がですね。
○川野　当時、車はご自宅にありましたか。
○スートゥキン　バイクだけで車はありませんでした。
○母　そのバイクもそんなに大したものではなかったですよ。乳母車に毛が生えたようなものでした。
○スートゥキン　いや、そんなことないだろう。あの時代では、そこそこいいバイクなんだよ。
○川野　ははは（笑）。今のこのご自宅には、どなたがお住まいですか。
○スートゥキン　今、実はこの 3ＤＫで 3 家族が同居しています。この部屋に私と私の子ども、隣の部屋には両親、もう一つの部屋には姉とその息子が住んでいます。そういうのも珍しくないですよ。
○川野　少し立ち入った話ですが、収入源はお父さんとお母さん、そしてご本人の年金ということでしょうか。
○スートゥキン　両親は年金をもらっています。私も障害者年金をもらっているのですが、姉は仕事をしています。ですから、年金プラス給料があるということです。また、妻も仕事をしています。

○川野　マクシムさんの奥さんも、ここに住んでいるんですか。
○スートゥキン　はい、そうです。
○川野　では、皆さんでそれぞれの給料を出し合っているんですね。
スートゥキン
○川野　お母さん、一つだけ教えてください。年金は、やはり被災者ということでプラスアルファの年金をもらっていらっしゃいますか。
○母　はい。私が今もらっている年金額は 3,000 グリブナー程度、主人は 5,000 グリブナーですが、二人とも被災者資格があり、その上、チェルノブイリ事故と関連があるという障害者認定もされているので、そういう額となります。
○川野　分かりました。少し話が前のほうに戻りますが、1986 年に避難された時、お姉さまも一緒でしたよね。お姉さんの生年と現在の状況、健康状態などを教えていただければと思います。
○母　はい、1971 年生まれです。健康状態は、いろいろ問題があります。頭痛があったり、背中が痛んだり、血圧が高かったりとかいろんな症状が出ています。それは、みんな一緒ですが。
○川野　分かりました。ちなみにそういった症状というのは、チェルノブイリ原発事故と関係があると考えていらっしゃいますか。
○母　分かりませんね。
○スートゥキン　まったく関係ないとも言えないと思いますよ。でも一方で、プリピャチにいた時のことを考えると、周りは森でしたし、原発からは、いわゆる大気汚染になるようなガスは出ていないわけです。。そこからキエフに来た時、その当時、今よりも車は少なかったわけですが、自分は慣れていなかったので、キエフの幾つかの地区だと、排気ガスの臭いがすごく鼻について息が詰まるような感じでした。
○川野　それは、キエフに来られてということですか。
○スートゥキン　ええ、キエフに来た 1986 年当時ですね。つまり被爆の影響だけとも言えず、大都市キエフに住んでいたからというのもあるのではないかと思いました
○川野　分かりました。現在の健康状態ですが、その事故はいつ遭われたんですか。
○スートゥキン　去年の 11 月 17 日です。職場でですので労災です。
○川野　今はずっとリハビリをされているんですか。
○スートゥキン　はい、そうです。腰椎を骨折して、そこに腰椎の代わりのスチールを二つ入れています。
○川野　当初からすれば、だいぶ回復されましたか。
○スートゥキン　はい、時間もたっていますから、徐々に良くはなっていると思います。しかし、膝のほうは動きますが、足首から先がこういう状態で、思うように動かず、ぶらぶら状態になっています。神経が損傷を受けているので、こうなっています。
　前は寝たきりでしたが、今は杖をついて、家の中を歩けるし、この杖も二つじゃなくて一つ

でも歩けるようになりました。まあ、人間というのは慣れるもので、例えば手足を失った人でも何とかやっているわけですから、徐々に動けるようにはなるでしょう。この足先が、またちゃんと動くようになるかどうかというのは、今後やってみないと分からないけれども、医学でもたぶん予測できないと思うので、どうなるかはっきりとは分かりません。

○川野　回復を願っています。

○スートゥキン　そうですね。自分も早く回復したいです。

○川野　それ以外に、どこか体で気になるようなところはありますか。

○スートゥキン　自分はそんなに愚痴を言うほうではないのですが、事故後、特に胃の痛みというのがあって、今はそれほど急性の痛みではないのですが、慢性になっています。そのほかに頭痛も時々あります。

○川野　先ほど少しお聞きしましたが、プリピャチにいて、チェルノブイリ原発事故によって何らかの放射線を受けたということと、身体の不調を関連付けて考えることがありますか。

○スートゥキン　それは、どちらかといえば関係あるのではないでしょうか。まだ、科学的にも十分解明されていないことでしょうけど。日本の方に、こういうことをいうのはおこがましいかもしれませんが、特にウクライナでは、まだまだそういう経験も少ないことなので、これから研究されていくことじゃないかと思っています。でも、やはり被ばくしたということは、何らかの影響を与えている可能性はあると思います。

○川野　私は日本で被爆者の研究をしていますが、被爆したという認識が強ければ強いほど、健康不安を抱えるという傾向は非常に強いです。ですから、被爆した事実、あるいは被爆したという認識と健康不安の度合いというのは、非常に密接に関わりがあるというのを、日本の広島・長崎の原爆被爆者から私たちは理解しています。

○スートゥキン　そうですね。私たちは、被災者であるという意識は普段あまり思っているわけではなくて、先ほども言ったように、愚痴もあまり言わないようにしていますし、現在、どこも痛むということがなければ、これで大丈夫なのだなというふうに思うようにしています。

○川野　これに関連して、もう一点だけ教えてください。1992 年にお子さんがお生まれになったとおっしゃっていましたね。その時に、子どもさんに対して何らかの影響があるのではないかと、子どもさんの将来の健康ということに何らかの不安を感じたことがありますか。

○通訳　子どもさんが生まれたのは 2002 年でした。失礼しました。

○スートゥキン　今月の 21 日で 10 歳になります。息子はアレルギー疾患ですが、アトピー性というか、アレルゲンが分からないんです。

○母　また、娘の息子もしょっちゅう鼻風邪をひいていたり、肝臓とか甲状腺とかの具合が悪いということがあって、完全に病気というわけでもないのですが、健康とも言えないような状態です。

○川野　そういったことと放射線を被ばくしたということを関連付けて考えるようなことがありますか。

○スートゥキン　まあ、そういう可能性は十分あると思っています。テレビの報道とかを見て

いても、被ばくの遺伝的影響というようなことも言われていますし、特にチェルノブイリ原発事故の時は、ただの放射線というのではなくて、原子炉に入っていたいろいろなものが放出され、複雑なものになっていわけですから、それが、人間や自然にまったく影響を起こさないとは思いません。

○川野　分かりました。スートゥキンさん、これまで学校生活あるいは職場で、チェルノブイリ原発事故の被災者、あるいはプリピャチ出身者ということで、差別、偏見、嫌な思いをしたことはありませんか。

○スートゥキン　それはなかったです。学校や職場では特になかったと思うのですが、先ほど言った、こちらに移住してきたばかりのころに、地元の子どもたちとのいさかいがありましたそれを除けば、特にありませんでした。

○川野　分かりました。

○母　それよりも自分たちがロシア系であるというので、ウクライナの人たちに何か言われるという懸念のほうがあったかもしれません。けれども、自分たちも今はウクライナ国民ですから。

一般的な話でいうと、やはりチェルノブイリ被災者だというので特典があったり、職場の休みも長く認められていたりとか、そういうことでやっかみを持つ人はいるようですけども。

○スートゥキン　しかし、恵まれていたのかもしれないのですが、自分の職場で直接、そういうことを口に出して言われるようなことはなかったですよ。

○川野　これまでの自分の人生を振り返ってみて、1986 年 4 月 26 日未明の原発事故で、自分の人生が変わった、あるいは狂ったといったような思いがありますか。

○スートゥキン　はい、それはあります。

○川野　何が一番変わったと思いますか。

○スートゥキン　もし事故がなくて、自分がそのままプリピャチで育っていたらどうなったかというのは、また別の話になるので、何が一番変わったかというのは哲学的な問題だと思います。でも、考えてみれば、原発職員の町で、両親もそこで仕事をしていたわけですから、成人したら、何か原発に関係のある仕事をしていたかもしれませんし、直接原発の運転でなくても、例えば旋盤工の関係で何かやっていたかもしれません。

しかし、プリピャチに自分がいた時に、その将来の具体的なイメージを持っていたわけではないので、今考えてみればということです。

○川野　分かりました。ありがとうございました。

少し福島に関連する話を聞かせてください。ご承知のように、2011 年 3 月 11 日に大震災が起こり、その翌日から福島第一原発事故が起こりました。メディア等でご覧になられるのだろうと思いますが、どのように理解されていますか。

○スートゥキン　こちらのメディアで報道されている範囲のものは、自分たちも関心を持ってずっと見ておりましたが。

○川野　あと 2 点教えてください。先ほど少しお話をさせていただいた年金のこともそうです

が、チェルノブイリ原発被災者の場合は、いろんな補償、あるいは手当てがあります。福島の被災者の人たちに、手当て、あるいは補償ということが今後議論されるのでしょうけれども、そういったときに、どういったものが必要だとお考えですか。

○母　こちらでも法律はあって、いっぱいいろんなことが書かれているけれども、現状としては、ほとんど何もなされていないんですよ。

○スートゥキン　自分たちが見ている限りでは、日本の政府の対応は、チェルノブイリ事故の時よりも迅速です。だから、早く福島事故の影響が解消されるのではないかと思っています。

どんな支援が被災者に必要かといえば、住んでいた家を失って別のところに住まざるを得ないということが一番大変だと思うので、避難させられた人たちに対して、精神的なサポートや新しい移転先の補償、場合によっては町をつくるということも必要でしょう。　放射線というのは目に見えないし、味もないわけなので、被ばくしたということによって日々脅威を感じるということはないにしても、住居を失ったということが一番精神的に厳しいと思うので、それに対するケアが必要だと思います。

○川野　ありがとうございます。最後に一点だけ教えてください。原子力発電についてどう思いますか。原子力とエネルギーというのは、われわれにとって必要だと考えますか。

○母　いや、必要だよ。

○スートゥキン　原子力は確かに強力なエネルギー源ではあると思うので、まったく反対というわけではないのですが、しかしチェルノブイリとか福島のようなことが起こらないような方法で運転しなければならないと考えています。万一、何かトラブルが起こっても、きちんと、大事に至る前にそれが停止されるような措置が取られていればいいのでしょうか。

しかし、日本の場合は島国であり、ほかに代替エネルギーというのもあるわけで、風力とか太陽光とか、満潮干潮の変化で発電する潮力発電など、そういうもので代替する可能性もあるとは思います。

○川野　ありがとうございました。当初お聞きする予定の質問は以上です。これとは直接関係ないのですが、一点、お母さまにお聞きします。

先ほど、ロシア系とウクライナ系の間では若干軋轢があるというお話でしたが、1991 年にウクライナが独立した時に、ロシアに帰るといった選択はなかったですか。

○母　考えたことはありませんでした。というのは、もうこちらで仕事もあったし、知り合いもいたわけですし、ロシアに帰るといっても待っている人もいないし、実家のある辺りは寒くて、冬はマイナス 40 度になりますので、こちらのほうが暖かいということもありました。

○スートゥキン　もう、一度全てを失って移住するという経験をしたわけですから、それを繰り返したくないということもあります。このキエフの中で、この地区から別の地区に引っ越すとかいうことなら、また別ですけれども、まったく遠いロシアに移住するのは、今はかなり難しいかと思います。

○川野　今ではなくて 1991 年当時はどうでしょうか。

○母　当時も今もですね。

○川野　分かりました。大変長い時間、ありがとうございました。平岡先生、小池先生、もし何かあれば。
○平岡　一つだけお母さんに質問します。事故当時、ウオツカを飲めば放射線障害が軽減されるという噂が流れたようですが、それは聞かれましたか。
○母　いや、私は直接ウオツカを勧められたことはなかったですよ。おそらく初期の段階に、放射線障害が軽減されるということでウオツカが出されたと思うのですが、飲みすぎた人が多く出て、その後やめたのではないでしょうか。
○一同　ははは（笑）。
○平岡　では、事実として、ウオツカを飲んでいた人は、放射線障害が軽減されるということを信じていたわけですね。
○母　今でも、そういうことを信じている人はいますよ。
○平岡　どこからそういう話が出ましたか。実は広島でも酒を飲めば放射線障害が治るという話があったんですよ。
○スートゥキン　いや、スラヴ民族には、ウオツカは百薬の長というような発想があって、放射線もそれで治ると思ったのではないでしょうか。
○一同　ははは（笑）。
○母　また、よく引き合いに出されるのは、同じ事故処理作業をした人の中でも何とかさんは酒もたばこもやらなかったのに、もう亡くなってしまったということです。
○平岡　ありがとうございました。
○小池　では、一ついいですか。いわゆるチェルノブイリ原発事故の原因について、当時、どんな噂が流れていましたか。また、今から考えると、どのようなものが原因だと考えられていますか。
○母　その原因については、今でもきちんと、これだと完璧に真実を知っている人はいないと思うので、まして、われわれはそこまでわかりません。
○スートゥキン　専門家の間でも、これという定説がまだない状態ですからね。運転していた人の人為ミスだとか、超自然的な力が作用したのではないかという話まであるぐらいです。ひょっとしたら、どこかの金庫の中に極秘の判子が押された書類があって、それを見れば分かるのかもしれませんが、われわれには、いずれにせよ分からないことでしょうね。
　ソ連時代に起こったことというのは、いまだに周知されていないことがいろいろあります。
○川野　その後、事故処理作業を指示した人たち、あるいは当時の管理者などがチェルノブイリ裁判と言われる裁判で裁かれたわけですが、そういったことに対してどう思いますか。
○スートゥキン　誰か、あるものを投げつけなければいけなかったんでしょう。
○母　その所長に罪があるとすれば、子どもを外に出してはいけないとか、きちんとそういう情報を出すべきだったのではないでしょうか。
○スートゥキン　いや、そんなことを言えば、当時のソ連の上層部の人、みんな同罪だろう。
　事故についての情報というのは、最初はスウェーデンのほうで線量が上がったということで

それはソ連の原発事故ではないかと言われ出してやっとソ連も公に認めたわけですから。それまでは何も言いたがらなかったわけです。

○川野　たぶん裁判記録なども今から公開されていくのでしょう。もう、一部公開されていますよね。そういったものが徐々に明らかになることによって、真の原因も探求されるのではないかと思います。裁判に関していえば、日本では、例えば東京電力の社長や所長とか政府が責任を取ることは、きっとないだろうと思います。ですから、裁判の是非ということに関しては、また別次元ですが、日本もやはりどういったところに原発事故の責任があったのかというようなことも、一回検証すべきだろうと個人的には思っています。

○スートゥキン　それは分かりません。裁判をやって刑を受けさせるということに何か意味があるのかというと、それも疑問です。

○川野　それそうでしょうね。

○スートゥキン　辞職させるということなら分かります。でも、やはり日本でも、それが誰かが首になって終わりという悪者探しという格好になるのは良くないだろうと思います。○川野そうですね。結局、そこにある事実を公にするというのが一番大事なことで、その方法に関しては、またいろいろ議論があると思いますが、何が原因だったのかということは知るべきですよ。

　大変長い時間、拘束してしまい、すみませんでした。本当に貴重なお話をありがとうございました。

○スートゥキン　いや、もう自分は今、時間をもてあましているので、また来ていただいても構いません。

ヂャトロヴァ・リュドミラ氏（女性）
2013 年 3 月 26 日実施　通訳：五代氏

インタビュー風景　ヂャトロヴァさん

○川野　それでは、今日お一人目の聞き取りを始めたいと思います。今日はお忙しい中、お越しいただきありがとうございました。

このインタビューの趣旨は既にご存じだと思いますが、私たちは 2009 年から、チェルノブイリ原発事故被災者に対する聞き取り調査をしています。そもそも、チェルノブイリ原発事故とは何だったのかを考えるというのが、調査を始めたきっかけでした。例えば、サイエンティフィックな議論というのはよくされるのですが、社会学的にチェルノブイリ原発事故というのは被災者に何をもたらしたのかということが、私たちが最も興味があるところでした。

なぜそうしたところに私たちが最も興味をもったかというと、原子力発電に関して、日本ではほとんど議論されていなかったので、きちんと議論をする必要があるだろうと考えていたからです。そこで、実際に被災に遭った人たちは原発に対して、どう考えているのかを知りたい、ということが私たちの研究のベースにあったわけです。

ご承知のように、2011 年 3 月 12 日に福島第一原発事故が起こりました。今、15 万人ぐらいが避難しています。本来はチェルノブイリがあって、私たちは原発事故に対して何らかの準備をするべきだったのでしょうけれども、ほとんど何も準備できていなくて、15 万人の避難民を生んでしまいました。

今考えていることは、チェルノブイリの経験を生かして、福島第一原発事故をどう考えていくのか、もう一つは、福島第一原発事故からもう一度チェルノブイリ原発事故をあらためて考えてみたいと考えています。

福島第一原発事故以降、日本人の多くがチェルノブイリ原発事故に再び関心を持っているというのが現状です。本当は福島第一原発事故の前に興味を持ってほしかったのですが、今からでも遅くないので、もう一度、チェルノブイリ原発事故を考えてみるというのは、非常に私たちにとって必要なことだと思っています。

これ [13]は広島大学から出した本ですが、2009 年から 2010 年までに行った、チェルノブイリ原発事故被災者に対する聞き取りをまとめた本です。10 人分の聞き取りした内容が入ってい

[13] 川野徳幸、今中哲二、竹内高明『チェルノブイリ・旧プリピャチ住民へのインタビュー記録』IPSU 報告シリーズ研究報告 No.46、広島大学平和科学研究センター、2012 年

ます。この本は新聞などで何度か取り上げられました。2011 年から 2013 年の間に行った聞き取りもこれと同様に、全部で 20 人分程度にまとめて、本として出したいと思っています。今日お聞きする内容も、本にまとめて出すということになると思います。その際に、お名前と顔写真が掲載される可能性があることをご了承いただけますでしょうか。

○リュドミラ　まったく問題ございません。

○川野　ありがとうございます。

○リュドミラ　もし、私がインタビューを受けて、いいことをもたらすのでしたら、私は喜んでお受けいたします。

○川野　ありがとうございます。

では、聞き取り調査を始めていきたいと思います。まず、氏名、生年月日、人種、宗教、最終学歴を教えてください。

○リュドミラ　ヂャトロヴァ・リュドミラです。性別は女性。1947 年 2 月 8 日生まれ、66 歳です。ウクライナ人で、宗教はウクライナ正教です。

○通訳　最終学歴は、日本語に訳すと高等専門学校ですね。高校と大学の間のような感じでしょうか。

○リュドミラ　その当時のシステムでは、高等専門学校を卒業した後 3 年間は、国が指定する派遣先に行かなければなりませんでした。私の場合はタシケントに送られて、タシケントで仕事をしていました。

　タシケントでは、昼間に働きながら、夜間大学に通っていました。タシケントはものすごく気温が高い所で、その暑さに体が適応できずに、結局タシケントを離れました。ですから、タシケントの夜間大学には一応入学はしましたが、卒業はしていません。

○川野　高等専門学校では何を専攻されたのですか。

○リュドミラ　会計士です。

○川野　分かりました。では、出身地、その後の居住歴、職歴について教えていただければと思います。

○リュドミラ　キエフ市から 100 キロ離れた所にある、キエフ州の中のズグーロフカという所で生まれました。そこはズグーロフカ地区の中心で、村と言うほど小さくはないけれども、小さめの町です。1962 年に出生地であるズグーロフカを離れて、4 年間勉強するためにキエフに来ました。

○川野　1962 年から 1966 年までキエフに住んでいたのですか。

○リュドミラ　そうです。1966 年の秋にタシケントの方に行きました。

○川野　高等専門学校の在籍期間は 3 年間ですか、それとも 4 年間ですか。

○リュドミラ　4 年間です。

○川野　タシケントには 1966 年から何年まで在住していらっしゃいましたか。

○リュドミラ　タシケントには 1966 年から 1969 年まで居ました。1969 年にタシケントを離れました。

○川野　1969 年以降はどうされたんですか。
○リュドミラ　両親の住んでいたズグーロフカへ戻ってきました。
○川野　1969 年から何年まで、ズグーロフカにいらっしゃったんですか。
○リュドミラ　ズグーロフカに戻る前に、1967 年に私はタシケントで結婚をしました。結婚した相手は、同じくズグーロフカ出身の男性です。主人は中央アジアに非常に土地勘があったので、トルクメニスタンの方で従軍していました。私は 1966 年から働き始めましたが、主人が 1967 年に初めて長期休暇を取ったときにタシケントに来て私と出会い、結婚をしました。主人はその後、タシケントで仕事を見つけて、1969 年まで一緒にいました。
○川野　分かりました。1969 年以降の話を教えてください。
○リュドミラ　1969 年に主人と一緒にタシケントを離れて、出生地であるズグーロフカに戻ってきました。ズグーロフカに帰ってきたその年に息子が生まれました。その後、しばらくの間は両親の所に一緒に住んでいました。
　そのときに、「チェルノブイリの方で原子力発電所ができる。その建築作業に参加すればアパートメントが支給される」という話を聞いて、1971 年 5 月にチェルノブイリ原発に向かったのですが、まだプリピャチには建物があまりなかったので、チェルノブイリ市の市内にアパートメントを借りていました。1 年半、チェルノブイリ市にいました。
○川野　その当時のご主人のお仕事を教えてください。またその当時、リュドミラさんは何をされていましたか。
○リュドミラ　1972 年 11 月にプリピャチに移り住みました。私は、チェルノブイリ市の方まで通勤して、約 1 年は売店の販売員として働いていました。その 1 年後からは会計士として働いていました。チェルノブイリ市とプリピャチは 18 キロ程度しか離れていませんから、通うことができました。
　主人は、発電所の方に建設のために運ばれてきた建築資材などを、鉄道を使って必要な部署に発送する部署でした。初めは補助員だったのですが、その後、補助員から昇格して正式な職員として働くようになりました。主人が仕事で使っていた鉄道というのは、ディーゼルの運搬用車両でした。燃料棒なども、これを使って原発の方まで運んでいました。
○川野　1986 年まで、リュドミラさんは会計士、ご主人は原発へ資材を運搬・配分する仕事をされていたということですか。
○リュドミラ　主人は 1986 年までずっと、その仕事を続けていました。しかし、私は 1981 年から 1986 年までの 5 年間は、警察の会計部門で働いていました。
○川野　1986 年 4 月 26 日に原発事故が発生するわけですが、その後の居住歴と職歴を教えていただければと思います。
○リュドミラ　主人は、1993 年までその仕事を続けました。事故後も、石棺を作る資材などを入れる必要があったから、ずっとその作業にあたっていました。
　私の職場は、1986 年の事故後、組織自体をその地区の中央であった、パリエスカという町に移しました。そこには今は誰も住んでいませんが。1987 年の頭ぐらいまでそこにいて、そ

こから、こちらでは「ウクオプ」[14]というふうに言っていたのですが。
○通訳　「ウクオプサユーズ」、「ウクライナコーポレーションサユーズ」みたいな感じですが、共和国、ウクオプ、羽毛、サユーズですかね。羽毛や動物の毛皮などを集めて、それを管理するような組織と考えて良いでしょう。
○リュドミラ　ソ連時代に、各村町にある毛皮などを取り扱う店を管理していたのが、このウコップサユーズでした。そこを運営していたのはユダヤ系の人間だったのですが、私は知り合い経由で何とかそこに仕事を見つけることができました。
○川野　1987 年の頭から、そこに勤めていらっしゃったということですか。
○リュドミラ　はい。
○川野　何年まで、そちらにお勤めでしたか。
○リュドミラ　1986 年 11 月に、このトレーシナ地区にアパートをもらいました。しばらくは、このアパートからウコップサユーズまで通っていたのですが、当時は交通機関を乗り継いで行かなければならなくて、非常に通勤は不便でした。はっきりとは覚えていませんが、そこで約 3 年程働いて辞めました。
○川野　それ以降はどうされていましたか。
○リュドミラ　その後は、ここトレーシナ地区で仕事を見つけました。勤務先は、居住管理をする国の出先機関ですが、そこで会計士の上の会計士長という仕事を見つけました。
○川野　3 年間、会計士長としてウコップサユーズで働かれたということですか。それ以降はどのようにされていましたか。
○通訳　それ以降が、ここトレーシナ地区での会計士長ですね。
○リュドミラ　4 年ぐらい会計士長として働きましたが、当時は給料が非常に安かったので、いろいろな会社で働いていました。場合によっては、3 社ぐらいの会社の会計を面倒見ていたこともありました。ちょうど 1990 年代に入り、民間の会社がたくさん出始めましたから。
○川野　会計士として働かれたのは何年ごろまでですか。
○リュドミラ　今現在も会計士の仕事をしています。
○川野　こちらの仕事はどうされているんですか。
○リュドミラ　ここゼムリャキでも会計士をしています。今現在は、ここ以外に、もう 1 カ所の団体の会計を見ています。ただ、私も年々、多くの仕事をできるような体調ではなくなってきていますし、会計の仕事はどんどん電子化されている動きもあって、難しくなってきています。
○川野　分かりました。1993 年まで、ご主人はチェルノブイリの方で仕事を続けられたということですが、1993 年以降のご主人の仕事の内容を教えていただけますか。
○リュドミラ　主人は 1993 年、48 歳のときにチェルノブイリで体調を崩し、キエフの郊外にある保養施設に運ばれました。そこで調べたところ、80%の労働力を失ったと言われました。労働力としては 20%ぐらいしか残っていないという診断を受けて、第 2 カテゴリーの障害者の

[14] Ukkop。国立貿易運営会社のこと。

認定を受けました。それ以降、主人は仕事をしていません。
○川野　ご主人は、今はお元気ですか。
○リュドミラ　主人は2009年に亡くなりました。1993年から2009年の間は、彼にとって人生ではありませんでした。ただ体調不良との戦いだけの日々でした。
息子の妻のお父さんは、原発事故が起こったとき、まさにタービン室で働いていました。1986年に500レントゲンという放射線を浴びて、1993年、53歳のときに白血病で亡くなりました。私の主人は、その方よりも若干年齢が若かったので、彼よりも若干長生きができたのではないかと思っています。私の主人は63歳で亡くなりました。
○川野　ご主人の死因は何でしたか。
○リュドミラ　主人は非常に多くの病を抱えていました。心臓、腎臓が悪く、糖尿病なども患っていました。最終的な死因は、糖尿病によって足を切断した後、術後の具合が非常に良くなかったことです。
1993年以降、私の家族は大黒柱を、一家の主な収入の主をなくしました。1993年以降、主人は自分で買い物に行くこともできないぐらい、心臓の働きが弱くなりました。
○川野　あまり思い出されたくないかもしれませんが、そういったときには、その旨、お伝えください。
1986年4月26日、原発事故が発生します。避難のときの様子を教えていただきたいのですが、まずは1986年4月26日現在の家族の構成を教えていただければと思います。
○リュドミラ　私と主人と、1969年生まれの息子と、1974年生まれの娘の4人家族です。
○川野　その1974年生まれの娘さんというのは、今一緒に住んでいらっしゃる方ですね。
○リュドミラ　以前は一緒に住んでいましたが、彼女も結婚して、今は1人で住んでいます。彼女にとっては2回目の結婚です。
○川野　1986年4月26日以後、27日から避難を始めていらっしゃると思うのですが、その当時の状況を教えていただければと思います。
○リュドミラ　27日に自家用車で出ました。もともと私は警察で働いていたので、放射能は危ないということは聞いていました。警察には線量計もあって、町中の数値が5レントゲンだということを聞いて、その数値が危ないのかどうか聞いたところ、「2時間以上そこに居てはいけない数値だ」と言われました。これは子どもたちを避難させなければいけないと思って、主人に子どもたちをキエフに避難させようと話をしたのですが、主人は「明日仕事があるから」と言って賛成しませんでした。
26日から27日にかけての夜中、外でドアを閉める音がしていましたので見てみると、避難が始まっていました。私たちも27日の明け方になって、自家用車で赤の森、こちらではオレンジの森と呼んでいますが、そちらの非常に汚染が激しい方向に向かったのですが、そこでは検問がありました。
私は警察で働いており、この地域の警察の人はほとんど知っていますから、知っている警察官がいるだろうと思っていたら、私が知っている警察官はチェルノブイリにいて被ばくをして

いるので、皆、避難させられた後で、まったく知らない新しい警察の人たちが立っていました。赤い森の所には遮断機があって、そこから先へはどうしても通してくれませんでした。そこで、今度はパリエスカに向かう道へ向かったところ、そちらにも検問がありました。

当時、「酒を飲めば放射能を防げる」というような噂もあったので、パリエスカの検問にいた警察官たちは酒を飲みたかったようでした。しかし、私たちの目の前で酒を飲むのも気が引けたのでしょう。私が非常にしつこくお願いし続けたところ、「分かった、じゃあ行け」というような感じで言われて、本当に運よく、私たちは検問を通ることができました。私たち以外は、基本的に誰も通れないような状況になっていました。

○川野　27 日には、プリピャチ市にバスが 1,200 台ぐらい来ていたと思うのですが、そのバスには乗らないで、自分の車でキエフに向かわれたということですね。

○リュドミラ　パリエスカの検問を抜けて、私たちはイヴァンコフを経由してキエフに戻る道をたどったのですが、イヴァンコフの所で、ガソリンを給油するためにガソリンスタンドに寄ると、そこでものすごい光景を見ました。1,100 台以上のバスが連なって進んで行ったんです。本当にものすごい光景でした。はっきりと今でも覚えています。

○川野　そのとき、ご主人はプリピャチに残られたんですか。

○リュドミラ　いいえ、そのときは主人も一緒に行きました。主人は 26 日の 8 時から 20 時まで原発で勤務していたのですが、私は職場に電話をして、主人にすぐに避難をして背の高い所に行かないように言いました。仕事上、主人のような職員たちには、一応、ここは汚染が高いから危ない、ここは危なくないというようなメモ書きみたいなものを渡されたようです。しかし、主人の居た部署のルールで、まったく何も荷物を入れていない空っぽの車両を発送すると、大きな罰金を払わなければいけないようで、本来なら、汚染が高くて行ってはいけないようなところにも、やむを得ず荷物と一緒に行かざるを得なかった状況だったようです。

○川野　結局、キエフにご家族で到着されたのは 27 日ですか。

○リュドミラ　はい、そうです。私の弟がキエフ市内の中心に住んでいましたので、そちらに行きました。私たちが到着した 27 日はちょうど、弟は両親の実家に行っていたのですが、弟のアパートの鍵は持っていましたので、入ることができました。

プリピャチなどでは、学校で子どもたちにヨード剤が配布されたと聞いていたのですが、ヨード剤の数が足りなくて、私の息子と娘には回ってこなかったので、非常に心配していました。

キエフに向かって行く途中、本当に体調が悪くなりました。ものすごく吐き気をみんな感じてきたので、ヨード剤を入手しようと薬局に行ったところ、処方箋がないと売れないと言われました。薬局の人に、私たちはプリピャチから避難してきた人間だと伝えたところ、「救急車を呼べばきちんと対応してくれるはずだから、救急車を呼ぶのがいい」と言われて救急車を呼びました。

そして、救急車と自家用車も一緒に指定の病院に行ったのですが、そこで汚染されていた着ていた服や車などは全て没収されました。キエフには汚染物質の処分場があったので、没収された物は全てそこに運ばれました。レモン酸を使って、髪の毛を非常に長い時間をかけて洗浄

されました。胃の中も洗浄されましたし、浣腸なども使って一切の洗浄をされました。
○川野　キエフにある弟さんのアパートには、いつまでいらっしゃったんですか。
○リュドミラ　弟の所に行ったのですが、救急車を呼んだら、すぐに救急車が来て病院に運ばれて、実際には弟の所に住んだことはありません。弟からは、「なぜそんな放射能汚染されたものを私のアパートに持ち込んだんだ」と、後から非常に怒られました。
○川野　病院にはどのぐらい入院されたんですか。
○リュドミラ　1 週間です。1 週間後には強制的に退院させられました。私たちと同様にプリピャチからキエフに来て、病院に運ばれてきた方々がたくさんいたので、彼らにも治療をしなければいけないということで退院させられました。しかし、私たちが着ていた服などは全て処分の対象になっていたので、「せめて着るものをくれ」と言ったのですが、「親戚に頼んで持ってきてもらえ」としか言われませんでした。

私の主人は非常にがっちりとした大きい体ですが、私の弟はやせた体形で、ズボンなどは絶対に合うはずもないです。どうしようかと困っていたところ、ちょうどその時期に厚生保健省の大臣と赤十字の人間が病院を訪れて、特に赤十字の支援で、ちょうど夏前でそんなに寒くなかったため、最低限の、体を隠す程度の服を受け取りました。私がもらったのも、家で着る部屋着のような、日本でいう浴衣みたいな感じものですが、それで私はその夏を過ごしました。

車は没収されましたが、チェコ製のビールを 1 ダース持って交渉に行き、そのビールと引き替えに自家用車を取り返すことができました。車は特別な場所に止められていたのですが、そこまでビールを 1 ダース持って行って、その車で夏中、普通に運転していました。例えば実家に帰ったりするのも、その車で移動していました。

私たちはその当時、その車がどれだけ汚染が高いか、危険な行為かということをまったく知らなかったんです。その車を移動している間に、数回、検問所の線量測定に引っかかったこともありました。1986 年の秋に、その汚染された車を処分場に持っていって処分し、証明書をもらえば、新しい車がもらえると聞いたので、処分場に持っていきました。その後、車がもらえたのは 4 年後でした。

1986 年の夏は、本当に私たちは恐怖を覚えていた夏でした。私はパリエスカの方に呼ばれて、そちらで仕事を始めました。主人は、以前の仕事をそのまま続けました。子どもたちは両親の所に預けていました。
○川野　いつ、皆さん一緒にキエフで生活するようになったのですか。
○リュドミラ　1986 年 9 月に 2 日ほど保養所での保養の権利をもらい、子どもたちと一緒に保養所に行きました。そのときに保養所に行ったのは私と子どもたちだけで、主人は働いていました。主人の仕事は、2 週間働いて、2 週間休みというような感じでした。

1986 年の 11 月に、キエフでアパートメントをもらいました。1986 年の 11 月から家族みんなで一緒に生活を始めました。主人は 2 週間は向こうで働き、キエフに帰ってきて 2 週間休むというような感じでした。
○川野　今の 1986 年 11 月に配給されたアパートに、今も住んでいらっしゃるんですか。

○リュドミラ　はい、そうです。
○川野　配給されるときに嫌な思いとかはされましたか。
○リュドミラ　それはどういう意味でしょうか。
○川野　よく話を聞くんです。アパートが配給される際に、プリピャチの人たちが入ってきたことによって、本来そこに入居する予定であったキエフの住民たちが入れなくなってしまった。そのことも原因して、プリピャチの人とキエフの人たちの間に軋轢があった、あるいはやっかみを言われた、という話を聞き取りをした被災者の方からよく聞くのですが、リュドミラさん自身はそういった経験をされたことがありますか。
○リュドミラ　私も話は聞いたことがあります。例えば、ドアが焼かれたということも聞きましたが、でも私の身に直接何かが起こったことは一度もありません。ただ、公共交通機関に乗ったときなどに、「プリピャチから来た人たちが、この辺りのアパートを独占している」というような噂話は耳にしたことがあります。しかし、その程度です。
○川野　分かりました。昔のプリピャチ時代の話を幾つかお聞きします。プリピャチに住んでいらっしゃるときに、どんな広さのアパートに住んでいらっしゃいましたか。
○リュドミラ　3部屋のアパートメントでした。
○川野　3部屋ということは、3DKと解釈していいのですか。
○通訳　そうですね、3DKでいいと思います。
○川野　今現在住んでいらっしゃるアパートはどのようなものですか。
○リュドミラ　若干仕切りは違いますが、その当時とほぼ同じ間取りのものを配給されました。プリピャチでは、レーニンストリートの辺りで4階の部屋でした。
○川野　当時と今とでは、食事の内容で違うことがありますか。
○リュドミラ　当時は品薄と言われていましたが、私は販売の仕事も一時期していたので、そんなに食料が足りなかったとは感じていません。ただ、今は昔に比べていろいろな食材なども簡単に手に入りますし、より自由に食料を入手することができるようになったと思います。

当時は、行列に並ぶか、あるいはお店に行って裏口からお願いするか、その二つしか食べ物を入手するか方法がありませんでした。裏口からお願いする方法も、あまり人に威張れるような作業ではありませんでした。

その当時、食べ物の品質に関しての恐怖というのは特にありませんでした。なぜなら、そういう情報が伝えられることもありませんでしたし、情報を入手する方法もありませんでした。以前は、ソーセージに何が入っているのか、どうやって作られているかのか、というのも、私たちは全然知りませんでした。今はそのような情報が、いろいろな媒体から私たちの所に入ってきます。例えば、いろいろな化学物質が入っているということを聞いて、今は心配したりしますが、おそらく、以前もそういうものは入れられていたのだとは思います。ただ、当時はまったく知るよしもなかったので、その点に関してはまったく心配はしていませんでした。
○川野　食べていた物というのは、あまり変わりませんか。
○リュドミラ　ほぼ同じです。

○川野　プリピャチ時代、ご主人と二人で働いていらっしゃったということですが、プリピャチ時代にどのぐらいお金をもらっていたか、覚えていらっしゃいますか。
○リュドミラ　私たちが初めにもらっていた給料というのは、主人が当時 120 ルーブル、私が 75 ルーブルでした。そのときに、120 ルーブルもらっていた主人が、「150 ルーブルもらえれば全然生活が違うんだけどね」ということを話していたのですが、それから 150 ルーブルに上がったら、「180 ルーブルあれば全然生活が違うんだけどね」と冗談で言っていました。最終的には 300 ルーブルまで給料は上がりました。

私の給料は最終的には 160 ルーブルまで上がりました。若い結婚したての家族だったので、買い揃える必要があるものもたくさんありました。もちろんアパートはありますが、家具などもなかったので、全てにお金が足りませんでした。その当時、パン 1 個が 16 コペイカ（約 0.16 ルーブル）でした。牛乳 1 リットルは 20 コペイカ（約 0.2 ルーブル）でした。お金は本当に足りませんでしたが、両親からの支援もありました。給料も安かったですが、われわれは 15 年間そこで働いて、お金をためて、車を買うこともできました。
○川野　当時、車を持っているというのは普通のことでしたか。
○リュドミラ　車を持っているというのは非常にまれで、みんなが持っていたわけではありません。それはお金だけの問題ではなくて、仮にお金があったとしても、車自体を買うのが難しかったのです。当時は、車の数自体が少なかったですから。主人は優秀作業員ということで、会社から車を購入できる権利証みたいなものをもらって、それを持って、車を販売していた所に行き、車を購入することができました。
○川野　当時の車の値段とかは覚えていらっしゃいますか。
○リュドミラ　忘れてしまいました。
○川野　高かったですか。
○リュドミラ　約 7,000 ルーブルでした。両親にも支援してもらいましたが、一部は私たち、一部は両親に出してもらうかたちで、全部で 7,000 ルーブルでした。
○川野　おおよそ 1 年間の年収ぐらいでしたか。
○リュドミラ　そうですね。いえ、それ以上の額です。約 2 年分の給料です。
○川野　それは高いですね。現在は年金で生活されているということでいいですか。
○リュドミラ　はい、そうです。年金受給者です。
○通訳　ただ、リュドミラさんの場合は、会計の仕事などで副収入があるのではないですかね。
○川野　失礼ですが、年金はどのぐらいもらっていらっしゃるのですか。
○リュドミラ　ほかの方々に比べると、私は若干いい年金をもらっています。私の場合は、働いていた年数が非常に長いので、それに応じて、このような額の年金をもらっています。
○川野　2,000 グリブナーですか。
○リュドミラ　そうです。もう 40 年以上働いていますので。こちらのほうは、毎月の給料から、年金基金の方にお金を引かれていくシステムですね。
○川野　給料の中から年金を積み立てていくという話ですか。

○リュドミラ　そうですね。こちらも年金基金みたいなものがあって、給料の何十パーセントかを納めなければならないシステムです。
○川野　分かりました。その年金とともに、今は会計士としての収入もあるということですね。
○リュドミラ　すみません、主人は 1993 年に 1,200 グリブナーを年金としてもらっていました。チェルノブイリ障害者の年金と、事故処理作業者の年金で合わせてその額です。私にも事故処理作業者認定の機会があったのですが、私は主人がやっていた事故処理作業の仕事に比べると、全然たいしたことはしていなかったので、主人と同じ事故処理作業者のカテゴリーを受け取るのが非常に恥ずかしいと感じて、私はそれを受け取りに行きませんでした。しかしながら、もらっていた年金の額は同じ額、1,200 グリブナーをもらっていました。
○川野　それは 1993 年ということですか。
○リュドミラ　そうですね。その後、主人は亡くなってしまったのですが。
○通訳　すみません、私もおかしいと思ったのですが、ご主人が亡くなったのは 2009 年です。1,200 グリブナーを受給していたというのは、亡くなったときのことですね。
○リュドミラ　まず年金ですが、2009 年に主人は亡くなりましたが、その以前に、チェルノブイリの事故処理作業に 2、3 日行って作業をして帰ってきた人間の年金が、ずっと現地で作業をしていた事故処理作業者よりもはるかに高いということが表面化しました。

それはなぜかというと、2、3 日の事故処理作業にあたった人たちというのは、その 2、3 日間の給料を約 5 倍にした給料が年金の対象の額とされたからです。2、3 日間働いて、5 倍のまとまったお金をもらって、そのお金掛ける何パーセントが年金になり、大きな額をもらっている人たちがいました。

しかし、ずっと働いていた方々というのは、現地にいた方々の 1 年間の年収を 1 カ月当たりに割り、法律上、1 カ月当たり 1 日 3 時間しか働いてはいけないことになっていますので、その 3 時間分の給料の額に掛ける何パーセントの年金になるというわけです。
○川野　プリピャチ時代に生活上の不満などはありましたか。
○リュドミラ　生活は全て良く、問題はなかったです。例えば、ダーチャを作るための土地をもらっていたり、車庫を作ったりということも可能でした。ただ、心のどこかに常に不安はありました。実際に、横に危ないものが建っているという感覚はありましたから。

原発を設計したアレクサンドロフという学者は、「自分は原子炉の上に枕を置いて、そこで寝ることもできる」と、それぐらい安全だということを主張していました。
○川野　プリピャチはどんな町でしたか。
○リュドミラ　きれいな町です。小さくて快適で、森もあって、自然に囲まれて、非常にいい所でした。ただ、時々両親が遊びに来たときなどに、「生活はどうだ、慣れたか」といったことを聞かれたのですが、私の心の中には常に不安があって、ここはずっと生活する所ではなくて一時的に住む所だというようなことが頭の中にありました。
○川野　それは、やはり原発があるということで、そういうふうに考えられたんですか。
○リュドミラ　原発が非常に難しい技術によって進められていたというのは私も知っていま

した。私も専門家ではないので詳しくはありませんが、例えば、自動車などでも、ずっと運転していて突然故障することというのはあります。もしかしたら、人為的な、誰かが何かの間違いを起こして故障してしまう、ということも可能性として考えられます。やはり機械ですから、まったく壊れない理想的なものというのは存在しません。ですから、そのような原発に対する不安というのは、常に私にはありました。

○川野　プリピャチにいらっしゃるときから、そういうことを考えていらっしゃったのですか。

○リュドミラ　この話はするべきかどうか私は分からないのですが、事故の約半年前から、私は原発が爆発する夢を見たり、心の中が重くなる嫌な感じになることが時々あって、主人からは「仕事で何か問題があったのか、それともどこか体調が悪いのか」というようなことを聞かれたことが何回もありました。

○川野　では、プリピャチにいらっしゃるときには、ずっとプリピャチという町にいるということは、あまり考えられなかったということですか。いつかはプリピャチを出て行こうと考えていらっしゃいましたか。

○リュドミラ　私が以前、警察で働いていたときに、同僚の女性の妹がタシケントにいると言っていました。私はそのときから、どこかの町でアパートを持っている人とアパートを交換して、違う所に移り住みたいと考えていたので、彼女にそういう話をしたところ、その同僚の妹が彼女に、アパートを交換してタシケントに来ないかと誘ったことがあったのです。しかし、その同僚は、タシケントでは 1966 年に大きな地震があったばかりだからタシケントのほうがよっぽど怖い、逆にあなたがプリピャチに来なさいと妹に言っていました。

　しかし私は、タシケントよりも、原発のすぐ近くにいる私たちの方がよほど危ないということを同僚に話しました。結局、同僚も彼女の妹もどこへも行かず、事故が起こって、その同僚はキエフの南のほうのキロボグラードにアパートをもらい、そちらに避難しました。同僚は私の住所を突き止めて手紙を書いてきました。それには、「あのときにあなたが言っていたとおりのことになった。そのことを非常によく私は思い出します」というようなことが書いてありました。

○川野　いろいろな方にお話を聞いても、プリピャチにいらっしゃる方が原発に関して、あまり不安を感じているといったようなお話は聞かないのですが、不安を感じている原発の安全性も含めて、お友達とお話をされるようなことはありましたか。

○リュドミラ　もちろん、そのような会話もよくありました。ただ、私のように不安を覚えていた人間は非常にまれでした。多くの人は、原発は安全なものだと信じていましたし、政策としても原発は安全だということを広めるプロパガンダのようなこともありましたので、みんな心配していなかったようです。

○川野　今の話は非常に興味深いですね。

　それでは、プリピャチにいらっしゃるときは、将来はプリピャチを出てどういったことをしたいと考えていらっしゃいましたか。

○リュドミラ　事故の半年ぐらい前から、私はプリピャチから出ることを本当に強く考え始め

ていました。私のおじがポルタバ州に住んでいたので、彼の所に連絡をしていました。

当時、アパートメントを売ることは許されていなくて、交換することのみが許されていました。そこで、おじが住んでいるポルタバでアパートメントを見つけて、そちらの方に交換で移り住みたいと思ったのです。本気で探して、実際に交換してくれる人を見つけたのですが、そのおじさんの奥さんがポルタバには来ないほうがいいと言いました。

ポルタバでは、食料に関しても、毎日行列に並ばなくてはならないほど品薄な状態で、大変だということでした。おじさんの奥さんからは、「プリピャチでは、そういうこともあまりないと聞いているから、ポルタバに来るのはやめたほうがいい」と言われたので、私は考え直しました。

○川野　分かりました。プリピャチにいらっしゃるころは当然お若いから、あまり自分の健康状態とかは考えられなかったのでしょうけれども、プリピャチ時代の健康に関して、今、思い出されることはありますか。

○リュドミラ　1982 年から、私も主人も少し体調がおかしいなと感じるようになりました。それは年のせいかなと考えていたのですが、後で分かったことは、1982 年に小規模な事故があって、町中を洗浄するような作業が行われたことがありました。当時の上層部は、それを隠そうとしたのですが、体調として少し悪くなったと感じました。

疲労とめまいを強く感じるようになりました。例えば、母の所に野良仕事を手伝いに行ったときなど、私よりも 20 歳年上の母よりも、私のほうが先に疲れてしまうような状況でした。

○川野　現在の健康はいかがですか。

○リュドミラ　悪いです。心臓の調子が悪いのと、めまいがします。あと血圧の問題があります。低かったり、高かったり、非常に不安定です。

○川野　お薬は飲まれていますか。

○リュドミラ　はい、飲んでいます。

○川野　ご主人のそういった病気も、ご自身の病気も、チェルノブイリ原発事故による影響だと考えていらっしゃいますか。

○リュドミラ　はい。私の健康状態と、両親が私と同じ年代のときの健康状態とを比べてみても、今の私の健康状態の方が、両親が私の歳だったときよりもはるかに悪いです。

例えば、主人の父は 75 歳まで生きて、母は 80 歳まで生きました。しかし、主人は 63 歳で亡くなっています。私の父は 78 年まで、うち 3 年は強制収容所にいましたが、母は 81 歳まで生きています。私が、あとどれぐらい生きられるか分かりません。

○川野　長生きしてください。

○リュドミラ　頑張ります。

○川野　少し大きな質問ですが、これまでのご自身の歴史を振り返って、原発事故のせいで自分の描いていた人生というのが変わってしまったと思われますか。

○リュドミラ　一番の影響は主人を亡くしたことですね。例えば、多くの物を失ったり、車が配給されなかった 4 年間など、それ以外にもかなり多くの心配をしましたが、やはり私の失っ

たなかで一番大きなものは、若いうちに主人を亡くしてしまったことです。主人は事故前までは、屈強な、頑丈な男性だったんです。

○川野　原発事故に関係する体験、あるいはご自身の思いや考え、そういったものを誰かにお話しされるようなことがありますか。

○リュドミラ　私は、原子力エネルギーには、原子力発電所には大反対です。もしかしたら、日本の頭のいい方々は、事故を防ぐ何かを開発できるかもしれませんが、私は絶対に完全に防ぐことはできないと考えています。

○川野　それは、事故に関わる体験から理解されたということですか。

○リュドミラ　私の人生経験からです。専門家ではないので詳しくは分かりませんが、でも、私は絶対に危ないものだと信じています。例えば、道端を歩いていても、道路を車が通っていて、車が数人の人間に対して危ないということはあるかもしれませんが、発電所に関していうと、数人という単位ではなくて、ほとんど地球規模の大きな危険を及ぼすものです。

私がその意見を言うと、私のことなんて、楽天的な反対の悲観主義者みたいな感じに言う人もいるかもしれませんが。

○川野　事故後の体験、事故に関わる体験。例えば避難したとか、そういった体験を誰かに話したことはありますか。

○リュドミラ　もちろんあります。例えば、私の言っていることが正しいという人もいれば、間違っているという人もいます。今の人間が電気を発明する前の時代に戻れないのと同じように、電気の力が必要だというのはよく分かります。しかし、今は代替エネルギーとして太陽電池なども発明されていますから、もしかしたら、原発に代わるものなども発明されるのではないでしょうか。

○川野　少し確認なのですが、原子力発電について、非常にネガティブだというお話でしたが、ウクライナは原子力の依存率が非常に高いですよね。そういった現状について、どう思われますか。

○リュドミラ　それはどのようなかたちで原子力エネルギーと戦っていけばいいかということですか。具体的にどういう意見を述べればいいのでしょうか。

○川野　リュドミラさんは原子力に関しては非常に否定的ですよね。しかし、原発でこれほどの事故を被ったウクライナの国民の中で、あまり原子力の是非については議論されていない。こういった現状について、どう思われますか。

○リュドミラ　私のように原発をネガティブに捉えている人間はもちろんいますし、原発の是非について話をする人もいます。しかし、実際に今の政府に対してもろ手を挙げて、反原発キャンペーンみたいなことができるような状況でもありません。

○川野　ウクライナの国民のどのぐらいが原発に賛成して、どのぐらいが反対しているかという、世論調査みたいなものは、これまであったのですか。

○リュドミラ　そのような調査がされたということは、私は一度も聞いたことがないです。

○川野　日本の場合、原発に対して賛成か、反対かといった世論調査は、2011 年 3 月 11 日ま

で、ほとんどしたことがありませんでした。
○リュドミラ　今現在はどうなんですか。
○川野　今現在は、反対が 60%ぐらい、賛成が 30%ぐらいです。
○リュドミラ　私の考えですが、今現在のウクライナ政府は、国民がどう考えているかということに、まったく興味がないと思います。ですから、そのような調査は一度も行われたことがないと思います。

毎年、チェルノブイリ原発事故が起きた 4 月 26 日にはいろいろな催し物がありまして、そのときにオーストリアから来たジャーナリストにインタビューを受けました。そのジャーナリストいわく、オーストリアには原発は 1 基もないと言っていました。オーストリアでも原発をつくろうという計画が上がって、80%ぐらいまで完成していたのですが、政府が国民の意見を聞いて、国民の方は原発に反対の意思表示をしたために、政府は、80%できていた原発の作業を中止して凍結したという話も聞きました。この話を聞いて、私は非常に感銘を受けました。国がまず国民の意見を聞いて、国民がノーと言った、そのことが実現されたということに非常に強い感銘を受けました。
○川野　日本の場合は誤解のないように言うと、これはたぶん、いわゆる民意というものです。国民の意見ということです。民意が仮に先ほど言ったように 60%が反対だとしても、今の日本の政府は原発をやめないと思います。今、日本には 50 基の原発があります。
○リュドミラ　それは全て稼働しているのですか。
○川野　稼働しているのは 1 基です。それ以外は今は止まっています。でも、いつか政府は動かしたいと思っています。原発にかかるいろいろな利権、あるいはそれで職を得ている人たちなど、いろいろな状況があるからです。あるいは原子力エネルギーの技術を海外に輸出したいという国の思惑もあるし、国としては基本的には推進する方向です。
○リュドミラ　日本の原子力エネルギーは、国のお金ではなくて、プライベートなお金で運営されているのでしょうか。
○川野　日本の原子力発電所は、基本的には電力会社がつくります。
○リュドミラ　それは国営ではなく、民間の会社ということですか。
○川野　民間会社です。でも、日本の電力は独占ですから、国が経営しているにも等しいですね。例えば、原発事故が起こったら、電力会社がその補償をする、ある一定額を超える補償に関しては国が補償するという法律が日本にあります。もし、国が補償しなければ、電力会社は原子力発電を使い続けるというのは、かなりリスクがあります。

例えば、今、福島第一原発事故の被災者に関して、月に 10 万円払っています。もし、この全てを電力会社が補償しなければならないということであれば、いくら電力会社でも、原子力には踏み切れないと思います。だから、この意味で、原子力は日本の場合は国策なんです。3 月 11 日まで、日本の電力供給源の約 20%が原子力発電でした。京都大学原子力実験所の今中先生の計算だと、もしこの 20%が無くなったら、1970 年代の生活に戻ってしまうということです。

日本人は、今後考えて、いろいろ選択しなければならないということになると思います。そもそも、私がこの研究を始めた最大の理由は、もし、ひとたび事故が起こったら、チェルノブイリのように皆さんのような被災者が出る可能性があるということも含めて、日本人が原発について議論しなければならないと思ったからです。このことを議論しないことが嫌だったんです。今、だいたい福島では 15 万人が避難しています。今から補償問題に関して議論します。

○リュドミラ　福島原発事故からもう 2 年もたったのに、今からなんですか。

○川野　今から本格的に議論します。

○リュドミラ　本当に心から同情します。

○川野　それに関してですが、チェルノブイリ原発事故の被災者の方々の補償の内容を教えてください。

○リュドミラ　私は 4 人家族だったのですが、私と主人で 4,000 ルーブルずつ、そして子どもが 2 人で 2,000 ルーブルで、全部で 10,000 ルーブルをもらいました。

○川野　その金額をもらったのは 1 回だけですか。

○リュドミラ　1 回だけです。それは避難先での家具であったり、食器であったり、そういう生活に必要なものを揃えるためのお金ということで頂きました。

○川野　それについては初めて聞きました。現在の補償はいかがですか。

○リュドミラ　1991 年、ソ連時代につくられたチェルノブイリ被災者を保護する法律はあります。法律自体はきちんとした、しっかりした内容ですが、それがまったく遵守されていない状況です。

例えば、年金なども不当な掛け率で計算されていたり、食料費ということで、1 カ月当たり一人 150 グリブナーが出ていますが、本当に小さい額です。健康状態を改善するための健康治療のお金という名目で、サナトリウム、保養所で保養する保養権のためのお金ということで、年に 75 グリブナー出ていますが、今現在、サナトリウムに行こうとすると、1 回だいたい 3,500 グリブナーはかかります。ですから、75 グリブナーなんて、本当に笑いが出るような金額です。

法律上、事故処理作業者で障害者の方には、例えば自動車なども無償で与えられなければならないという決まりもあるのですが、主人は 1993 年に障害者の資格を受け取って、実際に車を受け取ることができたのは 2006 年でした。13 年待ち続けたことになります。それでも、本当に運が良かったと考えていいと思います。長いこと待ち続けていたので、本当に運よくもらえたと思っています。

○川野　では、現在、チェルノブイリの被災者としてもらっているものは、1 カ月の食料費の補助の 150 グリブナーだけですか。

○リュドミラ　それだけです。私は年に 2,000 グリブナー程度もらっているという話をしましたが、あれは私が働いていたからもらえている年金です。それとは別に、年金の最低額というのがあって、最低の年金額の 5%ぐらいを一応、事故処理作業者ということで加えてもらっています。

○川野　なるほど。

○リュドミラ　確か最低年金額が 850 グリブナーだったと思います。事故処理作業者として増額されているのが 5%ではなく、仮に 10%ぐらいだとしても、85 グリブナーとして、ざっくり約 2,000 というところでしょうか。

すみません、今現在は 2,000 グリブナーをもらっています。私は仕事をたくさんしていたので、少し多めにもらっていますが、例えばタマーラさん（ゼムリャキスタッフ）であったり、ドーニャさん(ゼムリャキスタッフ)であったり、スタッフの方々など多くの方々は、月に 1,000 グリブナーぐらい受け取っています。最低年金の金額よりも、少し多いぐらいの方々が多いです。

○川野　先ほどの 5%加えてもらっているというのは、どういった名目ですか。

○通訳　5%というのは、最低年金額の 850 グリブナーに、約 5%から 10%ぐらいの額を、事故処理作業にあたったということでもらっているそうです。

○リュドミラ　その 5%から 10%をもらっているのは、強制移住させられた方々です。

○川野　障害認定がされれば、プラスアルファであるということですか。

○リュドミラ　はい、そうです。第 1 カテゴリーの障害者に認定された方は、法律上は 5,000 グリブナーぐらいもらう権利があるそうです。私たちは何度も裁判所に訴えて、実際に裁判で勝ってはいますが、国はいずれにしても不当な計算方法をして、きちんとした法律上にある額を支払おうとしません。

○川野　国は法律で定めている 5,000 グリブナーに対して、実際はどれぐらい払っているんですか。

○リュドミラ　だいたい、その約半分の 2,500 グリブナーくらいです。

○川野　それは第 1 カテゴリーの方に対する金額ですか。

○リュドミラ　そうです。事故処理作業の障害者ということです。実際にタマーラと私は、一緒に裁判所に裁判を起こしたことがあります。裁判所から勝訴の通知が来たのですが、勝ったにもかかわらず、私たちはまったく規定どおりのお金をもらえませんでした。その後、裁判所からは「お金を払う基金に財源が無いから、無い袖は振れない」と言われました。なおかつ裁判所のほうも、それを支払うように強制をさせることができないということでした。

○川野　先ほど、ご主人は第 2 カテゴリーだったということですか。

○リュドミラ　主人は第 1 カテゴリーでした。障害者は第 2 グループ障害者で、事故処理作業者は第 1 カテゴリーでした。

○川野　でも、ご主人は 1,200 グリブナーしかもらっていなかったのではないですか。

○リュドミラ　はい、2009 年の段階で、1,200 グリブナーしかもらっていませんでした。

○川野　では、2,500 グリブナーもらっている人もいるんですか。

○リュドミラ　そうですね。

○川野　では、もらっている人ともらっていない人がいるということですか。

○リュドミラ　はい、そうです。

○川野　それは不思議な補償ですね。

○リュドミラ　はい。それは 2009 年の段階での数字です。私自身もインフレなどで、1,200 グリブナーだったのが 2,000 グリブナーになりました。2009 年当時は 1,200 グリブナーでしたが、今は 2,000 グリブナーもらっています。ですから、もしかしたら、私の主人も今生きていれば、1,200 グリブナーではなくて 2,500 グリブナーぐらいもらっているのかもしれません。

2009 年の段階で、主人は最低でも 3,500 グリブナーはもらう権利があったのですが、実際には 1,200 しかもらえませんでした。

○川野　先ほど、福島第一原発事故で 15 万人が避難生活をしているという話をしましたが、チェルノブイリの被災者としての経験から、福島の被災者にどういった補償があればいいとお考えになりますか。

○リュドミラ　何よりもまず住居、そして彼らが無くした物を購入するためのお金が必要と考えます。

○川野　健康診断とか、そういったものは必要だと思いますか。

○リュドミラ　もちろん必要だと思います。ウクライナでは法律上は無料で治療を受けられる権利があるのですが、実際に国が被災者に割く予算は非常に少ないので、その限られた予算で、事故処理作業者や被災者の治療費を全て賄えるわけではありません。私たちは必要な治療のとき、自分たちで薬を購入して治療に行きます。

○川野　こちらでは、無料の健康診断はどれぐらいの頻度でありますか。

○リュドミラ　必ず必要な、強制的に行われるものというのはまったくありません。チェルノブイリ病院と呼ばれている病院が二つほどあるのですが、その病院に行っても、「国からの予算が無いから、自分たちで薬や注射器、包帯などを買って来てくれ」と言われます。

○川野　分かりました。最後に一つだけ確認させてください。リュドミラさんは、なぜ原発に反対なのですか。

○リュドミラ　まず健康に悪いからです。

○川野　事故が起こったときにということですね。

○リュドミラ　そうですね。事故が起こったときに健康に与える影響も大きいですし、危険です。チェルノブイリ、福島、これが最後ではないです。絶対にこれから先も繰り返されます。私はそう思います。もちろん、起こらないことを祈ってはいますが。

○川野　私もそう思います。今日は大変貴重なお話をありがとうございました。

ツィブリスカヤ・タチアナ氏（女性）
2013 年 3 月 26 日実施　通訳：五代氏

インタビュー風景　タチアナさん

○川野　それでは、本日お二人目の聞き取りを始めたいと思います。今日はお忙しい中、ありがとうございました。

ご承知のように、私たちは 2009 年から、こういった聞き取りをしています。チェルノブイリの原発事故というのは何なのかということを、実際に被災に遭った方々からお話を聞くことによって考えるというのが、この研究の目的でした。

福島第一原発事故が起こるまで、日本には 54 基の原発がありました。そういった原発の状況を考えて、私たちはチェルノブイリから何を考えなければいけないのか、何を学ばなければいけないのかという当初の目的だったわけです。でも、残念ながら福島が起こってしまい、今やチェルノブイリから福島を、福島からチェルノブイリを考えるというのが、この研究の主な目的となっています。

皆さんからお聞きした貴重な体験を、こういった報告書にまとめています。これは 2010 年までの 10 人分の聞き取りの内容をまとめたものです。次は、また 10 人で形としてまとめたいと思っています。これはテレビ、新聞等々で取り上げられました。できれば、次は商業出版をしたいと思っています。多くの日本人が関心を持って、本が売れれば、印税等々、そちらの方に寄付できると思います。細かいことについては、まだよく分かりませんが、そうできればと思っています。

○タチアナ　売れることをお祈りします。

○川野　今日、今からお伺いする内容を、論文等で引用したり、報告書に名前と写真を公開する可能性がありますが、ご了解をいただけますか。

○タチアナ　大丈夫です。

○川野　ありがとうございます。

では早速、聞き取りを始めたいと思います。まず、氏名、生年、人種宗教、最終学歴について教えてください。

○タチアナ　ツィブリスカヤ・タチアナ、女性です。1952 年 11 月 1 日生まれで、60 歳です。ウクライナ人で、宗教はウクライナ正教です。高等専門学校卒です。専門は通信関係です。通信関係用の機械を作製する専門です。通信関係用の機械というのは、例えば、軍事用のラジオ機器などのことで、もっと具体的に言えば、宇宙ロケットや潜水艦などに使われる様々な通信機器のことです。

○川野　分かりました。続いて、出生、居住歴、職歴、誕生から現在までの概要を教えていただければと思います。

○タチアナ　1952 年にチェルニーゴフ州のノブゴロドーセーベルスキー地区の中のマメーキノ村で生まれました。

○川野　ノブゴロドーセーベルスキー地区というのは、どの辺にあるんですか。

○タチアナ　ウクライナの一番北に位置しています。

○川野　ロシアとの国境ですか。

○タチアナ　はい。ロシアのブリャンスキー州と国境が接しています。

○川野　このチェルニーゴフ州の今の村は、現在も同じ名前ですか。

○タチアナ　はい、今も同じ名前です。人口はそんなに多くありませんが、ノブゴロドーセーベルスキー地区もマネーキノ村も現存しています。私の親族はもう誰もそこには住んでいませんが。

1970 年に、マネーキノ村の隣にある、スミャチ村の中学校を卒業して、それからチェルニーゴフ市のラジオ工場で働き始めました。チェルニーゴフラジオ機器工場だったのですが、普通の一般に聞くラジオではなくて、軍事用の通信機器の工場です。普通のラジオも製造していましたが、主に軍事用のものを作っていました。1974 年まで、そこで働いていました。

○川野　1952 年に生まれて、1970 年に中学校を卒業したということは、18 歳ではないですか。

○通訳　彼女は中学校と言いましたが、日本でいえば高校 2 年生ですね。

○タチアナ　18 歳の時に卒業しました。

○川野　それは高校を卒業したのですか。

○通訳　こちらの教育は 11 年一貫教育ですが、彼女は 10 年生で卒業したそうです。

○タチアナ　1971 年から 1974 年までは、ラジオ工場で働きながら、夜間の高等専門学校で勉強しました。夜間学部です。1974 年にキエフに行き、そこで結婚しました。1974 年から 1976 年までキエフにいました。1975 年に息子が生まれて、1976 年にプリピャチに向かいました。

1976 年から 1986 年までプリピャチに住んでおり、チェルノブイリで働いていましたが、初めの 1 年半はチェルノブイリ市の中にアパートメントを借りていました。

○川野　ちょっと確認です。1976 年にプリピャチに行かれた理由は何ですか。

○タチアナ　私がプリピャチに行った主な理由は、住居の問題です。キエフでは、主人と 2 人で寮に住んでいました。ずっとアパートメントの配給を待っていたのですが、いつまで経ってももらえませんでした。チェルノブイリで働くとすぐにもらえるということを聞いて、主人と一緒に行くことにしました。

主人は運転手で、キエフでは、町中の運転手をしていましたが、その後、町と町との間を走る長距離バスの運転手として働いていました。プリピャチに移ってからは、運転手ではなく、クレーンの操縦者として働きました。

○川野　ご主人は 1986 年まで、ずっとクレーンの運転手をされていたのですか。

○タチアナ　ええ。

○川野　タチアナさんは、プリピャチ滞在中はどういったお仕事をされていましたか。
○タチアナ　プリピャチに行った当時は、まだ息子が小さかったのですぐには働きませんでしたが、その後、いろいろな仕事はしました。例えば、建築関係の仕事も半年間しましたし、子どもを幼稚園に入れてもらうために保母の仕事もしました。1978 年、プリピャチにアパートをもらい、1979 年には娘が生まれました。
○川野　ということは、2 年間はチェルノブイリ市のアパートに住んでいらしたんですね。
○通訳　1 年半ですね。
○川野　娘さんが生まれた後は、お仕事はどうされましたか。
○タチアナ　娘が生まれてすぐは、しばらく仕事はしませんでした。1981 年の初めから、プリピャチにあったラジオ工場で仕事を始めました。キエフのラジオ工場の分署で、大きな工場でした。「ジュピター」という名前の工場でした。
　私は、そこでラジオ機器の製造過程の検査役、つまり出来上がった機械がきちんと動くかどうかを検査する仕事をしていました。
○川野　そのお仕事は 1986 年に原発事故が起こるまで続けられたのですね。
○タチアナ　はい。
○川野　原発事故当時のお話は、また後ほどお聞きします。1986 年以降、キエフに住まわれるまで、キエフに住んで以後の居住歴を教えてください。
○タチアナ　まず列車でチェルニーゴフに避難しました。チェルニーゴフにはいとこが住んでいましたので、休暇に行くような感覚で行きました。
○川野　4 月 26 日に原発事故があったわけですが、いつ列車でチェルニーゴフに行かれたんですか。
○タチアナ　27 日です。私たちは、バスではなく列車で行きました。娘が非常に乗り物酔いをするので、プリピャチをずっと歩いて横切って、赤い森の所まで行って、ヤノフという名前の駅まで行って、そこで 14 時から 17 時半まで列車を待ち、そこからチェルニーゴフに向かいました。これが私たちの大きな間違いでした。
○川野　ちょっと確認させてください。ヤノフ駅まで、どのぐらい歩かれたんですか。
○タチアナ　家からヤノフ駅まで、約 15 分から 20 分ぐらいでした。
○川野　列車で避難したという人たちは、タチアナさん以外にもたくさんいましたか。
○タチアナ　私たちが乗り込んだ列車は、スタンダードなディーゼルの車両でした。何両編成だったか覚えていませんが、とにかく人でいっぱいでした。まずは子どもがいる女性が優先的に乗せられて、それから男性が乗せられました。私は子どもと一緒に車両に乗りましたが、主人は別の車両に乗りました。
○川野　それは大変興味深い話ですね。いろいろな方にお聞きすると、いろいろな避難の形態があるのですが、基本的には正午にラジオ放送があって、バスで避難した、あるいは個人の車で避難したという話を聞いていました。バスが 1,100 台か 1,200 台か来て、バスが連なっている写真も見たことがありますし、列車に乗り込む写真も見たことがあります。しかし、その列

車に乗り込む人の話を聞いたのは初めてです。バスのように列車も次々とやってきたのですか。
○タチアナ　その列車は、最初で最後の列車でした。1回しか来ませんでした。バスは主にキエフ州の方面、パリエスカとかイヴァンコフの方面に向けて行きました。列車は、そこに行かなかった残った人で、チェルニーゴフの方向に行く方々を乗せて出ました。
○川野　満席でしたか。
○タチアナ　全員が座れないぐらい、立ち乗りの人もいるぐらいいっぱいでした。その列車は、普段からチェルニーゴフとプリピャチの間を定期的に運行しているディーゼル車でしたが、「チェルニーゴフ・プリピャチ間」の便ではなくて、「チェルニーゴフ・ヤノフ間」という便でした。私たち乗り込んだ駅の名前がヤノフという駅でした。
○川野　分かりました。距離的に言えば、ここがプリピャチ、ここがチェルノブイリ、ここが４キロぐらいとすれば、チェルニーゴフというのはどの辺りですか。
○タチアナ　例えば、これをチェルノブイリの原発、これをプリピャチとすると、ここが赤い森の近くのヤノフの駅です。はっきり分かりませんが、だいたいここから70、80、100キロ、それぐらいではないかと。
○川野　北東のほうに。
○通訳　地図を見れば一発で分かると思うのですが。
○川野　70、80、100キロメートルぐらい離れていると。
○タチアナ　約70キロメートルから80キロメートルぐらいです。
○川野　方向的には北東ということですね。
○タチアナ　北東または東の方ですね。北北東と言ってもいいと思います。その流れているドニプロ川を渡ってすぐの所、渡った対岸はチェルニーゴフ州ですので、そんなに遠くはありません。
○川野　27日の正午にラジオ放送で、「3日分の食事、服などを持って避難するように」という放送があったと思います。それに従って列車に乗り込んだ時には、3日間ぐらいの食料と衣服、それだけ持って行かれましたか。
○タチアナ　私たち家族も、他の人と同じように、ラジオの指示通りに行動しました。ただ、私たちは親戚の所に行くつもりだったので、食べ物は他の人よりは少なめに持って行きました。お客として行くような感じでしたから。服はスポーティーな服を着て出ましたが、その直後には5月のお祭り、メーデーが控えていたので、少しいい服、例えば自分のドレスであったり、子どもたちのきれいな服であったりというものを持って行きました。
○川野　その時に何か、大切な物などは持って行きましたか。
○タチアナ　お金以外は特に持って行きませんでした。まだ私たちは若かったので、そんなに貴重なものも持っていませんでしたし。
○川野　分かりました。チェルニーゴフに到着して以降、どのぐらい滞在されたか、その後の経緯を教えていただければと思います。
○タチアナ　27日にチェルニーゴフへ着いたのですが、駅では出迎えや除染作業もされずに、

直接そのままいとこの家に向かいました。ですが、私も多少放射線に関する知識はあったので、着ていたものは全てしっかりと洗濯に回しましたし、靴もきちんときれいに拭きました。体ももちろんきれいに洗いました。

○川野　チェルニーゴフには何日ぐらいいらっしゃったのですか。

○タチアナ　3 日間滞在して、その後は母の実家であるノブゴロドーセーベルスキーに向かいました。6 月半ばまで、そこにいました。その間、私は保母として 1 カ月半働きました。主人は病院に入院しました。娘は、私が働いていた幼稚園に通っていました。息子は小学校に通っていました。

○川野　ご主人は、どちらの病院に入院されたんですか。

○タチアナ　主人は地区病院に運ばれましたが、そこでの診断はアレルギーということでした。体中が腫れて、リンパなども腫れて、その時には原因は分からなかったのですが、今考えると放射線の影響だったかもしれません。

どうやって主人を見つけたのかは分かりませんが、主人が病院にいる間にも、事故処理作業に参加するように電報が送られてきました。主人は病院に入院して治療をしていましたので、「行くことはできない」という電報を打ち返したところ、「本当に病院に入院しているということを医者に証明させろ」というような電報のやりとりが何度かありました。主人は 6 月 12 日頃に病院を退院して、たしか 6 月 15 日から事故処理作業に戻りました。

○川野　その後の経緯を教えてください。

○タチアナ　主人は 7 月 1 日まで 15 日間事故処理作業にあたりました。その対価として、私と子どもたちは保養の権利をもらい、クリミヤのエフパトリアへ保養に行きました。そこには約 2 カ月、9 月頃までいました。主人は 2 週間チェルノブイリで働いて、次の 2 週間はクリミヤまでやってきて、そこで家族と一緒に過ごして、またチェルノブイリまで行って働いて、またクリミヤに来るということを 2 カ月繰り返しました。

○通訳　チェルノブイリからクリミヤまではものすごい距離ですが。

○川野　その 2 カ月が終わった後はどうされたんですか。

○タチアナ　9 月には子どもたちと一緒にノブゴロドーセーベルスキーに戻りました。主人は、同じように 2 週間作業をして、というような勤務形態で、原発とノブゴロドーセーベルスキーの間を往復していました。そして、10 月にキエフにアパートメントをもらいました。

○川野　そのアパートには、今も住んでいらっしゃいますか。

○タチアナ　はい。

○川野　キエフにアパートをもらった 10 月以降も、ご主人はやはり 2 週間でチェルノブイリと行ったり来たりという作業をずっとされていたのですか。

○タチアナ　はい、そうです。1999 年まで、2 週間事故処理作業に行って、2 週間私たちのもとへ帰ってきて、という仕事をずっと続けました。

○川野　その間、タチアナさんはキエフで仕事をされましたか。

○タチアナ　1987 年から 1991 年まで、キエフにある「マヤーク」という名前の工場で働いて

いました。その工場では、家電製品や特別な機械を作っていました。私はそこでも同じように、通信機器の検査の仕事をしていました。

○川野　1991 年以降、お仕事はどうされていましたか。

○タチアナ　1991 年以降、私は働いていません。

○川野　ゼムリャキには、いつから、こういったかたちで関わっていらっしゃるんですか。

○タチアナ　1999 年、もしかしたら 2000 年かもしれません。はっきりとは覚えていませんが、もうだいぶ前からです。

○川野　プリピャチを離れる時の家族の構成と状況を教えてください。

○タチアナ　私と主人と息子と娘の 4 人家族でした。息子が 1975 年生まれ、娘は 1979 年生まれです。

○川野　今、皆さん、お元気ですか。

○通訳　ご主人は亡くなられていますね。

○川野　何年に亡くなられていますか。

○タチアナ　主人は 2006 年に亡くなりました。息子は私たちの家の近くに住んでいて、子どもが 2 人います。娘は私と一緒に住んでいます。

○川野　失礼ですが、ご主人はどういった原因で亡くなりましたか。

○タチアナ　公式な診断は心筋梗塞です。自動操縦のクレーン操縦中に心筋梗塞になり、そのクレーンはコントロールを失って倒れてしまって、まさにクレーンが倒れた場所にクレーンの操縦室があったため、主人はクレーンの下敷きになりました。救急車が来た時には、主人はもう亡くなっていました。

○川野　つらいことをお聞きしてすみません。

　では、1986 年 4 月 26 日以前のプリピャチ時代の話を少し聞かせてください。タチアナさんはプリピャチにアパートを求めて行かれたということですが、どんなアパートでしたか。

○タチアナ　3 部屋の 3DK のいいアパートをもらいました。

○川野　新しいアパートでしたか。

○タチアナ　新しいアパートで、私たちが住みやすいように中は手を入れて、家具も私たちで買い揃えました。

○川野　いろいろな方にお話を聞くと、多くの方は仕事を求めてプリピャチに行かれるのですが、タチアナさんの場合はアパートの配給を目的にプリピャチに行かれたんですか。

○タチアナ　当時、仕事を見つけるのはそんなに難しくなかったです。私も主人もキエフで仕事は持っていましたし。ただ、アパートメントをもらうためには、ものすごく時間が必要でした。

　1976 年まで私たち夫婦と一緒に寮に住んでいた人たちは、私たちが 1986 年にキエフに帰ってきた時もまだ順番待ちの状態で、寮に住んでいる人がたくさんいました。それぐらいアパートメントをもらうのは非常に大変だったんです。

○川野　プリピャチの印象は、どんな印象がありますか。

○タチアナ　私の家族にとって、プリピャチでの時間はとても素晴らしい、人生で一番良かった時間でした。町自体とてもきれいで、若い人間が非常に多い町でした。友達もたくさんいましたし、町の周りの森もきれいで、私が住んでいた通りは、スポルチュールナ、スポーツという通りだったのですが、家の向かいにはプールがあって、子どもたちはプールに通ったりもしていました。

多くの友達が私たちの所に遊びに来て、一緒に森の中に行ったり、キノコを採ったりしていました。もし事故が起こらなかったら、私はずっとあそこに住み続けていたと思います。

○川野　では、プリピャチ時代は特に不満はなかったんですか。

○タチアナ　不満はまったくありませんでした。全て整っていました。例えば、スキーやスケートなどのスポーツの催し物もありました。他にも、近くにはドニプロ川が流れていましたから、ハイキングもあったりしました。そういった良い生活するための条件が全て揃っていました。当時の町の上層部、行政の人たちは非常にいい仕事をされていたと思います。

○川野　キエフはどうですか。避難後もそうですが、今のキエフについてはどうですか。

○タチアナ　比べるのは難しいです。キエフとプリピャチは随分違います。プリピャチは、よりコンパクトで、人と人の付き合いも、より近い感じでした。キエフでの生活は、私個人としては、大変ではあります。ですが、子どもたちにとっては、ある意味、いい面もあります。なぜなら、プリピャチには高等教育機関がなかったので、子どもたちは勉強するためにキエフまで出なければならなかったのですが、キエフには高等教育機関もありますから、子どもたちにとってはいいと思います。しかし、それは人それぞれ、いいと思う人もいれば、良くないと思う人もいます。

○川野　随分昔の話なので、覚えていらっしゃらないかもしれませんが、プリピャチ時代にもらっていたご夫婦の月収はどのぐらいありましたか。それは十分でしたか。

○タチアナ　私の給料は月によって多少ばらつきはあったのですが、1年間の平均を取ると、1カ月当たり 200 から 250 ルーブルぐらいでした。主人は 300 から 350 ルーブルぐらいでしたから、2人合わせて、月に 500 から 600 ルーブルぐらいでした。生活するには十分足りる額でした。

○川野　当時、1カ月どのぐらいのルーブルがあれば足りましたか。

○タチアナ　1カ月、ざっくりとですが、私の記憶では 20 ルーブルぐらいが公共料金、約 15 ルーブルを幼稚園に対して支払っていました。あと学校に払うお金とか、そういう最低限必要なお金で、約 100 ルーブルほど必要でした。それに加えて、食べ物、肉と牛乳が毎日食べられるような生活で、でも贅沢はしないで普通の生活をすれば、1カ月 300 から 350 ルーブルぐらいあれば生活はできていたと思います。

ただ、家具とかを買うためにはお金もたくさんかかりました。給料の支払いがいいということで、私の主人は 1985 年に家具を買うために 3 カ月ほど、ロシアの北のウォルゴツカエ州に建築の仕事をするために出稼ぎに行っていたことがあります。その間、発電所の仕事は辞めて、帰ってきてからまた再就職しました。

○川野　タチアナさんの家には、当時、車はありましたか。
○タチアナ　ありませんでした。家具だけではなく、車を買う目的も含めて、先ほど申し上げたように、3カ月から4カ月間、主人は出稼ぎに行ったのですが、車を買うまでには至りませんでした。
○川野　なるほど。今は年金で生活していらっしゃると思いますが、どのぐらいの年金がおありですか。
○タチアナ　1,045グリブナーです。これは私の純粋な仕事からの年金です。プリピャチにあった「ジュピター」というラジオ工場で働いていた時の給料を基に計算された金額です。
○川野　チェルノブイリの被災者としての補償というのは、これ以外にあるのですか。
○タチアナ　この年金とは別に、166グリブナーをチェルノブイリ被災者に対しての食料補助ということでもらっています。1年に1回75グリブナー、健康状態改善のための支援をもらいます。1年間で75グリブナーで健康にならなければならないんです。
○川野　たった1回ですか。
○タチアナ　はい、1年に1回です。
○川野　チェルノブイリの被災者に関する法律がありますよね。
○タチアナ　主人はチェルノブイリ事故が原因での心筋梗塞ということを証明する前に亡くなったので、私は主人が亡くなっても、主人の名前で受け取るべき補償は一切受け取っていません。
　主人は13年間事故処理作業にあたっていたにもかかわらず、私は一切、補償を受けていません。主人は突然亡くなってしまったので、病気との因果関係が証明できなかったからです。しかし私は、主人が亡くなった原因は、やはり長年にわたって事故処理作業にあたっていたからだと考えています。
○川野　タチアナさんが現在の生活に不満があるとすれば、どういうことですか。補償問題も含めて、どういった不満がありますか。
○タチアナ　健康の問題に関しての補償もないですし、治療も無償ではなくお金がかかります。そして、私たちの子どもたちも非常に体が弱って病気がちですし、事故処理作業にあたった方々のお孫さんなども非常に体が弱いにもかかわらず、まったく補償がありません。政府は私たちのことを忘れたがっています。
○川野　今現在のお住まいの広さを教えてください。
○タチアナ　プリピャチ時代のアパートよりは数平米小さいかもしれませんが、ほぼ同じと言っていいと思います。同じように3DKです。
○川野　先ほど、プリピャチ時代には、ずっとプリピャチに住むんだというようなことを考えていたというお話でしたが、その時代に将来の人生設計みたいなものがありましたか。
○タチアナ　ほかの皆と同じように、私たちも非常に若かったので、例えば、これから先、ダーチャを買いたいとか、特に家を建てたい、車を所有したいという希望をもちろん持っていました。そして、プリピャチを出るつもりはありませんでした。

主人が建築の仕事にも携わるようになったので、実際に自分たちで家をつくることができる可能性が本当にあったんです。

○川野　タチアナさん、その当時はダーチャはなかったのですか。

○タチアナ　はい、ダーチャを入手するには間に合いませんでした。

○川野　今、ダーチャというのは、どのぐらいの割合で持っているものですか。

○タチアナ　正直、難しいところですが、村に関して言うと、村の方々は皆さん自分の家を持っているし、土地も持っています。しかし、町に関していうと、皆が持っているわけではないですし、私は正直、ちょっと分かりません。

○川野　分かりました。今の話は余計な話ですので。

タチアナさんの現在の健康状態はいかがですか。

○タチアナ　年相応の健康状態だと思いますが、一番の問題は 20 年以上高血圧で、毎日薬を飲んでいます。私は今、薬なしでは生きていけません。

○川野　血圧は高いですか。

○タチアナ　ひどい時には上が 220、下が 110 とかです。だいたい 150 から 160 ぐらい、190 ぐらい行くこともありますが、それぐらいが通常です。

○川野　僕も血圧が高くて薬を飲んでいます。

○タチアナ　私と同じですね。

○川野　うちの父親も母親も血圧が高くて、血圧はかなり遺伝するんですね。

○タチアナ　私の母も脳卒中で亡くなりました。

○川野　お互いに気をつけましょう。

○タチアナ　私の母は 3 回脳卒中になっています。母は 1963 年に 1 回目の脳卒中になって、2010 年に 3 回目の脳卒中で亡くなりました。

○川野　私の祖父は 2 人とも脳卒中で亡くなっています。

○タチアナ　常に薬を服用しなければいけません。

○川野　今のタチアナさんの健康状態があまり良くないというのは、チェルノブイリ原発事故と関係があると思いますか。

○タチアナ　高血圧というのは、遺伝だけではなくて、事故後の非常に大変な精神状態も影響していると私は考えています。血圧も 1988 年ぐらいから高くなりだして、どれだけ食べても太らない、やせてしまう状態でした。

○川野　そういうものが、チェルノブイリ原発事故の影響だろうというふうに考えていらっしゃるのですね。

○タチアナ　放射線の影響、加えてストレスの影響があると思います。二度と帰ることができない、またゼロから全てをやり直さなければならないと分かった時、私たちはとても大きなストレスを感じました。

○川野　すごく大きな質問ですが、そういったことも含めて、原発事故というのは自分の人生に大きな影響を与えてしまったというふうに考えていらっしゃいますか。

○タチアナ　少なくとも私の家族にとっては大きな衝撃でした。大きな大きな変化をもたらしました。私たちが思い描いていた、希望していた人生、将来というのは来ませんでした。

健康状態も悪くなりましたし、子どもたちもキエフに来た当初は、本当に大変な思いをしました。息子は5年生だったのですが、ちょうど微妙な時期で、クラスの子どもたちとなじむのも非常に大変で、よくけんかなどもしました。また、キエフの子どもたちは、プリピャチから移ってきた子どもたちに対しての偏見が若干ありました。

主人は15日働いて15日帰ってくるような勤務態勢でしたし、私も仕事をしていたので家を空けていました。やはり主人が常にいないというのは、家族の中でも非常に大きな問題がありました。問題というのは、個人的な、家族に起こった私と子どもたちとの間の問題ですが。

○川野　子どもさんが学校になじめなかった、あるいは何らかの偏見などがあったということでしたが、原発事故の被災者ということで、タチアナさんご自身、あるいは家族が何らかの差別や偏見を受けた経験がありますか。

○タチアナ　私の家族に直接大きな問題があったわけではありませんが、子どもたちは学校で、初めの1年は嫌な思いをしたと思います。

この近くに学校が2校あって、その学校に多くのこちらに移住してきた家庭の子どもたちが入りました。学校側も状況を理解して、移住してきた子どもたちだけのグループ、そしてキエフにもともといた子どもたちだけのグループというふうに、混ざらないようにグループ分けをする工夫はされていました。

私自身も、あまり自分がプリピャチから来たということを言わないようにしていました。もし、それが分かったりすると、放射能がうつるのではないかというので、少し避けられたりということもありましたので。

○川野　アパートを配給する際に、地域住民と軋轢があったという話をよく聞くのですが、そういったことを経験されたことはありますか。

○タチアナ　実際におっしゃたようなことはありました。私の個人的な経験でもあります。主人の誕生日は10月29日で、私の誕生日が11月1日ですが、私たちの誕生日と、キエフにアパートをもらった引越祝いも兼ねて、キエフで一緒に働いていた友達などを集めてパーティーをして、6人ぐらい集まったのですが、そのパーティーの時に言われたのは、「私たちはずっとキエフで働いていたのにアパートをもらえていない。あなたたちはチェルノブイリに行って、きちんと原発のほうの管理をしないで、事故まで起こして、なおかつアパートメントまでもらっている」というようなことを、その場で言われました。

そのパーティには6人ぐらいの友人が集まりましたが、今も友達として残っているのは1人か2人だけです。

○川野　そのパーティーに集まったのは、どんな人ですか。

○タチアナ　家族ぐるみで付き合いがあった、主人や家族との友達です。キエフに帰ってきたので、以前仲良くしていた人たちと会おうと思ってパーティに誘ったんです。その人たちは、私たちがキエフから出て10年経ったその時点でも、まだ寮に住んでいた方々だったので、そ

ういったことを言ったのではないでしょうか。
○川野　なるほど。彼らはプリピャチの人たちではなかったのですね。
○タチアナ　キエフに帰ってきた私たちは、すぐにアパートメントをもらって、それまでずっと順番待ちをしていてもらえなかったキエフの人たちは、また順番が延びるということで、そういうやっかみが非常にありました。
　何に対してのやっかみなのか、私たちは本当にうらやましがられるような身分なのでしょうか。私たちは、これまで働いてきた全てのものをプリピャチに残して、なおかつ健康まで向こうに残してきたのに、私たちがこちらに来ると、そういう目で見られていました。
○川野　原発の事故の時とか、避難の様子とか、その後の避難のいろいろな体験を、日常的に思い出したり、夢の中で見たりすることがありますか。
○タチアナ　こちらに来て初めの1年間は、よくプリピャチのアパートメントに戻って生活している夢を見ていました。子どもたちもすごく帰りたがっていました。
○川野　今はあまり思い出しませんか。
○タチアナ　いつも行った場所、座っていた場所はよく思い出します。つらいのは家で一人でいるときなどです。本当につらいのは、一人でいて、「あの時のことを覚えている？」「あそこのことを覚えている？」と思い出話ができないことですね。そういう心の琴線に触れた場所に、今きています。
○川野　ありがとうございました。
○タチアナ　一番つらいのは、「あの時のことを覚えている？」という相手がいなくなることですね。
○通訳　恐らく、旦那さんのことをおっしゃっているんでしょうね。
○川野　少し福島の話をしたいと思います。
　今、福島で原発事故が起こって、約15万人が避難しています。
○タチアナ　私たちは世界中の誰よりも、福島の方々の苦しみがよく分かると思います。近い人たちを失った悲しみや、育った土地を出なければならなかったつらさ。
○川野　タチアナさんたちの経験からして、福島の人たちにどういった補償が考えられますか。
○タチアナ　一番大事なのは健康に関してしっかりと考えることです。考え得る最高レベルの医療システムで治療をしてあげる必要があると思います。もちろん、経済的な支援もそうですが、特に住居に関しては、以前生活していたものと同じサイズの住居を提供する必要があると思います。
○川野　日本は、きっとしないでしょうね。
○タチアナ　日本の原発は、民間の会社ですから非常に大変だと思います。チェルノブイリでも事故が起こりましたが、唯一不幸中の幸いが、ソ連という巨大な国が上に付いていたこと、そして世界中からの支援がありました。今の日本の一民間企業が起こした事故に比べると、われわれの状況は、まだましだったと思います。福島の方々は非常につらいと思います。
○川野　日本の場合、ちょっと難しいのですね。日本の場合は、一民間企業の事故ではあるの

ですが、原子力災害対策特別措置法という法律があって、国がある一定を補償するという法律があるんです。

○タチアナ　日本は、苦しんでいる人たちにまったく手を差し伸べないほど、貧しい国ではないと思いますので、きちんとしたことはされると思います。

○川野　恐らく、政府あるいは東京電力が出している補償額と、住民の希望との間に大きなギャップがあるのですね。これが問題なのでしょう。

○タチアナ　日本の一般の方々が希望する額と、政府の額に隔たりがあると言われましたが、われわれに関しては、われわれの希望すら聞かれることもなく、政府のほうが定めた一定の金額が一方的に支払われました。その額は、世帯主が 4,000 ルーブル、妻が 3,000 ルーブル、その他は子どもであろうが、おじいさん、おばあさんであろうが、一人当たり 1,500 ルーブルという金額でした。

例えば、10 人家族だったとしたら、主人が 4,000 ルーブル、妻が 3,000 ルーブル、あとは何人きょうだいであろうが、祖父、祖母が一緒にいようが、全ての人間は一人当たり 1,500 ルーブルという一定の額でした。

○川野　その金額が支払われたのは 1 回だけですか。

○タチアナ　はい。1 回だけ、事故後すぐにもらいました。先ほどの金額プラス、あともらえたのはアパートメントですね。しかし、そのお金というのも、例えば、私たち夫婦のように、その当時、35 歳から 40 歳ぐらいで長いこと生活していて、ある程度、家具などもしっかり入っているようなアパートを持った者も、結婚したばかりで部屋の中にはほとんど何もないような、子どもも 1 人か 2 人しかいないような若い家庭でも、額はまったく変わらず、多くのものを無くした私たちのような家庭でも、あまり多くのものを無くさなかった若い家庭でも、金額はみんな一律でした。

○川野　これは、すぐにもらったのですか。

○タチアナ　1986 年の秋ぐらいには、既にわれわれは新しい家具などをそのお金で買っていたので、その時にはもうもらっていました。ただ、12 年、13 年、ずっとプリピャチで新しいアパートをもらって、そこのアパートのためにつぎ込んできた額に比べると、まったく足りない額だったことは間違いないです。

○川野　先ほどタチアナさんのお話を聞いて、月収の話を聞きましたが、この金額というのは、1 年間の年収の額に匹敵するような額だと考えていいですか。

○タチアナ　はい、そうです。

○川野　日本の政府とまったく同じ考えですね。

○タチアナ　もしかしたら、それもチェルノブイリと同様の補償ということで、チェルノブイリの補償を参考にしたのかもしれませんね。

○川野　そうかもしれませんね。日本もだいたい 1 年と考えています。

○タチアナ　こちらで 1 年間の補償で被災地の方々は生活できたので、日本でも大丈夫だろうと考えているのではないでしょうか。

○川野　でも、タチアナさんのお話を聞くと、彼らは別に新しい住居が与えられるわけではないですので、それこそ一から全部生活を設計し直さなければいけない。
○タチアナ　その１年分の給料で住居が買えるわけではないですよね。
○川野　そうですね。仮の住居を与えようとはしています。
○タチアナ　テレビで見ましたが、車両のワゴンを積み上げたような感じの仮設ですよね。
○川野　そうです。
○タチアナ　私が良かったと思うのは、やはりソ連時代だったので、決定がものすごく早くて、行動も非常に早く行われて、それは良かったと思っています。

住居もかなり早く受け取ることができましたし、私たちのようにプリピャチの住民だけではなく、廃村になった村々の方々も、もしかしたら、自分が住んでいた家よりも簡素かもしれませんが、何もなかった土地に、突貫工事で作って、ある村丸ごとそこの方々を移住させて、その村を再現するようなかたちで家を建てたりしたところもありました。それは、まったく何もなかった所につくられていたり、もともとあった村の外れのほうに追加で建てられたというようなこともありました。

突貫工事だったので、もしかしたら冬は寒かったりということもあったかもしれませんが、それでも住居に関しては、きちんと補償はされていました。土地はたくさんありますから、野原にいろいろな建物を建てることは十分できましたので。
○川野　今、タチアナさんは旧ソ連時代の話をされましたが、旧ソ連時代は良かったですか。
○タチアナ　非常に面白い質問ですね。その当時は、生活に必要なものは全て供給されていました。ですから、すごくいいと感じていました。もちろん、外国にも行けなかったし、外の世界は知りませんでしたが、それでも生活にはすごく満足していました。

しかし、今になって考えてみると、必ずしも良かったのではないというのは感じます。特に私は軍事工場で働いていたので、仮にその軍事工場を辞めたとしても、辞めた後、最低３年間は海外に行くことを禁止されていました。

実際に、ラジオ工場、軍事部品なども作っていたところで働いていたので、そこで働く時には秘密保持契約書に署名をさせられました。非常に厳しい規律の下、作業をしていました。
○川野　私はカザフスタンに毎年行くのですが、そこでお年寄りの人たちといろいろ話をすると、旧ソ連時代は良かったという人が結構います。
○タチアナ　私もカザフスタンのバイコヌールには行ったことがあります。

私も旧ソ連時代は若かったですし、人間の付き合いなども今よりも随分密で、近くて、今よりも仲良く、そして明るかったような気がします。外に私たちよりもいい世界があるということを、まったく知り得る手段がありませんでした。

多くの人々が同じような生活レベルの下で生活していました。例えば一部の人間が、ほかの人たちの前で、すごく高価なものを見せるようなこともありませんでした。
○川野　最後に１点だけ教えてください。原子力発電について、どう思いますか。
○タチアナ　現在の立場から遠い将来を見ると、もしかしたら代替エネルギーみたいなものが

あるかもしれませんが、今現在は、残念ながら電力をたくさん消費しますし、バイコヌールでもロケットを発射するために原子力発射システムを使っていますし、それに代わる代替エネルギーがあればいいのですが、それはどんなものがあるのですか。太陽熱ですか。

○川野　太陽熱とか地熱とか、いろいろ考えられるものはあります。

○タチアナ　それ以外にも、もしかしたら何か将来発明されるかもしれませんが、現時点では残念ながら、それなしでは生活できません。

川野さんは、どう思いますか。

○川野　私は、もともとは原子力発電に対してネガティブでした。今もそうです。

○タチアナ　私も反対の立場ではあります。ただ、ほかに代替できるものがないんです。

○川野　僕がそもそも原発に関してネガティブだったのは、たった一つの理由なんです。日本人は原発に関して議論したことがないんです。

○タチアナ　それは、つくって、すぐに稼働で終わりと、そんな感じですか。

○川野　いえ、国策だからです。

○タチアナ　この国では、現在も人々に関して注意をはらっていないし、評価をしていない。人間のことを考えていない。人々に何が起ころうが、そんなことには興味を持っていない。

○川野　そうですね。まさにそこを議論して、その上で原発を使うか使わないかということを決めるべきだというふうに僕は考えています。

○タチアナ　上の人たちにとっては、電力をどんどんつくって、お金をもっと持てることが大事なのでしょう。

○川野　そうですね。今、日本には原発が 50 基あります。

○タチアナ　日本の国のサイズから考えると、ものすごく多いですね。

○川野　福島第一原発事故が起きる前は、20%から 24%ぐらいが原発でした。もし、これを使わなければ、日本は 1970 年代の生活に戻ると考えられます。

○タチアナ　ウクライナに関していうと、今現在すら、おそらくこの 1970 年代か、その前ぐらいのもっと古い年代ではないでしょうか。もし、原発を全部止めてしまうと、革命前、20 世紀初頭ぐらいに戻るのではないでしょうか。

○川野　ただ、今、日本は 1 基しか動いていません。だから、いろいろな選択肢を今から人間が考えなければいけないのですが、原発は光と影があると思います。いい部分と悪い部分があるんですね。その影の部分というのは、例えばタチアナさんたちとか福島の住民たちですよね。そういった被害があるということ。だから、そこから目を背けて原発を使うことが僕は嫌なんです。

○タチアナ　政府にいる人たちも、同じ人間である一般の人たちに対して、どうしてそのような対応をするんでしょうか。同じ人間として親身になって見ることができないのでしょうか。

○川野　今日は大変貴重な話をありがとうございました。途中でいろいろつらい思い出とか思い出させてしまって申し訳ありませんでした。ただし、僕は強い信念があります。タチアナさんたちの声というのは、次の世代に絶対に残さなければいけないと思っています。人類は、チ

ェルノブイリを忘れてはいけないし、福島も忘れてはいけないというふうに思っています。
○タチアナ　次の世代、その先の世代、これから先もずっと忘れられず受け継がれていくようにすることが必要です。
○川野　福島第一原発事故以降、ゼムリャキは忙しくなったのではないですか。
○タチアナ　事故後、非常に多かったです。数人のグループ、もう少し大きい人数のグループとかありましたが、40 人ぐらいのグループが来たこともありました。そこで「事故後どのように生活されたのですか」というような質問がありました。

例えば、場合によっては数日おきに日本人が訪れたり、毎週のように訪れたりということもありました。訪れた彼らが私たちに質問するというのも、非常に簡単な質問で、例えば事故が起こって避難をする時に、どんなものを着て避難したかとか、避難しても靴を洗わなければいけないとか、服を洗わなければいけない、除染しなければいけないというようなことを私たちが教えただけで、すごく感激していました。そんな簡単なことも、日本の方々には伝えられていなかったのかと驚きました。

私たちは、チェルノブイリ原発事故を経験して、ここまで生きてきた人間ですので、福島で被災されてきた方々にとっては、抱き合って、温かい言葉を一言一言かけられただけで非常にうれしかったのではないでしょうか。
○川野　そうですね。
○タチアナ　私と同じ年ぐらいの女性が来た時に、私たちはお互いに涙を流して話をしたのですが、彼女自身も、私たちが事故後、どうやって生活したのかということに非常に興味があったようでした。
○川野　ありがとうございました。大変貴重はお話でした。しっかりと報告書をまとめて、世に送り出したいと思っています。
○タチアナ　私は普通の楽天主義者です。私の声がどれだけ役に立つか分かりませんが。
○川野　いえ、役に立ちます。
○タチアナ　私は公式な代表でもないので、正確な数字とかを申し上げることはできませんが。
○川野　また、必要なところは調べますが、どうか健康に気をつけられて、血圧とかにも気をつけられて長生きをしてください。

ノーサチ・ガリーナ・ニコラェブナ氏（女性）
2013 年 9 月 15 日実施　通訳：五代氏

インタビュー風景　ニコラェブナさん

○川野　9 月 15 日、お一人目の聞き取りを始めたいと思います。

今回は、プリピャチ時代のお話を含めて、いろいろお話をお聞きしたいと思っています。われわれは 2009 年からこういった聞き取りをしていまして、その結果、こういう本にまとめています。皆さんの記録は重要な資料としてまとめさせていただいて、個人名も含めて公開することを考えていますがよろしいでしょうか。

○ニコラェブナ　大丈夫です。写真も撮っていただいて構いません。

○川野　ありがとうございます。では、よろしくお願いします。まず、生年月日、人種、宗教を教えてください。

○ニコラェブナ　1953 年 4 月 1 日生まれで 60 歳です。ウクライナ人です。私が通っている教会はロシア語で行うソ連時代からのロシア正教です。

神様は一人ですから、どこの教会に行こうが差はないと思います。私は家の近くにあるロシア正教の教会に通っています。ウクライナ正教の教会に通うこともありますが、一番近い所にあるのがロシア正教ですので。

○川野　わかりました。では、最終学歴について教えてください。

○ニコラェブナ　キエフ文科大学を卒業しました。

○通訳　学士ですか、専門ですか。

○ニコラェブナ　私が卒業した時には、そういった学位のようなシステムがありませんでした。一応、高等教育は受けています。

○川野　キエフ文科大学というのは今もあるのですか。

○ニコラェブナ　はい。以前は単科大学だったのですが、今は名前が単科大学から一般の大学になって、現在も存在しています。

○川野　そこで何を勉強されたんですか。

○ニコラェブナ　専門は司書です。主に仕事は、プリピャチでは、初めは図書館の司書の仕事をしていましたが、その後は文化センターで働いていました。プリピャチでも文化センターの副館長として働いていました。

○川野　プリピャチ時代のことについては、また後で整理しましょう。続いて、出身地、居住

歴、職歴を教えてください。
○ニコラェブナ　ドネツク州（ウクライナ東部の州）のチャソフ・ヤルフという町で生まれました。ドネツクに 1956 年まで住んで、それからドニプロペトロウシク州（ウクライナの中央、ドニプロ川の中流に位置する）ペルヴォアイスクペルヴォアイスクに引っ越しました。そこで学校も卒業しました。当時の教育は 10 年だったので、ペルヴォアイスクの学校に 10 年間通いました。1970 年に卒業しました。

その後、クリブオイローグ州の首都クリボエ・ロクに移り、そこで働きました。ペルヴォアイスクで結婚をして、そこで娘が生まれて、1975 年か 1976 年ぐらいから約 3 年間、クリボエ・ロクで働いていました。

チェルノブイリの事故以降、非常に記憶が曖昧になっています。すごく記憶が悪くなっていて申し訳ありません。結婚したのはおそらく 1973 年だった思います。1973 年に娘が生まれたのは確かです。

クリボエ・ロクに 3 年ほどいたのですが、その後、主人がポルタバ州のコムサモーリスクナドニプレに異動になったので、そちらに移りました。主人もドニエツク州の工科大学を卒業して、専門は金属関係の技師です。
○川野　いつキエフ文科大学を卒業されたんですか。
○ニコラェブナ　通信大学のシステムを利用して、本来なら 4 年で卒業するのですが、1973 年に出産したため 1 年延びて、1972 年から約 5 年間かけて卒業しました。
○川野　通信大学ということは、キエフ文科大学へは、実際に通う必要はないわけですね。
○ニコラェブナ　年に 2 回か 3 回試験期間があるので、その時はキエフに来ていました。その時には、私はもう図書館で働いていました。こちらでは、よくあることです。
○川野　その後はどうなさっていましたか。
○ニコラェブナ　先ほど、1973 年に子どもが生まれたという話をしましたが、間違いでした。娘が生まれたのは 1975 年です。その後、1981 年にプリピャチに行きましたが、その年に主人と離婚しました。主人は非常にお酒を飲む人でした。

そして、1982 年に再婚しました。1983 年に 2 人目の主人との間に子どもが生まれました。
○川野　プリピャチには、なぜ行かれたんですか。
○ニコラェブナ　先ほど申し上げたのは間違いで、プリピャチに来たのは 1981 年ではなくて、1982 年だったと思います。1982 年に私がプリピャチに来てすぐに、何らかの事故で原発から放射能が漏れたことがありました。その影響かどうかわかりませんが、私はそれから約 1 年半にわたって生理がありませんでした。ちなみに、ゼムリャキ代表のタマーラさんもその時のことを覚えていて、1982 年に放射能漏れがあった際には、髪の毛の状態が非常に悪くなったことがあったそうです。
○川野　少し話が戻りますが、1982 年にプリピャチに行かれたのはどういう理由ですか。
○ニコラェブナ　主人と離婚をしたときに住んでいたコムサモーリスクナドニプレという町は小さい町だったので、何もすることがありませんでした。そこで、姉が住んでいたプリピャ

チに、姉を頼っていきました。その当時、他の町のお店には、商品もほとんどなく、物の供給もままならないような状況でした。プリピャチに行ったところ、プリピャチには商品があふれていて、町も非常にきれいでしたから、そこをすぐに愛してしまって、そのまま残ることを決めました。

○川野　プリピャチでは、やはり司書をされていたのですか。

○ニコラェブナ　コムサモーリスクナドニプレでも、少し文化センターで仕事をしていました。その職歴をプリピャチで話したところ、プリピャチの文化センターが私を雇ってくれました。そこで働き続けて、最終的に副館長になりました。

○川野　1986 年に原発事故があります。その後のことを教えてください。

○ニコラェブナ　ちょうど事故当時、主人は 4 号炉のタービン部門で働いていました。事故があった日、交代の時間の関係で、夜の 12 時ごろに帰ってきました。そして、事故が起こったのは 1 時でした。

その時には、私と、前の主人との間に生まれた娘と、新しい主人の 3 人で、家族用の寮に住んでいました。本来なら 2 部屋のアパートメントをすぐにもらえる予定だったのですが、私が妊娠していたので、3 部屋のアパートメントを希望していました。1 年待った結果、5 月から 3 部屋のアパートメントが支給される予定でした。

しかし、結局そのアパートメントに住むことはありませんでした。その 5 月にはアパートメントと一緒にダーチャももらう予定でしたが、どちらにも住むことはありませんでした。

○川野　1986 年の原発事故以後、どういった経緯でキエフに来られたんですか。

○ニコラェブナ　主人は帰ってきて就寝しました。寮ですから、たくさんの家族が住んでいましたが、夜中に突然、非常にやかましくなりました。

家族全員が寝ていたのですが、私は非常に敏感な方なので、爆発の音をはっきり聞きました。それで軽く目が覚めたのですが、おそらく飛行機が上空を通った音だろうと思って、そのまま寝続けました。

その後、寮全体が騒がしくなりました。隣に住んでいた人は、住居を管轄する国の出先の人間でしたが、その人は夜中から道路を洗浄し始めました。そして、その人の奥様が私たちの部屋を訪ねてきました。その奥様はは「あなたのご主人はもう帰ってきている？」と尋ねました。彼女は、私の主人が 4 号炉で働いているということを知っていたので確認したのです。私が「もう帰ってきている」と答えると、「すごく運がいいよ」と言われました。その時に彼女から、4 号炉の方で大きな事故が起こったことを聞きました。

○川野　それは何時ごろですか。

○ニコラェブナ　朝の 4 時頃だったと思います。彼は町中の道を洗浄するための洗浄車に乗っていたので、その仕事にかり出されました。

○川野　朝の 4 時ですね。

○ニコラェブナ　はい、そうです。だいたいそのぐらいです。

私は主人を起こして、そういう事故が起こったと聞いたと伝えたのですが、主人は信じませ

んでした。主人が働いていた数時間前には、まったく問題のない状態でしたから。事故が起こる半年か1年前に買った車があったので、彼は車に乗って、実際に自分の目で確認するために原発に向かいました。

ちょうど彼が原発に向かっていた時間というのは、5時ごろで、少しずつ夜も明け始めていたので、原発に向かう途中、道路が黒煙で黒くなっているのが見えました。それで、彼は事故が本当に起こったことを知りました。

主人が原発に行く途中には、既に警察がいましたが、原発で働いている者が持っていた入構証みたいなものを見せたら通してくれました。そして原発に到着したのですが、煙が出ていて、そこら中が真っ黒になっていたそうです。彼はすぐに危険だということを察知して、家に帰ってきました。家に帰ってきても、彼は本当に暗い雰囲気で黙りこくっていて、「子どもたちを外に出すな」と言いました。

寮に住んでいた人々も早朝に起き出して、みんないろいろと話をし出したのですが、誰も正確な情報は持っていませんでした。皮肉なことに、まさにその事故があった前日、私たちは文化センターで防災訓練のようなものをやっていましたが、誰一人、その防災訓練のようには行動しませんでした。

○川野　ニコラェブナさんはどういった行動をされたんですか。

○ニコラェブナ　私は当時、文化センターで副館長として働いていましたので、文化センターの館長に電話をして、「いったい何が起こっているんですか」と聞いたところ、「パニックを起こすな」と一言だけ言われて電話を切られました。

その当時、町で一番偉かったのが町の共産党でしたので、共産党の事務所から情報を得ようと思い、電話をしたのですが、「なぜ、あなたはパニックを起こしているんだ」というようなことを言われました。さらに名前を聞かれたので、「名前を聞いてどうするのだ。私たちは今、寮に住んでいるけれど、寮はパニックになっている」ということを伝えました。

その当時、住んでいる寮のすぐ近くに病院があって、その中には産婦人科もありました。寮には子どもを産んだばかりの若い女性もたくさん住んでいましたので、みんな非常に心配になっていました。

それから、私はもう一度、文化センターの館長に電話をしました。ちょうど土日で多くの結婚式や子どもを集めて行うイベントが予定されていたのですが、私は主人が原発で働いていて、どれだけ危険な状況かというのは分かっていたので、「イベントは全て中止にしましょう」と言ったのですが、館長からは「全て予定どおり決行する」と言われました。

○川野　　最初に原発事故が起こった時に、まず何を考えましたか。

○ニコラェブナ　放射能には、においも色も何もないので、正直、私もどうしていいのか分かりませんでした。ただ、家の部屋の窓は原発から直線距離的に1.5キロぐらいしか離れておらず、原発の方に向いていました。私は直感的に、とにかく洗浄しようと思って、原発の方に向いていた窓の外側、内側、全てを洗浄しました。

その洗浄作業の時、キャミソールのような薄い服の上にガウンを羽織っていました。洗浄作

業を終えて、その服を洗濯しようと思って水につけると、水面に紫色のものが広がっていったのを覚えています。

○川野　放射能は体に悪いものだと知っていたのですね。

○ニコラェブナ　理論的には知っていたのですが、今ほどの知識はありませんでした。そして、上の娘に「学校に行くな」と言ったのですが、「いや、ほかのみんなも行っているから行く」と言ったので、子どもを学校に行かせました。下の子どもは、はっきり覚えてはいませんが、たしか行かせなかったと思います。

放射能についてしっかりとした知識を持っている教育のあるご家庭では、一切子どもを家から出さなかったということもありました。もし、私の家に主人がとどまっていれば、おそらく娘も家から出さなかったと思います。

○川野　事故の翌日に避難指示のラジオがありますね。その後の居住歴を確認させてください。

○ニコラェブナ　26 日、私は通常どおり仕事に行きました。そこで結婚式や子どものいろいろなイベントが行われました。唯一いつもと違ったのは、洗浄した泡が道にたくさん残っていました。私たちはそこで、一度洗浄したから大丈夫だろうと考えていて、いまだに放射能が出続けているとまでは考えもしませんでした。

寮の上の階に住んでいた人たちの中には、爆発した発電所をずっと見ていた方もいたそうです。例えば、私の知り合いで 5 階に住んでいた文化センターの同僚なども、上に上がって、夜中中、原発の方ををずっと見ていたそうです。楽しんで見ていたわけではないのですが、興味を持ってずっと見ていました。私は 1 階に住んでいたので、そういったことはしませんでしたが。

○川野　26 日未明に事故があって、26 日の朝からは通常の仕事をされたというわけですね。避難されたときは、ラジオで放送がありましたよね。

○ニコラェブナ　ラジオ放送があったのは、事故後 2 日目か 3 日目だったと思います。

○川野　そうですね、28 日に放送がありました。

○ニコラェブナ　28 日のことですが、放送で指示されたように、3 日間だけの避難ということを信じていました。必要最低限のものを持って、私は持っている服の中で一番きれいなものを着て出ました。冷蔵庫の中は 5 月のメーデーに向けて、たくさんの食べ物が用意してありました。

私たちは車を持っていましたので、バスで行くよりも車で行く方が早いと考えて、私の家族 4 人と姉の家族 3 人、合計 7 人が車に乗り込んでプリピャチを出発しました。私たちは車で出たのですが、約 3,000 台の車が町から一斉に出ようとしていましたので、歩く速度と同じぐらいの速度で本当にゆっくりと進みました。車内はとても暑かったのを覚えています。

私たちが車で町を出ようとした時は、町から一刻も早く出さなければいけないということで、途中で止められるようなこともありませんでした。ただ、私たちよりも早い時間に町を出ようとした人間は、まだ正式な決定が出る前だったので、途中で止められたり、町を出られなかったりした人もいたと聞きました。

○川野　車でどこに向かわれたんですか。
○ニコラェブナ　だいたい 700 から 800 キロ離れた母の所に向かいました。母はドニプロペトロウシク州のペルヴォアイスクに住んでいました。
○川野　お母様の所にはどのぐらい滞在されましたか。
○ニコラェブナ　私と主人は母の所に子どもたちを残して、すぐにチェルノブイリの方に戻りました。事故直後は、1 週間事故処理作業をして、次の 1 週間は汚染されていないゾーンに出る、というような交代勤務でした。その働く人たちが生活する居住区もつくられました。
　他にも、船が 12 隻ぐらい川に浮かべられて、そこも同様に事故処理作業にあたる方々のベースとして使われました。その船の中に文化センターの機能も移転されていたので、私はそこに来られたいろいろな訪問者や学者などを受け入れる仕事をしていました。
　主人は、たしか 1 号炉の方で、事故処理作業をしていました。
○川野　ご主人はチェルノブイリのタービンで働いていたわけですよね。ニコラェブナさんの方は、チェルノブイリの文化センターにいらっしゃったということでした。チェルノブイリには何年までいらっしゃったんですか。
○ニコラェブナ　私は先ほど申し上げた通り、船の上で働いていました。その後、事故処理作業者の受付みたいなものがつくられて、そちらに移りました。はっきりとは覚えていないのですが、その年の秋にチェルノブイリを離れたのは覚えています。私はモスクワに送られました。事故が起こって、本当に死にゆく多くの方々がモスクワの 6 番病院に送られていたので、そこの方々にアンケートを採って、今、親戚とかがどこにいるとか、どういう方々かというような情報を集めなければならなかったからです。
○川野　モスクワにどのぐらいいらっしゃったのですか。
○ニコラェブナ　モスクワにいたのは 1 週間ぐらいです。全員にアンケートを採って、必要な情報を集めて帰りました。
　すみません。それは、やはり事故処理作業者の方々が滞在していた所にいる間に起こった出来事で、その出張は秋までにありました。そして、チェルノブイリの事故処理作業をする方々のベースキャンプが少し離れた所にあって、また戻ってきました。
○川野　そこにいつまでいらっしゃったのですか。
○ニコラェブナ　10 月か 11 月にアパートメントをもらったので、キエフに移りました。キエフに移ってきてからも、私の仕事は文化センターからの出張のような仕事で、こちらの方々の精神的な支援をしていました。キエフの方々はプリピャチから来た方々を快くは受け入れようとしなかったので、そういう方々に余暇を提供するように集まって、クラブ活動などをして精神的なサポートをするのが私の仕事でした。キエフには、ハリコフスカエ地区とトレーシナ地区という 2 つの大きなベッドタウンがあって、そこに多くの方々が移住していました。
○川野　ご主人はキエフに来られた後も、やはりチェルノブイリの方に行かれて、ずっと仕事をされていたわけですか。
○ニコラェブナ　基本的に主人もキエフにいました。しかし、月曜日にキエフを出て、ジェロ

ネ・ムスという彼らのベースキャンプに行って、そこから原発の事故処理作業に行き、木曜日か金曜日ぐらいまで働いて、またキエフに帰ってくるというような勤務を続けていました。4日間働いて3日間休みというような勤務態勢であったり、または15日間ずっと向こうにいて、15日間ゾーン外にいるというようなかたちで主人は仕事を続けていました。

○川野　1986年にはキエフに来られたわけですね。

○ニコラェブナ　はい。たしか11月だったと思います。9月になって、子どもたちは学校に行かなければならなかったのですが、その時、まだ子どもたちは実家にいたので会いに行きました。私たちが実家にいる時に、ちょうど主人から電話があって、キエフにアパートメントをもらえるということを聞きました。

まさに、それを聞いたその時から、それまで止まっていた生理が始まりました。どれだけ精神的なストレスがホルモンに影響しているかということです。

○川野　1986年の秋にキエフに来られたわけですが、文化センターの仕事はいつまで継続されたのですか。

○ニコラェブナ　だいたい1、2年間くらいでしょうか。1993年から1995年まではチェルノブイリ市で働いていました。そこでいろいろな証明書を出したり、機関誌を出したりしていました。そこでは主に書類関係の仕事をしていて、例えば社会保障的な仕事や、役所でいろいろな書類を作ったりする、行政的な仕事をしていました。

そして、1995年にはキエフに戻ってきて、キエフでチェルノブイリ原発のキエフ代表部で働き始めました。

○川野　そのお仕事をいつまで続けられたのですか。

○ニコラェブナ　1998年まで私は原発のキエフ代表部で働いていました。そして1998年にその所長が変わったため、人員削減の対象になって辞めました。

それから、私は約3年ずっと仕事を探し続けていました。私には文化センターなどでの仕事の経験もあるので、こうした職歴は書類上、全て雇用の対象になるのですが、私がチェルノブイリの方から来たと言った途端に、どこも最終的には拒否されました。チェルノブイリの人間には、非常に手厚い補償が法律で約束されていたので、例えば住居や公共料金に関しても半額は自分たちで払うけれども、残りの半額は雇い主が払わなければならないという制度でしたから、彼らは私を雇うことを嫌がっていました。

ゼムリャキは1987年からあるのですが、ここももともとは私が出張でこちらにやってきて、こちらに移ってこられた方々の精神的な支えをつくるために組織をしたんです。当時、タマーラさんは文化センターのでいろいろなクラブ活動の管轄を担当していて、産休中だったのですが、それからほどなくして、私がタマーラさんを招待し、こちらで同様のクラブをつくろうということで意気投合して、このゼムリャキをつくりました。

○川野　3年間仕事を探されていたということですが、その後、仕事を得られたのですか。

○ニコラェブナ　結局、仕事は見つかりませんでした。正式な雇用ではなく、タマーラさんのお手伝いをするような仕事で収入は得ていました。それはオフィシャルな収入ではありません。

○川野　1986 年の避難時の家族構成を確認させてください。

○ニコラェブナ　事故がある前日に、私の母がプリピャチに来ていて、一番下の 2 歳半の娘を実家に連れて行ったのを思い出しました。ですから、プリピャチを出る時には、私と上の娘と主人との 3 人でした。下の娘は事故が起こる前に、母が実家へ来て連れて行きました。

母は実家へ帰る途中に、もう一人の姉が住んでいたコムサモーリスクナドニプレに寄って、それからペルヴォアイスクに行く予定だったので、コムサモーリスクナドニプレで避難してきた私たちが追い付くかたちになりました。

実は、私のもう一人の姉もプリピャチがすごく気に入っていて、そこで生活をしようということで、アパートを交換する依頼の張り紙を事故の前日にプリピャチの町中に出したばかりでした。

○川野　ご主人の生年を教えてください。

○ニコラェブナ　1950 年 10 月 6 日です。

○川野　ご主人は現在、お元気ですか。

○ニコラェブナ　心筋梗塞 2 回、脳卒中 1 回、心臓手術を 1 回しました。原発には事故後 3 年働いていて、健康状態は年々悪くなっています。心臓手術の費用は、日本の方々からの支援で行われました。

○川野　ご主人の名前を確認させてください。

○ニコラェブナ　ノーサチ・ニコライ・アンドレイビッチです。

○川野　ニコラェブナさんにはお子さんが 2 人いらっしゃいましたね。現在体調などはいかがですか。

○ニコラェブナ　上の娘は 1975 年生まれで、今は子どもが 2 人います。その娘の子どもたちは、非常に体が弱いです。下の娘は、まだ結婚していません。働いています。

○川野　たしか 1983 年に生まれたお嬢さんでしたね。

○ニコラェブナ　はい。上の娘が 1975 年生まれ、下の娘が 1983 年生まれです。

○川野　分かりました。続きをどうぞ。

○ニコラェブナ　事故後、車で移動しましたが、車は非常に汚染されていて、到着した時には子どもたちも咳をしたり、口の中に口内炎ができたりして状態が良くなかったです。私の姉などは、すぐに病院に入院したりするぐらい体調が悪くなっていました。病院に到着した時、私たちはホールボディカウンターで検査を受けましたが、みんな線量が高い状態でした。

しかし到着後、大変なストレスで、実家で 3 リットルぐらいの自家製のウオツカを飲んでいた主人は、まったく問題がありませんでした。

○川野　分かりました。続いて、現在のお住まいの形態を教えてください。

○ニコラェブナ　3 部屋で約 90 平米のアパートメントです。

○川野　それは 1986 年に支給されたアパートですか。

○ニコラェブナ　そうです。当時は、家族の人数に応じて部屋の広さが決められて与えられていました。

○川野　いろいろな人に話を聞くと、アパート配給に関係することで嫌がらせを受けたり、やっかみがあったという話をよく聞くのですが、ニコラェブナさんご自身は、何かそういったことを経験されたことがありますか。
○ニコラェブナ　もちろん、そういうことは私も感じました。それもあって、私たちはこのようなクラブをつくったのです。私もキエフの方々の心情は理解できます。たくさんの人数がまとまってやってきて、その人たちは自分たちよりもいい補償金といいましょうか、恩恵を受けているわけですから。
○川野　具体的に嫌がらせなどを経験されたことがありますか。
○ニコラェブナ　私自身が嫌な目に遭ったことはなかったのですが、常にそういう雰囲気は感じていました。そういった雰囲気もあって、私も仕事になかなか就けなかった。
○川野　先ほど補償の話をされましたが、今現在、どういった補償を受けておられますか。
○ニコラェブナ　私の実家があったペルヴォアイスクの町に、29 人のプリピャチからの避難住民がいたのですが、彼らは 5 月 6 日に全員が集められて、ドニポルトロスクにある病院に送られ、そのうち半分は入院させられました。

5 月 6 日に病院に行って、病院で服なども全て取られて除染されました。その後、病院からもらったのは、少し色の付いたガウンだけでした。他に着るものもなくて、お金もなかったので、私たちはそこの行政区のトップの所に行き、「私たちにお金をください。何とかしてください。そうしなければ、私たちは 5 月 9 日のメーデーのパレードに、このままの服装で行きます」と訴えました。その前に、私たちは被災者にお金がもらえるということを聞いていたので、そこの行政のトップの人にそう伝えたところ、一人 200 ルーブルずつお金をくれました。

その当時の 200 ルーブルというと、1 カ月分の給料に匹敵するもので、120 ルーブルもらえれば、いい給料とされていた時代でした。その 200 ルーブルで、いろいろなものを買いに行きました。
○川野　今現在の補償を教えてください。
○ニコラェブナ　まず、新しくキエフのアパートメントをもらいました。何もない部屋だったので、壁紙から家具も全て、家の中のものを揃えるためのお金として 1 万ルーブルをもらいました。
○川野　1 万ルーブルをもらったのは、1 回きりですね。
○ニコラェブナ　そうです。

それとは別に、私たちの車は除染の対象になって回収されましたので、車の補償として、約 5,000 ルーブルをもらいました。車の補償金額は、その車の年数や車自体の型によって違いました。私たちの車は非常に汚染がひどくて、何度も何度も洗浄したのですが、それでも線量計で測るとブザーが鳴るような状態でした。いまだに、私の家のその車が置いてあったところは線量が高くて、測るとブザーが鳴るような状態です。

その補償金 5,000 ルーブルにお金を足して、また違う車を買いました。ですから、今、私たちが乗っている車というのも、1987 年ぐらいから乗っているもので、事故と同じぐらいの年

数が経った古い車です。

他には、私は月に 1,500 グリブナーをもらっています。これが私の年金額です。私は障害者ではないので、この 1,500 グリブナーの中にチェルノブイリ被災者に対する食事の補償みたいなものが入っているらしいのですが、詳しくは分かりません。もらっているのは 1,500 グリブナーです。

私は障害者の認定を受けられる機会もあったのですが、実際は障害者ではなかったので、お金のためだけに障害者になることを拒否して、今の障害者ではない状態の年金をもらっています。主人は第 2 カテゴリーの障害者で、チェルノブイリ被災者、さらに事故処理作業者ですので、昨年からこの 2 年間、月に 5,000 グリブナーをもらっています。それまでは 2,500 グリブナーだったのですが、一昨年に大々的なキャンペーンでデモンストレーションがあって、その結果、2,500 グリブナーだったのが 5,000 グリブナーに上がりました。年金額は常に変動していたので、何年から 2,500 だったかは正直覚えていません。

○川野　被災者ということで、例えば公共機関が無料になるとか、子どもの給食費が何分の 1 になるという話をよく聞くのですが、そういった補償の内容を教えてください。

○ニコラェブナ　公共料金が 50%オフで、市が運営する乗り物、地下鉄、トロリーバスは無料です。その代わり、障害者の提示を求められます。

それ以外にも、例えば、以前は保養を受ける権利が無料であったのですが、今はそれを受けることが非常に難しくなっています。他にも 1 年間で 70 グリブナー、健康改善に対する支援ということで支給されていますが、ここ 3 年間は、その 70 グリブナーも支給されていないと思います。

○川野　では、今ある補償というのは、公共料金が半分で、トロリーバスなどの市が運営する公共機関が無料であると、その二つと考えていいですか。

○ニコラェブナ　それとは別に、1 年に 1 回だけ、ウクライナ国内に限っての移動費、例えば、私が 5 回実家に帰るとしたら、そのうち 1 回だけ、列車の 3 等客室の往復の費用の 50%割引を受けることができます。それは国内に限ります。

主人に関しては、年に 1 回だけ、国内での移動の列車の費用を 100%もらうことができます。

○川野　それは毎年使われますか。

○ニコラェブナ　数年にわたって使っています。もう一つ、キエフには医学放射線センターという病院があるのですが、そこで 2 年に 1 回、全項目にわたる健康状態の検査が行われます。

○川野　少し確認です。ご主人は今、5,000 グリブナーの年金があるということでしたが、そのうち、チェルノブイリで被災したということで、幾らプラスされた額をもらっているのですか。要するに 5,000 グリブナーのうち、幾らが補償額ですか。

○ニコラェブナ　よくわかりません。2,500 グリブナーぐらいでしょうか。年々物価の上昇とともに少しずつ金額が上がっていって、最終的には 2,500 まで上がりました。しかし、それだけでは生活できないということで、主人はタクシーの運転手の仕事をしたり、プールか何かの建築の仕事をしたりして、副収入を得ていました。

そうしたところ、チェルノブイリの被災者の方々が裁判を起こして、その結果、5,000 ルーブルまで上がりました。しかし、金額の内訳は支給を行う機関が独自に計算しているので、何に対して幾らもらっているかは、正直のところまったく分かりません。

○川野　プリピャチ時代の話ですが、ご夫婦お二人の月収はどのぐらいありましたか。

○ニコラェブナ　昔のことすぎてすぐには思い出せません。今思い出してみます。ちょっと待ってください。

私の給料は、100 ルーブルから 120 ルーブルぐらいでした。主人の給料はよく覚えていません。

○川野　お二人で生活されて、その月収で十分でしたか。

○ニコラェブナ　悪くなかったです。発電所の給料というのは、ほかの仕事と比べてもいい給料でした。

○川野　もし原発事故がなければ、ずっとプリピャチに住んでいらっしゃいましたか。

○ニコラェブナ　私はプリピャチを離れなかったと思います。主人も離れたくなかったと思います。私はキエフは嫌いです。車が多くて、大きい町ですから。

プリピャチは森の中に町があって、そこら中にバラがあって、窓を開けるとリスがいました。川があって、キノコがあって、森の中にベリーがあって、とても美しかったです。

○川野　プリピャチに住み続けることができていたら、ニコラェブナさんはそのまま文化センターで働いて、ご主人は原発で働いていらっしゃったと思いますか。

○ニコラェブナ　はい、そう思います。

○川野　今、何が一番不満ですか。

○ニコラェブナ　まず一番は健康状態です。例えば、主人の足が腫れ上がったり、薬を買う必要があります。

○川野　ご自身の健康状態はどうですか。

○ニコラェブナ　私は考えないようにしています。私も今、足に問題があります。初期の食道癌も見つかりました。内視鏡を入れて、そこの先から細胞を取って検査したところ、癌細胞が見つかったのですが、今現在は治りました。

○通訳　どうやって治したのですか、手術をしたのですか。

○ニコラェブナ　いえ、手術はしていません。民間療法で治しました。それ以外には、血圧が高かったりしています。

○川野　健康に関しては不安がありますか。

○ニコラェブナ　私自身の健康に関しては、正直恐怖は持っていません。初めは持っていましたが、周りのみんなは健康に問題を抱えていますし、死んでいっていますから、私自身のの健康よりも、私の主人の健康をより心配しています。

○川野　そういった健康状態の悪さというのは、チェルノブイリ原発事故の影響だと思いますか。

○ニコラェブナ　事故前はまったく健康な体だったのですが、事故後、このように健康状態が

悪くなったので、チェルノブイリ原発事故の影響だと私は考えています。主人もが心臓や血圧のほうに問題が出始めたことが原因で、仕事を辞めて、原発を離れました。

○川野　少し大きな質問を幾つかします。それで終わります。

原発事故で自分の人生が大きく変わったとお思いになりますか。

○ニコラェブナ　はい、本当に大きく変わりました。

○川野　原子力発電について、どう思われますか。

○ニコラェブナ　私は 1995 年から 1998 年の間、チェルノブイリ原発のキエフ代表部で働いていました。私は情報部にいたので、そこでかなり多くの文献を読み込んで、火力、原子力などの発電システムについて、かなり詳しく調べました。その当時、私は原発は善だと、必要なものだと考えていました。なぜなら、火力発電所でもいかに多くの人間が亡くなっているかということも知っていたからです。

しかし、日本で原発事故が起こってから、私もその考えを変えました。日本で起こった地震や、津波などの、いわゆる人間の力の及ばないことが起こると、原発は非常に危険で何もできません。ですから今、私は原発に関しては、善ではなく悪だと考えています。

○川野　福島第一原発事故というのは、ニコラェブナさんにとってもかなりインパクトがあったということですね。

○ニコラェブナ　もちろんです。日本は非常に技術的に高いレベルの国ですから、正直事故が起こるなんて想像もしていませんでした。私は原発に代わるエネルギー供給源が必ず見つかると信じています。例えば、太陽熱発電であったり、もしかしたら違う星から来る人たちが、何か新しいエネルギーの供給方法を教えてくれるかもしれませんし。

今、人間は、あまりにも地球を汚染するような方法をとっています。将来的に、地球にダメージを与えないようなエネルギーの供給方法というのが必要だと考えます。

○川野　先ほど、原発事故以降に生理が止まって、キエフにアパートが供給されたとわかった途端、生理が始まったというお話があって、ニコラェブナさんも非常に多大なストレスを感じられていたいうことでしたが、そういった体験を誰かにお話になったことがありますか。

○ニコラェブナ　はい、もちろん話しました。病院でも話をしました。プリピャチに来て、すぐに生理が止まった際に病院に行ったところ、卵巣が機能していないという診断を受けて、子どもは産めないだろうと言われました。

○川野　先ほど、就職の時に差別があったというお話がありましたが、お嬢さんは 1 人結婚されていますね。お嬢さんの結婚の際、何らかの差別感などを感じたことはありますか。

○ニコラェブナ　特にそういうことはありませんでした。

娘は子どもを 2 人産んでいますが、2 回とも娘がチェルノブイリから来ているということで、出産前に超音波診断を受けた時などに、超音波診断の映像を見せて、「中絶した方がいい」と勧められました。しかし、娘はそれを拒否して子どもを産みました。その生まれた子どもたちは、アレルギー体質であったり、体が弱かったりはしていますが。

特に 2003 年に 2 人目の子どもを産んだ時には、2 軒の産婦人科に断られて、3 軒目でよう

やく受け入れられました。出産は難しいものになると脅かされていました。

娘は、9カ月の妊娠期間中、常に吐き気が続いて、体重なども非常に減ってしまったので、病院の方は中絶を勧めました。妊娠期間中、ずっと吐き気が続いていたためか、本来なら、赤ちゃんの周りに羊水があって、出産するときには、その羊水が出てから子どもが出るのですが、その羊水がまったくない状態でした。その状態での出産は非常に危険だと言われました。

その羊水がなかったせいで、子宮の内壁に子どもの頭がぴったりとひっついていて、帝王切開ではないのですが、子宮をメスで切り開かなければなりませんでした。その時に誤って子宮とひっついている子どもの頭を切らないように、看護婦さんが手を入れて、手で少しずつ剥離していくようなかたちで出産しました。

○川野　最後に1点だけお聞かせください。

先ほど福島第一原発事故の話をしてくださいましたが、実に皮肉なことに、福島第一原発事故が起こってから、チェルノブイリというのは、またあらためて注目されるようになったわけです。チェルノブイリでの経験が、福島に生かされたりすることが今後あると思うのですが、福島原発の被災者が今後いろいろな補償を受けるとすれば、どういったものが一番効果的だと思いますか。

○ニコラェブナ　私たちの時代はソ連時代だったので、国が全て管轄して補償のプログラム等もつくっていました。完全ではなかったかもしれませんが、それが遂行されていました。日本のよくないところは、全ての土地などは個人のものであったりして、除染作業をするにしても、自分の所はできても、他人の所は勝手にはできないような状況であったりするのではないでしょうか。

私が今、日本に対して必要だと思うのは、まず国による補償だと思います。

○川野　どういった補償が必要ですか。

○ニコラェブナ　チェルノブイリでは事故が起こった当時、私たち国民の上には国がついていると、国がしっかりと私たちを保護してくれるというような安心感がありました。今の日本の方々には、それが必要だと思います。日本は経済的な面では大丈夫でしょうから、メンタル的な部分で人々を安心させることが大事だと思います。

全ての病気が、頭や心を原因として起こるものですから。私がキエフにアパートを支給されると聞いた途端に生理が始まったように、精神的な影響というのは非常に大きいんです。

○川野　分かりました。1986 年の避難時の様子など、大変貴重なお話をいただきました。ありがとうございました。

私からの質問は以上です。平岡先生から何か質問はありますか。

○平岡　今現在、下のお嬢さんの健康状態はどうですか。

○ニコラェブナ　下の娘に関しましては、幸い事故が起こる前にプリピャチにいなかったので、家族の中では健康状態が一番いいです。特に、彼女以外の3人は、汚染がひどい赤い森の辺りを、歩くぐらいのゆっくりしたスピードで通りましたが、彼女はそこも通っていませんから。

○川野　もう1点だけ、最後に質問させてください。お子さんもそうですが、やはりお孫さん

の健康に関しては不安ですか。

○ニコラェブナ　上の娘の子どもですが、2人の息子は非常に健康状態が悪いです。上の孫は今8年生ですが、頭痛を伴う血圧と、生まれた時からアレルギーがひどくて、何も食べられないような状態でした。手や足などの皮膚がただれるような症状ももひどくて、特に冬場になると、それがひどくなります。

弟のほうも同様に、手の皮がただれたりして、皮膚に問題を抱えています。

○川野　ありがとうございました。貴重なお話をいただきました。どうぞご健康に気をつけられてください。

モーレ・ワシリー・イワノビッチ氏（男性）
2013 年 9 月 15 日実施　通訳：五代氏

インタビュー風景　イワノビッチさん

○川野　それでは、今日お二人目のインタビューを始めたいと思います。

私たちは広島大学から来ました。チェルノブイリ原発事故の被災者の方々に、2009 年から聞き取り調査をしています。この調査を始めた理由は、日本では、原発についてほとんど議論がなされていなかったので、議論の場を設けたいというのと、チェルノブイリ原発事故とは何だったのか考えたいということで、この調査を始めました。

ところが、2011 年 3 月 11 日に福島第一原発事故が起こってしまって、また、あらためてチェルノブイリが今、注目されています。皆さんからお聞きしたことを、こういった記録にまとめて、原発事故とは何なのかというのをみんなで考えたいということで、今、こういった資料を作っています。

○通訳　資料にお名前が記載されることについてのご了承も得ました。写真も大丈夫です。

○川野　それでは早速、始めたいと思います。

まず、氏名、性別、生年月日、人種、宗教、最終学歴について教えてください。

○イワノビッチ　モーレ・ワシリー・イワノビッチです。1952 年 3 月 15 日生まれ、61 歳です。母はロシア人です。全部で 2,500 人ぐらい住んでいるモルドバの中にガガウズという地区があって、父はガガウズ人です。

○川野　ガガウズ人、というのは初めて聞きました。

○イワノビッチ　モルドバのガガウズ人です。

○通訳　少数民族のようです。

○川野　モルドバ人ではないのですか。

○イワノビッチ　違います。それは違う民族です。ブルガリア人、ガガウズ人、モルドバ人、ウルマニア人、その辺りの民族は隣接し合っていますが、違う民族です。歴史の話になりますが、そこはローマ時代に第 6 ローマ帝国と戦った地区です。

宗教はウクライナ正教です。キエフ工科大学の電気工学部の卒業です。チェチェンのグロズヌイという町で生まれました。1958 年にチェルカッサ州のバトゥーチナという町にチェチェンから移り住みました。1970 年に徴兵で軍隊に行き、1970 年から 2 年間、軍隊にいました。

○通訳　軍隊に行ったということですが、具体的にはどこに行ったんですか。

○イワノビッチ　私はロケット部隊に所属していましたので、詳しい場所についてはお話しす

ることができません。

徴兵が終わり、軍隊を退役した直後、レーニングラード海洋高等専門学校に入学しました。海軍ではなくて、海洋高等専門学校です。今、その学校はレーニングラードからサンクトペテルブルクに移転しています。そのレーニングラードの大学で 4 年間勉強して、優秀な成績を収めて、卒業後、就職先としてオデッサに送られました。そこで、一般客船の電気技師として働きはじめました。

○川野　オデッサには何年いらっしゃったのですか。

○イワノビッチ　1980 年までオデッサで働いていました。1980 年にプリピャチに行きました。

○川野　キエフ工科大学はいつ卒業されたのですか。

○イワノビッチ　私はオデッサに行きましたが、オデッサで働きながら、オデッサ工科大学で同時に勉強を始めました。オデッサ工科大学にプリピャチから来ていた同級生がいて、彼から「プリピャチはいい所だし、仕事もあるから行こう」と説得されて、1980 年にプリピャチに行きました。

1980 年にプリピャチに移ってからは、オデッサの工科大学からキエフの工科大学に移りました。キエフ工科大学は通信教育でしたから、プリピャチで働きながら勉強していました。プリピャチでは、3 号炉と 4 号炉で電気技師として働いていました。

○川野　3 号炉と 4 号炉は同じ業務だったのですか。

○イワノビッチ　3 号炉と 4 号炉の両方に、私は関与していました。

○川野　イワノビッチさんは、3・4 号炉両方の電気技師だったわけですね。

○イワノビッチ　そうです。当時、1・2 号炉が一つのブロック、3・4 号炉がもう一つのブロックと分かれていました。

○川野　先ほど、オデッサ工科大学に行っていたプリピャチ出身の友人に誘われたということですが、彼はなんと言って誘いましたか。

○イワノビッチ　彼からは「プリピャチに行けば、すぐに住む所として寮が与えられる。3 年待てば、アパートメントがもらえる」と言われました。

○川野　それは魅力的だったわけですね。

○イワノビッチ　はい、とても魅力的でした。当時、キエフでもオデッサでも、アパートをもらうには 20 から 25 年ぐらい待たなければなりませんでした。しかし、プリピャチでは 3 年でもらえるということで、非常に魅力的でした。

○川野　プリピャチでの給料はどうでしたか。

○イワノビッチ　給料に関しては、原発でもオデッサでも差はありませんでした。役職によっては、原発の方が若干高かったです。

○川野　その後、1986 年までプリピャチにいらっしゃったということですね。

○イワノビッチ　1989 年の 9 月まで原発で働いていました。1986 年の移住した日に、家族はプリピャチを離れましたが、私は残って働き続けました。

○川野　チェルノブイリに残ったということですね。

○イワノビッチ　先ほどの話にも出てきた、ミドリノモイスという、原発の事故処理作業者のために特別に作られた宿泊施設に滞在しながら働いていました。
○川野　原発事故当時は、ご家族がいらっしゃったのですか。
○イワノビッチ　結婚した年は、原発事故よりもかなり前です。1977 年に結婚しました。
○川野　オデッサ時代ですね。
○イワノビッチ　はい。
○川野　お子さんはいらっしゃいましたか。
○イワノビッチ　はい。1979 年に子どもが生まれました。
○川野　男の子ですか。
○イワノビッチ　はい、男の子です。家族 3 人でプリピャチに行きました。
○川野　1986年に家族は避難されたということでしたが、家族はどこに避難されたんですか。
○イワノビッチ　私の両親が住んでいた、チェルカッサ州のバトゥーチナに行きました。その後、アパートメントの支給を受けてキエフに移りました。
○川野　キエフに移ったのはいつですか。
○イワノビッチ　1986 年の 9 月にアパートを支給されました。しかし、私はその後も原発で働き続けました。
○川野　ということは、ウイークデーは原発とキエフを行ったり来たりしながら働いていらっしゃったんですか。
○イワノビッチ　はい。15 日間向こうで働いて、15 日間キエフで過ごすという感じでした。15 日間、毎日 10 時間ずつ働きました。
○川野　1989 年までその仕事をされた後、どうされましたか。
○イワノビッチ　1989 年からは、キエフの上下水道の国営会社で働いていました。45 歳まで働いて、事故処理作業者は 45 歳から年金が受給できますので、1997 年、45 歳になった時に年金受給者になりました。
○川野　それ以来は働いていらっしゃらないのですか。
○イワノビッチ　働いていません。1997 年以降、工場などの体を使う仕事はしていません。でも私はダーチャを持っていますから、体を使う仕事はしています。それで給料をもらうわけではないですが。私の手を見てください。クルミを剥くと手に色が着くんですよ。
○川野　最初に見た時は、工場かどこかで仕事をされているのかと思いました。
○イワノビッチ　いえ、これはクルミです。機械の油は洗えばすぐに落ちますが、これは時間がたたないとなかなか落ちません。
○川野　1986 年 4 月 26 日当時の家族構成を教えてください。
○イワノビッチ　私と妻と息子の 3 人です。
○川野　奥さまの生年を教えてください。
○イワノビッチ　妻の生年月日は、1960 年 6 月 1 日です。
○川野　奥さまは、今お元気ですか。

○イワノビッチ　いえ、たくさん手術をして病気を持っています。
○川野　プリピャチ時代のお話を幾つかお聞きします。1980 年にプリピャチに行かれたということでしたが、どんなアパートを提供されましたか。
○イワノビッチ　まずプリピャチに私は 1 人で行きました。ワンルームに男 2 人の寮をあてがわれました。1 年間そこで働いて、1 年後に家族用の寮を支給されたので、家族を呼びました。それまで妻と子どもは実家にいました。
○川野　その家族用の寮は、どんなものか覚えていらっしゃいますか。
○イワノビッチ　17 平米の一部屋の所でした。アパートメントをもらうまで、そこで 3 人で暮らしました。4 年目に、全ての設備が整っている 2 部屋のアパートメントをもらいました。
○川野　それは 1984 年ですね。
○イワノビッチ　はっきりとは思い出せませんが、1984 年か 1985 年か、それぐらいだったと思います。
○川野　1986 年 4 月 26 日の原発事故発生時のお話を聞かせてください。4 月 26 日の深夜に事故がありました。その時にイワノビッチさんは何をされていましたか。
○イワノビッチ　私は家にいたのですが、呼び出しがあって、夜の 12 時に 4 号炉に行きました。私は 3 号炉と 4 号炉の停止・起動の全作業工程に、必ず立ち会わなければいけない職種でした。ちょうどその時、4 号炉を停止させたので、私はその場に駆けつけました。
　なぜ私が立ち会わなければならなかったかと言いますと、原子炉を止める際と起動させる際に、安全装置が実際に働くかどうかをチェックすることができたからです。原子炉の安全システムというのは、常に待機状態にあって、完全にコンピューター制御されているものでした。それが実際に働くかどうかを見ることができるのは、停止させる時と起動させる時だけでしたから、私たちは停止時と起動時の動きを見ることで、実際に安全システムが正確に作動しているかどうかのチェックができたんです。
○川野　イワノビッチさんは事故が起こった時、4 号炉にいたんですか。
○イワノビッチ　はい、そうです。
○川野　どんな様子でしたか。
○イワノビッチ　私は担当していた電気関係の制御室にいて、そこで安全装置が動くのを見ていました。安全装置の動作は、例えば、1 秒目にこういうことが行われて、2 秒目にはこれが行われて、3 秒目には…というように、秒数によって何が行われるか決まっているのですが、24 秒目に爆発音を聞きました。
○川野　どんな音でしたか。
○イワノビッチ　地震かと思いました。私は吹き飛ばされました。それぐらい大きな爆発でした。私はその爆発後に、自分が管轄している所を見に走り回りました。
○川野　見て回った様子は、どういう状態でしたか。
○イワノビッチ　私がいた部署にはまったく損傷はありませんでした。私のいた所とリアクターとアノールとの間は、1 メートル以上の厚さがある金属と特別なコンクリートによって遮蔽

されていましたから。
○川野　結局、その日は何時までいたんですか。
○イワノビッチ　お昼の 1 時半まで原発にいました。
○川野　外から原発事故の様子を見ましたか。
○通訳　ずっと中にいて、その仕事が終わって出て、初めて外から見たのですか。
○イワノビッチ　いや、そうではないです。ちょっと書かせてください。
　これが反応炉です。ここに六つのディーゼルジェネレーターがあって、事故の非常用のものです。こちらの方で冷却水のシステムがきちんと作動しているかというのを確認しています。
　それで分かったのが、このディーゼルジェネレーターをチェックするために、ここととここの間を私は行ったり来たりしていたのですが、この反応炉は高さ 12 メートルの所にあって、私は地上と同じ高さにいました。ところが、後で分かったのですが、この辺りには燃料が散らばっていました。しかし、夜中で分からなかったので、そこを行ったり来たりしていました。
○川野　結局、お昼の 1 時半まで、ここの中でずっと作業をされていたのですか。
○イワノビッチ　これは屋外です。70 メートルぐらい。これは外で、外に出て、こちらのほうに行ったりしていました。ですから、外からも見ていました。朝、明るくなってきたら、それが見えました。
○川野　最初に見た時には、どう思いましたか。
○イワノビッチ　取りあえず、生き延びようと思いました。私は海洋高等専門学校に通っていましたが、そこでは「船では決してどんな時にも怖がらない」ということを教育されました。何があっても、すぐに状況分析をして決断を下すということを、その時から教育されていました。
　私たちは原発がどういう状況かというのは分かっていたし、原発から自分たちの家族がいるプリピャチまでの距離も 3 キロと分かっていました。3 号炉と 4 号炉の機械部分は繋がっています。ですから、4 号炉で起こった火災が 3 号炉に移らないように、何とか 3 号炉を助ける作業を、私たちは最後の最後までやっていました。
　そこで、燃料の水素ガス、燃えないガス、これがその冷却、ジェネレーターの所は水素だったのですが、それを窒素に変える作業をしました。そこで、本当に最後の最後のところまで、みんな疲れて、その場に倒れるぐらい作業をしました。そのせいで多くの人間が亡くなりました。
○川野　そういった事故の現場にいらっしゃって、プリピャチの家族には連絡もできなかったですね。
○イワノビッチ　発電所の所長以外、原発の全ての電話回線は遮断されました。唯一電話回線を使えた所長は、モスクワと電話で連絡をしていました。
○川野　ご家族のことが心配だったのではないですか。
○イワノビッチ　もちろんです。
○川野　4 月 26 日 13 時 30 分に仕事を終え、自宅に帰られたということですね。その後はど

のようにして避難されましたか。
○イワノビッチ　私たちはバスに乗って、家族3人でプリピャチからキエフに行き、キエフからバトゥーチナまで行きました。バトゥーチナは私の実家がある所です。その後、私はすぐ原発に戻りました。
○川野　すぐというのは何日後ぐらいですか。
○イワノビッチ　実家に妻と息子と2日間いて、すぐに私だけ戻りました。まず、チェルノブイリのゾーンに入るためには通行証をもらう必要があったので、パリエスカに行って通行証をもらおうとしました。しかし、そこに私の元上司がいました。彼は事故の起こった夜に私が4号炉で作業をしていたこと、そこで相当な量の被ばくをしていると知っていました。その時点で数値は測りませんでしたが、そんな大量の線量を浴びている人間を働かせるのはいけないと言っていました。チェルノブイリ原発で働けるのは、被ばく線量が25レントゲンまでの人間ですが、私は140レントゲン以上の被ばくがあったので、そんな高線量を浴びている人間を事故処理作業に行かせると、私の上司が牢屋に入れられる可能性があったからです。私はニコライブ州にあるユージノクライスクという原発に行かされました。そこで1カ月働いて、1カ月後に呼ばれて、またチェルノブイリに戻りました。
○川野　それ以降、1989年までチェルノブイリ原発で働いていらっしゃったのですね。
○イワノビッチ　その時には、技師が非常に足りなかったので、私は1号炉から4号炉全てを見ていました。
○川野　なるほど、分かりました。プリピャチ時代に奥さまは働いていらっしゃったのですか。
○イワノビッチ　彼女も発電所で働いていました。
○川野　奥さまはどんな仕事をされていたんですか。
○イワノビッチ　モーターを巻く仕事です。モーターは線で巻かれているのですが、それを巻く仕事をしていました。
○通訳　奥さまも技術系の専門なのですか。
○イワノビッチ　いえ、妻は技術系の専門ではないです。でも、故障したときなどに、それをどこかに送って修理をさせると非常に時間がかかるので、すぐにその場で修理をしていました。彼女は、そういう部門で働いていました。
○川野　当時の月収は覚えていらっしゃいますか。
○イワノビッチ　だいたい私は240から250ルーブル、妻が140から150ルーブルぐらいでした。ノルマがあって、そのノルマを達成したときには240から250ルーブル、ノルマを達成しなかった場合は200ルーブルというような感じでした。
○川野　夫婦で400ルーブルぐらいあったわけですね。
○イワノビッチ　そうですね。
○川野　その額は、当時、十分生活ができるような額でしたか。
○イワノビッチ　はい、少し余るぐらいの余裕ができる給料でした。
○川野　当時、車は持っていらっしゃいましたか。

○イワノビッチ　もちろんありませんでした。ソ連時代、車を買うということは不可能に近かったんです。
○通訳　私は以前、プリピャチでは多くの方が車を持っていたという話を聞いたことがあるのですが、そうではなかったのですか。
○イワノビッチ　それは手放した人から買った、中古車だったのでしょう。
当時は、売られるために店に入ってくる車の量自体がすごく少なかったですし、その車を優先的に買えるのは、戦争に従軍した方々だったり、役職のある上の方々でした。普通の場合は、車を買うために 10 年くらい順番待ちをしなければなりませんでした。
　ソ連時代に車を自由に買うことはできませんでした。以前の中国のように、配給制度のようなかたちをとっていました。車やバイク自体が店にない状態でしたから、普通にお店に行って買うことはできませんでした。
○川野　現在、年金受給者ということですが、年金の額をお聞きしていいですか。
○イワノビッチ　これが年金です。それプラス 320 グリブナーというのが食事。健康的な汚染されていない食事ということで 320 グリブナーと、これを足した数字が 1 カ月です。
○川野　それは 1 人分ですか。
○イワノビッチ　私の体調が非常に悪くなったので、妻とは 1990 年に別れました。彼女はより若い男性を見つけたそうです。
○川野　補償について、お聞きしていいですか。食事代が 320 グリブナーと、それ以外にはどういったものがありますか。
○イワノビッチ　私は障害者の第 1 カテゴリーの第 2 グループです。私は事故処理作業者でもありますが、それを理由として、お金を上乗せしてもらっているということはありません。もらっている金額は、先ほど言った 5,243 グリブナーと、食事代の 320 グリブナーに、医薬品のお金であったり、それ以外にいろいろな生活に必要なお金であったり、そういうものが全て含まれた額です。
　それに、いわゆるサナトリウムに行く保養の権利が、だいぶ前は 1 年に 1 回だったのが、2 年に 1 回、3 年に 1 回と減っていって、今では 3 年に 1 回与えられます。
○川野　公共機関についてはいかがですか。
○イワノビッチ　公共機関は無料です。公共料金は 50%割引です。
　もしビジネスをしていれば、税金に関する優遇措置があるらしいのですが、私は商売をやっていないので分かりません。
○川野　イワノビッチさんご自身も、いろいろご病気をされているということですが、今現在の健康状態はいかがですか。
○イワノビッチ　何とか頑張って今の状態をキープしていますが、血液・血管が悪く、強烈な頭痛があります。
○通訳　血液が悪い、というのは癌のことですか。
○イワノビッチ　いえ、癌ではないです。血圧が 3 時間ぐらいの間に強烈に上がったり、下が

ったりということが起こったり、血管がものすごく収縮したりするということです。私はお酒は飲まないのですが、非常に深酒をした次の日の二日酔いのような大変な状態がよくあります。

○川野　薬は飲んでいらっしゃいますか。

○イワノビッチ　はい、常に飲んでいます。

○川野　それは血圧の薬ですか。

○イワノビッチ　その時々の体調によります。今現在、ここが悪かったらこの薬、ここが悪かったらこの薬、というようなかたちで飲んでいます。

○川野　医療費は高いですか。

○イワノビッチ　もちろん高いです。金額は、その場所によって高いものもあれば、安いものもあります。仮に病院に行ったとしても、そこで処方される薬代は自分で払わなければなりません。1 月に入院したのですが、その時にちょうどお金が病院に入った直後で、薬の一部は病院から頂きました。しかし、必要だった高い薬は自分で購入しました。

○川野　将来の健康不安というのは大きいですか。

○イワノビッチ　私はありません。私は日本の神風のように強い精神を持っていますから。私は、強い心を持った神風の人たちを尊敬しています。神風の方々は、自分たちで目標を持って死を選んだ方々です。私も目標を持って今、生きています。息子のためであったり、孫のためであったり、3,000 グリブナーで 4 人家族を養っている息子のためであったり。

○川野　息子さんとは一緒に住んでいらっしゃるんですか。

○イワノビッチ　一緒に住んでいます。

○川野　今のお住まいは、1986 年に配給されたアパートですか。

○イワノビッチ　はい、そうです。2 部屋のアパートです。

○川野　そこに、今、そこに何人でお住まいなんですか。

○イワノビッチ　5 人です。息子と息子の妻と子どもが 2 人です。男の子と女の子です。

○川野　息子さんは今、おいくつですか。確か 1979 年にお生まれでしたよね。

○イワノビッチ　33 歳です。11 月に 34 歳になります。

○川野　お孫さんが 2 人いたら、にぎやかじゃないですか。

○イワノビッチ　まったく寂しい思いをすることはないですね。

○川野　お孫さんはそれぞれ何歳ですか。

○イワノビッチ　女の子が 4 歳、男の子が 1 歳と 2 カ月です。

○川野　今から、大きなことをお聞きしたいのですが、1989 年 4 月の原発事故が、自分の人生に大きく影響を与えたというふうに思われますか。

○イワノビッチ　まったくがらっと変わってしまいました。全部変わってしまいました。悲劇が起こりました。

まず一つは、私は本当に妻を愛していたんです。その妻をなくしてしまいました。そして、プリピャチでの生活は、モスクワと同じぐらい高いレベルの生活でした。その当時は、キエフよりもプリピャチでの生活の方が良かったです。

○川野　プリピャチはどんな町でしたか。
○イワノビッチ　金の町、黄金の町という歌があります。〈プリピャチ市内の位置関係を示しながら〉このあたりは森です。森の中にはキノコがあって、川があって、魚釣りができました。このあたりに船がありました。キエフ行きの船ですね。
○川野　プリピャチの船着き場あたりには、昨日私たちも行きました。
○イワノビッチ　この辺りに私たちは住んでいました。ここにスタジアムがあったんです。ここが、いわゆる川岸、船着き場です。ここにキエフ行きのバスステーションがありました。
○川野　最近、プリピャチに行かれたことはありますか。
○イワノビッチ　一度も帰ったことはありません。行くことはできません。もう完全に自分の人生から切り離しました。
　発電所はこの辺りにあって、道があって、プリピャチはこちらです。ここに橋がありますが、原発行きは向こう、プリピャチ行きはこっちです。
○川野　よくこんなに覚えていらっしゃいますね。
○イワノビッチ　一応、二つ高等教育も持っていますから。
○川野　僕は二十何年前に住んでいたところを、こんなに覚えていないですね。
○イワノビッチ　私は全部覚えていますよ。私はプリピャチを離れて 45 年経ちますが、全ての通りの名前をいまだに覚えています。
○川野　それはすごいですね。
○イワノビッチ　原発では、非常に高い技能を持った人間が働いていました。私には 2 人の部下がいたのですが、2 人とも高等教育を受けている人間でした。この原発で働くために、どれだけ競争が激しかったか想像できますか。
○川野　分かりました。原子力発電について、どう思いますか。
○イワノビッチ　私の個人的な意見を申し上げますと、人類がそれに代わるエネルギーを身につけられない限り、必要だと思います。
○川野　福島第一原発事故をどう思いますか。
○イワノビッチ　日本で起こったことは悲劇だと思います。日本人は非常に勤勉な方々ですから、私も心より敬愛しています。度重なる地震にもかかわらず、あきらめずに立ち向かっていく姿は本当に感激します。ですが、今回の福島原子力発電所の事故に関しては、まったくもって突然起こった想定外のことですので、対処ができなかったのは仕方がないと思います。自然災害を予知することは不可能でしょうから。強いていうならば、原発はより被害の起こりにくい、事故の可能性の少ない場所、あるいは地震の起こりにくそうな場所を選んで建てることだと思います。
　今現在使われている、石油や石炭などの燃料は、いずれ底を尽きてしまいます。原子力発電も放射能廃棄物などの処理の問題はあります。しかし、石炭やガス、石油などというのは、使用後の老廃物処理などから考えても、原子力エネルギーよりも自然に及ぼす被害は大きいです。

〈ここで音声中断〉

○イワノビッチ　原発を止めるとき、ロケットを飛ばすのと同じようにカウントダウンが始まるのですが、それが始まった途端に、私は制御室を出て、自分の見なければならない部門に階段を下りていきました。　しかし、制御室を出た瞬間に、すごく嫌な、何か起こるのではないかという変な胸騒ぎが起きました。当時、私が若かったこともあって、そのまま特に気にも留めずに階段を下りていきましたが、ほどなくして爆発が起こりました。制御室を出た瞬間に、嫌な感覚が襲ってきたことを、はっきりと覚えています。

爆発後ですが、事故が起こった時に、これは原子炉の高さが 12 メートル上の所ですが、私は自分の 3 号炉・4 号炉を制御している機械部門に行くために、廊下を通って、こちらの機械室のジェネレーターに、冷却水のポンプが作動しているかどうかというのを確認に行きました。全てしっかりと動いていることを確認しました。

さらに、車が入るような大きな門があったのですが、爆発でその門は吹き飛んでいました。私はここに止まって、その入り口から 4 号炉を見た時に、それは事故が起こった数秒後だったかもしれませんが、車が入る用の門が吹き飛んでいて、原子炉までの距離は約 10 メートルか 20 メートルぐらいなのですが、ニュートロンの衝撃を、波を浴びたような感じで、体中が沸騰するような感覚に襲われて、急いで建物の中に逃げ込みました。

○川野　カウントダウンと、この吹き飛んだところというのが非常に印象深いということですね。

○イワノビッチ　はい、非常に強く印象に残っているところです。

○川野　それをどういった時に思い出しますか。

○イワノビッチ　特に何かの時に思い出すということはありません。

○川野　最後に教えてください。一つは、アパートを配給された時に、何らかの差別とか偏見とか嫌な思いとかをされたことはありますか。

○イワノビッチ　人それぞれだと思うのですが、もともと性根が悪かった人間は、もっと悪くなったということがあるかもしれません。私個人に関しては一度だけ、公共交通機関を無料で使用できるということに関して、やっかみを言われたことがあります。

○川野　それはイワノビッチさんご自身に対して言われたということですか。

○イワノビッチ　はい。1 人だけですが、そういうことを言ってきた人間がいました。彼は田舎の村から来た人間で、20 年から 25 年ぐらい待って、やっとキエフでアパートメントをもらったようでした。それに対して、私たちは来てすぐにアパートメントをもらい、なおかつ町中の交通機関も自由に乗れるということで、やっかみを言われたことがあります。その人以外からは、私はそういう目に遭ったことはありません。

○川野　分かりました。最後の質問ですが、チェルノブイリの被災者として、先ほど、いろいろな補償とか、そのケアについてのお話をいただきました。

福島の被災者は、今、10 万人ぐらいが避難していると言われています。将来、故郷に帰る

ことが難しい人たちが数万人いるだろうと考えられるのですが、チェルノブイリの被災者として、福島の被災者たちに対して、どういう補償が必要だとお考えになりますか。

○イワノビッチ　一番大事なのは、まず食料です。汚染されていない、なおかつ余計なものが入っていない、しっかりとした食べ物を与えることが必要だと思います。薬よりも、まずは食料が必要です。食料は健康の源ですから。

そして、次に必要なのは医薬品、薬、治療です。それも、お金を与えるのではなく、物としての薬を与えることです。そうしないと、お金は違うところで使われる可能性もありますから。病院に入院した人に医者が処方箋を出したら、その処方箋にある医薬品をきちんと患者がもらえることが必要です。ウクライナにも法律はあるのですが、それはあくまで紙の上に書かれた法律だけで、実際には守られていません。

そして三つ目は、精神的な支援です。決して自分を失わないように支えることです。私なども、この 26 年の間、ずっと自分を鼓舞し続けてきました。仮にどこかが痛くても、「いや、痛くはない、大丈夫だ」というような感じで、自分で自分を支えてきました。

住居に関しての補償ですが、私たちの場合は、例えば事故前に 2 部屋のアパートメントに住んでいたのであれば、事故後も同様の 2 部屋のアパートメントを支給され、3 部屋だったら 3 部屋のアパートメントが支給されるというような補償がされました。しかし、日本ではそのようにはいかないでしょうから、状況を見て対応する必要があると思います。

○川野　それは今後、非常に大きな問題になると思います。日本は補償問題を今、議論し始めていますが、何も解決しているわけではありません。

○イワノビッチ　当時、私たちは質素な生活をしていましたので、それと同様の生活状態を再構築することは、国にとっては容易だったかもしれません。

しかし、今の日本は、多くの人がもともと高いレベルの生活をしていたのでしょうから、その方々を以前のような生活に戻すためには、相当な予算が必要になるでしょう。ですから、金額的にも元の生活に戻すのは相当大変だと思います。

○川野　私からは以上です。平岡先生、何かご質問があればどうぞ。

○平岡　職場の上司や同僚の中で、この事故が原因と思われるようなことで亡くなられた方はいますか。

○イワノビッチ　たくさんいます。私をプリピャチに行こうと誘った友達は亡くなりました。

○平岡　全て放射能が原因ですか。

○イワノビッチ　私をプリピャチに誘った友達ともう一人の人が、ジェネレーターの水素を窒素に換える作業をしていて、そこで亡くなりました。そこの電気部門の副部長も、とてもいい人だったのですが亡くなりました。

○平岡　生き残った人たちで連絡を取り合っていることはありますか。

○イワノビッチ　そんなに頻繁ではないですが、時々、何かの用事で会ったときなどは話もします。しかし、頻繁に会っているというわけではありません。

私を誘った友人ともう一人は、モスクワの第 6 病院に運ばれて、モスクワで亡くなりました。

もう一人の彼の上司だった人は、それから長く生きたのですが、結局はキエフで亡くなりました。私が原発内で救急車を呼んだのですが、彼らは血を吐いていました。私も朝の6時頃に吐き始めたのですが、血は吐きませんでした。亡くなった人は血を吐いていました。

○川野　松浦さん、何か質問があればどうぞ。

○松浦　事故処理の作業をされたということですが、福島で事故処理作業をした方に、どういう補償があったらいいと思いますか。

○イワノビッチ　今、福島で事故処理作業に従事しているリクビダートルの方々ですが、彼らは自分の意思でそこへ行って、収入を得ているわけです。その収入というのは、そこに行くことによって自分たちが健康を損なったりすること、加えて、後々必要になるかもしれない治療や医薬費も想定しての給料であることを理解しなければなりません。

そして国は、彼らの大変な場所での大変な作業に対してお金を払うわけで、それに伴う結果には一切責任を持ちません。ですから、原発での事故処理作業という仕事は、そのように後々身体等に影響が出るかもしれませんが、その対価としてお金をもらうということを理解しなければなりません。つまり、まず言えるのは、彼らはできるだけ多くのお金を要求することが必要でしょう。

私たちウクライナの共産党の場合は、やり方が違って、「事故処理作業に行かなければ、アパートメントの支給は受けられない」というような、脅しではないですが、そういうニュアンスを伝えられました。

もし、国が原発に作業員を派遣するのであれば、国が彼らの人生を最後まで面倒見る必要があると思います。しかし、そこに自分たちの意思で仕事として行くのであれば、それはその人がもらった給料で、自分の人生に対して責任をもつ必要があるわけです。

ウクライナの場合は、事故が起こって収入を得たり、補償を受けたりしましたが、ひどいことにハイパーインフレが襲ってきて、もらった補償金などの価値が非常に下がってしまったようなことがあったんです。

○川野　基本的には私も同じ考えです。ただ、日本の場合、原発事故処理に携わる人々というのは、基本的には東京電力という一企業の従業員なんですね。ですから、彼らが補償を求める先というのは、東京電力という一つの企業になるわけです。

○イワノビッチ　ウクライナでは、当時、原発は国営でしたから、状況が違います。

○川野　ありがとうございました。

CPHU研究報告シリーズ
研究報告No.56
チェルノブイリ・旧プリピャチ住民へのインタビュー記録（第二報）
編著：川野徳幸

2018 年9 月発行

発　行　　広島大学平和センター
〒730-0053　広島市中区東千田町1－1－89
TEL: 082-542-6975　　FAX: 082-245-0585
E-mail: heiwa@hiroshima-u.ac.jp
URL: http://home.hiroshima-u.ac.jp/heiwa/

※CPHU研究報告シリーズは、IPSHU研究報告シリーズの後継誌です。Noも継承しています。
© 2018広島大学平和センター